

# 史跡 齋宮跡

平成17年度発掘調査概報

2007年3月

齋宮歴史博物館











第146次調査 掘立柱塀SA9472（南から）



第148次調査 全景（北西から）



## 序

平成17年度の史跡齋宮跡発掘調査（計画調査）は、史跡西部（第146次調査）と史跡東部（第148次調査）において実施しました。

史跡西部では、平成14年度から、飛鳥・奈良時代の齋宮の中枢部を確認するための範囲確認調査を線路の北側で実施してきましたが、平成17年度は、地元史跡齋宮跡協議会の皆様のご協力を得て、線路南側の調査を実施しました。平成16年度の第144次調査で東西方向の掘立柱塀を確認するなど、線路南側では飛鳥・奈良時代の中心部が存在するのではないかという期待を抱かせる地域でした。今回の第146次調査では、大型掘立柱塀などを検出するなど、期待通りの貴重な成果を得ることができました。

一方、平安時代齋宮の中心である史跡東部では、これまでの調査で内院であることが判明している鍛冶山西区画北側の西加座南区画で第147次調査を実施し、道路側溝を検出することが出来ました。

ここに、史跡齋宮跡の平成17年度発掘調査概報を刊行することになりましたので、ご高覧いただければ幸いです。

最後に、史跡齋宮跡の保存と調査研究・整備にあたっては、地元明和町、関係機関及び齋宮跡調査研究指導委員をはじめとする諸先生方並びに文化庁の皆様からご指導、ご助力をいただき深く感謝申し上げます。また、発掘調査にご配慮いただきました地元の皆様にも厚くお礼申し上げます。

2007（平成19）年3月

齋宮歴史博物館  
館長 内田 節 夫

## 例 言

- 1 本書は、斎宮歴史博物館が平成17年度に国庫補助金を受けて実施した史跡斎宮跡発掘調査（第146・148次調査）を中心として概要をまとめたものである。
- 2 明和町が、国庫補助金の交付を受け、調査主体となって実施した史跡現状変更等に伴う緊急発掘調査の第147次調査報告書は、別途明和町が刊行している。
- 3 遺構の実測にあたっては、日本測地系による国土調査法（旧国土座標）の第Ⅳ座標系を基準とし、方位は旧国土座標による座標北で示している。
- 4 遺構時期区分の指標となる土器の分類と時期認定については、「斎宮跡の土器」（『斎宮跡発掘調査報告』Ⅰ 斎宮歴史博物館 2001年）による。
- 5 遺構表示記号は次のとおりである。  
SB：掘立柱建物 SD：溝 SE：井戸 SF：道路 SH：竪穴住居跡 SK 土坑  
SX：土壇墓・墓 SZ：落ち込み・その他 pit：柱穴
- 6 遺物実測図は実物の4分の1を基本とし、資料の性格に応じて変更したものである。遺物写真はとくに指定したもの以外は縮尺不同である。
- 7 出土遺物の色調は、日本色研事業株式会社発行『新版標準土色帖』（2004年度版）に拠る。
- 8 遺物の漢字表現については、材質の差による漢字の偏に必ずしも従うことなく、「わん」は「碗」、「つき」は「杯」を用いている。ただし、参考文献などからの引用の場合にはこの限りではない。
- 9 本書の執筆は、泉雄二・大川勝宏・小濱 学・水橋公恵があたり、目次および文末に記した。編集は調査研究課で行った。また、発掘調査および資料整理については、西村秋子・杉原泰子・鈴木美智子・八木光代・水木夏美が補佐した。

# 目 次

I	前言	泉 雄二	1
II	第146次調査	水橋公恵	7
III	第148次調査	小湊 学	37
IV	第2次調査	大川勝宏	47

## 挿 図 目 次

第Ⅰ－1図	史跡斎宮跡位置図	3	第Ⅱ－10図	第146次調査 出土遺物実測図(3)	22
第Ⅰ－2図	平成17年度発掘調査区位置図	4	第Ⅱ－11図	第146次調査 出土遺物実測図(4)	23
第Ⅰ－3図	斎宮跡方格地割区画名称	5	第Ⅲ－1図	第148次調査 調査区位置図	37
第Ⅰ－4図	史跡斎宮跡における大地区表示	6	第Ⅲ－2図	第148次調査 遺構平面図・土層断面図	38
第Ⅱ－1図	第146次調査 大地区・グリッド図	7	第Ⅲ－3図	第148次調査 大地区・グリッド図	39
第Ⅱ－2図	第146次調査 調査区位置図	8	第Ⅲ－4図	第148次調査 出土遺物実測図	40
第Ⅱ－3図	第146次調査 平面図	9・10	第Ⅳ－1図	第2次調査 調査区位置図	48
第Ⅱ－4図	第146次調査 土層断面図(1)	11	第Ⅳ－2図	第2次調査 遺構平面図・調査区地区割図	49
第Ⅱ－5図	第146次調査 土層断面図(2)	12	第Ⅳ－3図	第2次調査 出土遺物実測図(1)	52
第Ⅱ－6図	第146次調査 SA9472・SB9478ほか 平面図・土層断面図	15・16	第Ⅳ－4図	第2次調査 出土遺物実測図(2)	53
第Ⅱ－7図	第146次調査 SH9455・SD9465 ・SE9464 平面図・土層断面図	17	第Ⅳ－5図	第2次調査 出土遺物実測図(3)	54
第Ⅱ－8図	第146次調査 出土遺物実測図(1)	20	第Ⅳ－6図	第2次調査 出土遺物実測図(4)	55
第Ⅱ－9図	第146次調査 出土遺物実測図(2)	21			

## 写 真 図 版 目 次

巻頭1	第146次調査 掘立柱塀SA9472	Ⅲ－2	第148次調査 遺構(2)	43
巻頭2	第148次調査 全景	Ⅲ－3	第148次調査 遺構(3)	44
Ⅱ－1	第146次調査 遺構(1)	Ⅲ－4	第148次調査 遺構(4)	45
Ⅱ－2	第146次調査 遺構(2)	Ⅲ－5	第148次調査 遺物	46
Ⅱ－3	第146次調査 遺構(3)	Ⅳ－1	第2次調査 遺構(1)	60
Ⅱ－4	第146次調査 遺構(4)	Ⅳ－2	第2次調査 遺構(2)	61
Ⅱ－5	第146次調査 遺構(5)	Ⅳ－3	第2次調査 遺構(3)	62
Ⅱ－6	第146次調査 遺物(1)	Ⅳ－4	第2次調査 遺構(4)	63
Ⅱ－7	第146次調査 遺物(2)	Ⅳ－5	第2次調査 遺構(5)	64
Ⅲ－1	第148次調査 遺構(1)	Ⅳ－6	第2次調査 遺構(6)	65



## 表 目 次

第Ⅰ－1表	平成17年度	発掘調査一覧	・ ・ ・ ・ ・	2	第Ⅲ－2表	第148次調査	遺構一覧表	・ ・ ・ ・ ・	41
第Ⅱ－1表	第146次調査	遺構一覧表	・ ・ ・ ・ ・	26	第Ⅲ－3表	第148次調査	出土遺物観察表	・ ・ ・	41
第Ⅱ－2表	第146次調査	掘立柱建物一覧表	・ ・	27	第Ⅳ－1表	第2次調査	遺構一覧表	・ ・ ・ ・ ・	50
第Ⅱ－3表	第146次調査	出土遺物観察表(1)	・ ・	28	第Ⅳ－2表	第2次調査	掘立柱建物一覧表	・ ・	50
第Ⅱ－4表	第146次調査	出土遺物観察表(2)	・ ・	29	第Ⅳ－3表	第2次調査	出土遺物観察表(1)	・	56
第Ⅲ－1表	第148次調査				第Ⅳ－4表	第2次調査	出土遺物観察表(2)	・	57
		緑釉陶器出土地点一覧表	・ ・ ・ ・ ・	40	第Ⅳ－5表	第2次調査	出土遺物観察表(3)	・	58

# I 前 言

## 1 調査の経緯と概要

史跡斎宮跡は、後に斎宮歴史博物館が建設された古里地区での宅地開発計画に伴い昭和45年に発掘調査が始まり、文化庁の補助事業として昭和48年から開始した範囲確認調査を経て、昭和54年3月27日に国の史跡に指定された。県は史跡指定に伴い斎宮跡調査事務所を設置して発掘調査に当たり、平成元年度からは斎宮歴史博物館を建設し、史跡解明のための計画調査を継続して実施している。

斎宮跡の発掘調査は、これまでの調査成果の蓄積から、史跡東部に存在した平安時代の斎宮跡解明が中心となって進められてきたが、史跡西部に存在すると想定されてきた飛鳥・奈良時代の斎宮跡を解明することも重要な課題として残っているほか、鎌倉時代以降の実態についても解明しなければならない課題として残っている。

### 発掘調査

史跡西部での飛鳥・奈良時代の斎宮跡の調査は、対象地域が広いため、効率を考えてトレンチ調査による範囲確認調査を平成14年度から線路北側で実施しており、今年度はその4年次目として、線路南側で第146次調査を実施した。当地域は、史跡内で最も標高が高く、立地条件が最も良好な地域である。当地域の台地縁辺部の調査（第58－4次）では南北方向の掘立柱塀の一部が確認されており、一辺約100mの区画の存在が推定されてきた地域でもあり、初期斎宮の解明を目的として第146次調査を実施した。なお、この調査では、三重大学人文学部と、大学教育の一環として、考古学の知識及び発掘調査方法等の習得を目指す目的で、第146次発掘調査現場を利用した考古学実習に協力した。

史跡東部の調査では、平安時代の斎宮寮の中核部である内院地区の可能性が強い牛葉東・鍛冶山西区画の調査、その最北端の寮庫推定区画について、これまでの数次にわたる調査で区画の解明がほぼ終了している。また、内院の所在する東から3列目の区画は他区画（約120m）に比べて東西幅が約10m広

く、区画の中央を幅10mの南北道路が貫いていることがこれまでの調査で判明している。この道路は、現町道と重なっていることもあり道路側溝については一部が確認されているに過ぎず、内院（鍛冶山西区画）と道路の関係については不明な点が多かった。この側溝について、内院の北側を走る東西道路北側側溝との関係を確認するため、調査区を設定して第148次調査として実施することとなった。

### 整備

史跡整備は平成15年度から中断しているが、今後の中・長期の調査及び整備についての検討を行った。

## 2 調査体制

史跡斎宮跡の調査・整備に関する業務は、斎宮歴史博物館調査研究課（平成17年度は調査研究グループ）が担当した。当報告に関わる組織は以下の体制で行った。

### 平成17年度

竹内英昭（主幹兼グループリーダー）

小湊 学（主事）

水橋公恵（技師）

### 平成18年度

泉 雄二（主幹兼課長）

大川勝宏（主査）

水橋公恵（技師）

## 3 調査研究指導委員会議

斎宮跡の調査・整備について指導・助言を得るため、斎宮跡調査研究指導委員会議を実施している。平成17年度は、平成17年10月18日（火）に開催し、第146・148次調査と今後の整備について指導を得た。指導委員の方々は下記のとおりである（順不同・敬称略）。

上村喜久子（元名古屋短期大学教授）

狩野 久（元京都橘女子大学教授）

北原理雄（千葉大学教授）

佐々木恵介（聖心女子大学教授）

鈴木嘉吉（元奈良国立文化財研究所長）  
 所 京子（岐阜聖徳学園大学名誉教授）  
 八賀 晋（三重大学名誉教授）  
 町田 章（前独立行政法人 文化財研究所 奈良  
 文化財研究所長）  
 渡辺 寛（皇學館大学教授）  
 金田章裕（京都大学教授）

なお、狩野久委員は、平成11年度から委員をお願いしてきたところであるが、平成18年度の委員再任を辞退された。文化庁在任時から斎宮跡の調査・保存等について指導・助言いただいたことに対して感謝の意を表します。

次調査現場の発掘調査の実地体験や斎宮についての室内講義、土器の洗浄体験・接合体験などを行った。

なお、本概報を作成するにあたり、下記の人の助言を得た。記して感謝の意を示したい。（順不同・敬称略、所属は平成17年度当時）

上村安生・奥義次・川崎志乃（三重県埋蔵文化財センター）

（泉 雄二）

## 4 体験発掘

毎年実施している体験発掘は、小学校高学年および中学生を対象とした当館の体験事業で一般公募により14名の参加を得て実施した。8月26日に第146

第Ⅰ－１表 平成17年度 発掘調査一覧

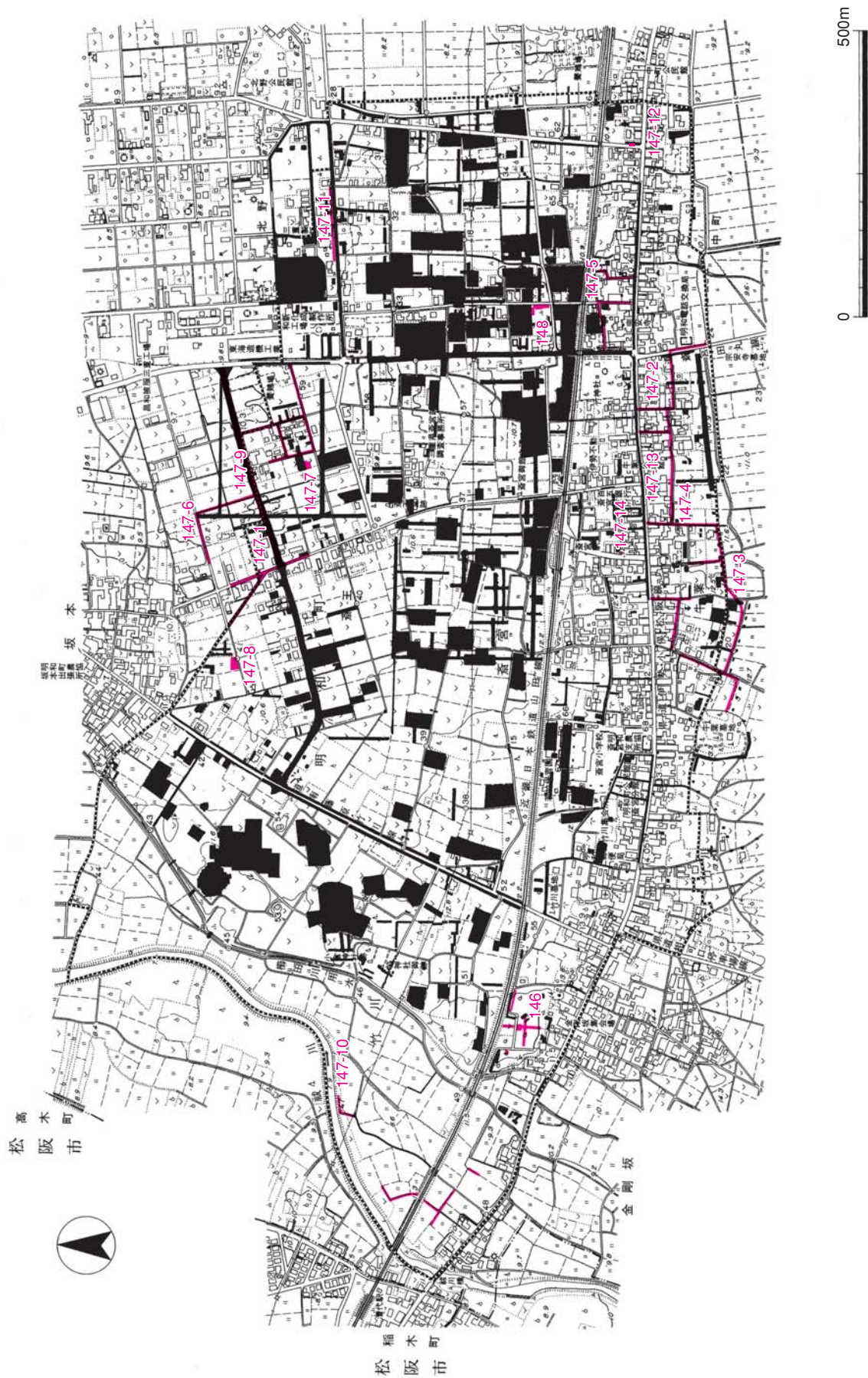
調査次数	地 区	面積(m <sup>2</sup> )	調 査 年 月 日	位 置	土地所有者	現状変更名	保存地区区分
146	G10・FG11	630.0	17年8月22日～11月29日	明和町竹川字中垣内	個人	計画発掘調査	3
147-1	O6	3.0	17年6月9日	明和町斎宮字出在家	個人	個人住宅増改築・浄化槽の設置	4
147-2	R13	2.4	17年6月17日	明和町斎宮	個人	個人住宅新設・浄化槽の設置	4
147-3	L～R13	1724.0	17年6月21日～10月10日	明和町斎宮地内	明和町	上水道事業工事(1工区)	3
147-4	L～R13		17年6月21日～10月10日	明和町斎宮地内	明和町	上水道事業工事(2工区)	3
147-5	L5・6	134.0	17年6月21日～10月10日	明和町斎宮地内	明和町	上水道事業(追加)工事	3・4
147-6	OP5・6 Q6・7	470.5	17年8月5日～12月15日	明和町斎宮地内	明和町	下水道事業工事(20工区)	3
147-7	P・Q7	60.0	17年11月7日～11月22日	明和町斎宮字楽殿	個人	個人住宅新築	3
147-8	L5・6	260.0	17年12月7日～18年1月16日	明和町斎宮字出在家	個人	個人住宅及び農業用倉庫新築	3
147-9	NOP6・OQR7	74.0	17年8月5日～12月15日	明和町斎宮地内	明和町	下水道事業工事(21工区)	3
147-10	E8・D8・9	0.6	18年2月15日	明和町竹川字祓戸	自治会	側溝新設	3
147-11	T・U7	261.7	17年9月30日～18年2月16日	明和町斎宮字東前沖	明和町	史跡公園側溝新設	3
147-12	V13	3.3	17年10月26日	明和町斎宮	個人	個人住宅新設	3
147-13	P13	3.6	17年12月13日	明和町斎宮	個人	個人住宅新設・浄化槽の設置	4
147-14	O12	3.9	18年3月7日	明和町斎宮	個人	個人住宅新設・浄化槽の設置	4
148	S11	230.0	17年9月2日～18年1月10日	明和町斎宮字南加座	明和町	計画発掘調査	1





第 I - 1 図 史跡齋宮跡位置図 (1 : 50,000) 国土地理院発行 1/25,000「松阪」「明野」(平成 4 年)より



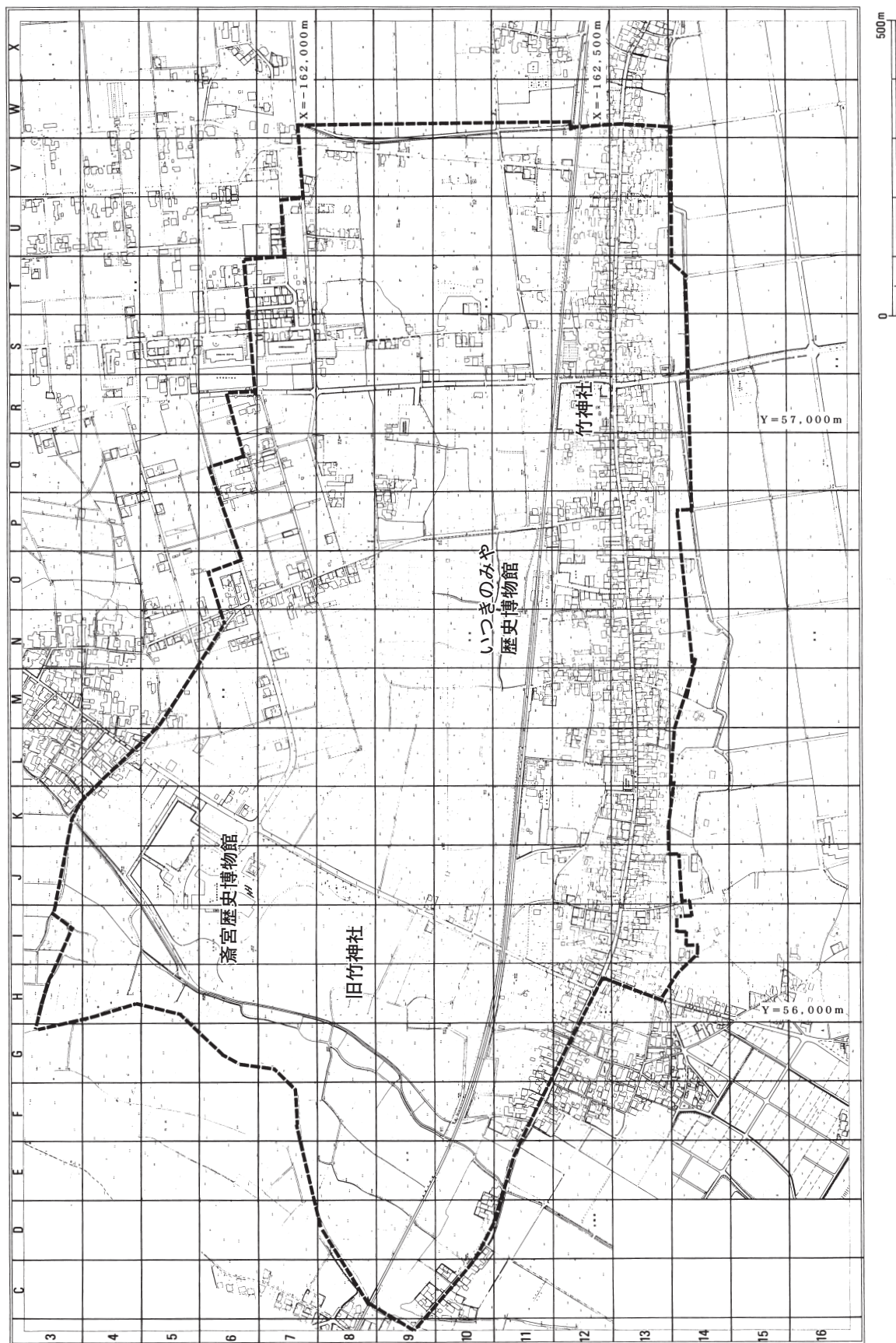


第 I - 2 図 平成17年度発掘調査区位置図 (1 : 10,000)





第 I - 3 図 齋宮跡方格地割区画名称 (1 : 5,000)



第Ⅰ－４図 史跡斎宮跡における大地区表示（２００２年）

※太破線内が国史跡範囲。座標は日本測地系（旧国土座標第Ⅵ系）による



## Ⅱ 第146次調査

## 1 調査の契機と経過

平成17年度第1回目の計画調査として実施した第146次調査では、史跡指定地西部の大字竹川字中垣内地内の台地上を調査対象とした。調査地は斎宮歴史博物館から南へ約600m、近鉄山田線のすぐ南に位置しており、地目は畑地等である。

齋宮歴史博物館では、初期齋宮（飛鳥・奈良時代の齋宮）の遺構検出を目指して、平成14年度から史跡西部で確認調査を行っており、今年で4年目になる。近鉄線の北側を対象に行った過去3年間の調査では、奈良時代の道路側溝（第141次調査）、柵（第144次調査）など、注目に値する遺構が確認されたものの、初期齋宮中枢部分の遺構の確認には至っていない。

今回の調査区付近は、飛鳥・奈良時代の遺構・遺物が多く確認されている史跡西部にあって最も高い場所であり、過去の調査で東西南北の方位にのった柵や建物が確認されていることに加え、現況でも方

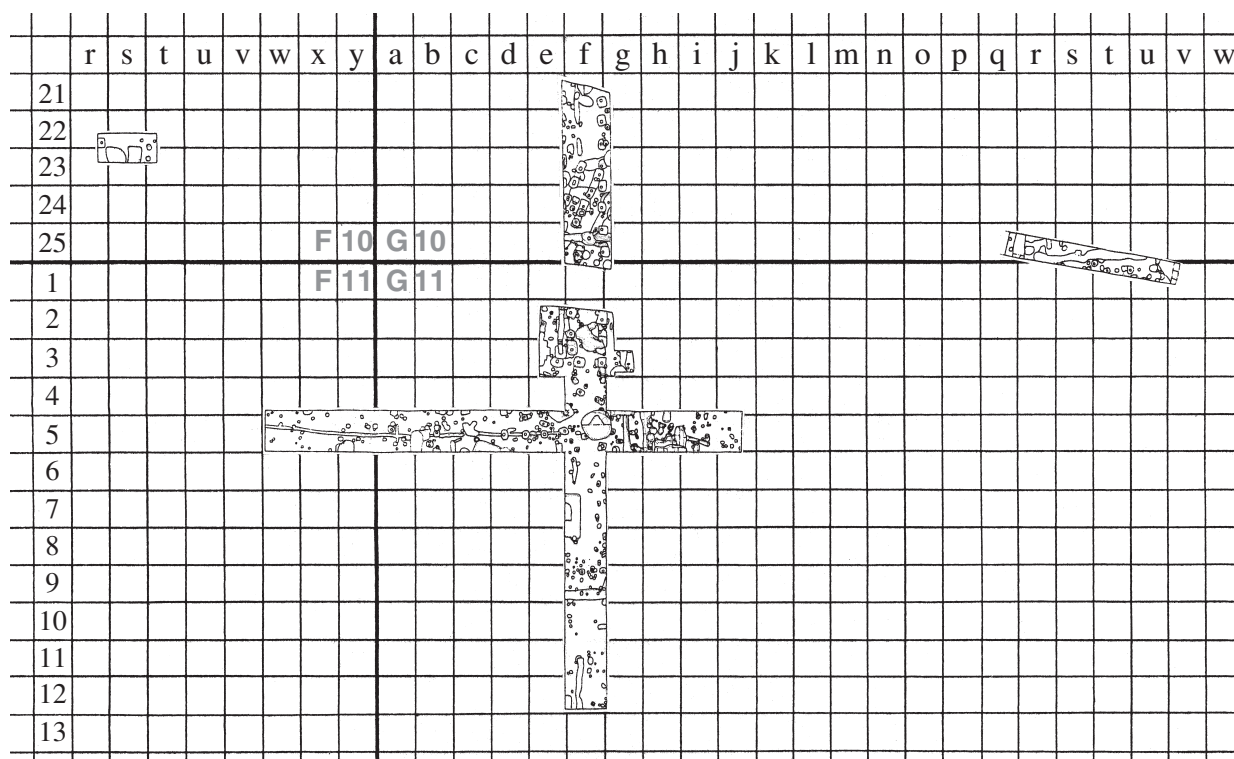
位に沿った約100m四方の地割を見て取ることが  
できるため、従来から初期斎宮の所在地の候補として  
有力視されてきた（泉2005）。第144次調査の概報  
（柴山2006）では、それまでの調査結果を総合して、  
確認された柵を北辺とする一辺約107m（360尺）  
の方形区画が想定されているが、第146次調査地点  
はその想定区画の西端から内側に位置する。

現地調査は、平成17年8月22日に開始し、同年11月29日に終了した。最終的な調査面積は630㎡である。調査期間中、インターンシップ（4名）や三重大大学の考古学実習・博物館学実習を受け入れたほか、8月26日に「夏休みこども斎宮跡体験発掘教室」（参加者14名）を、10月29日に現地説明会（参加者180名）を開催した。

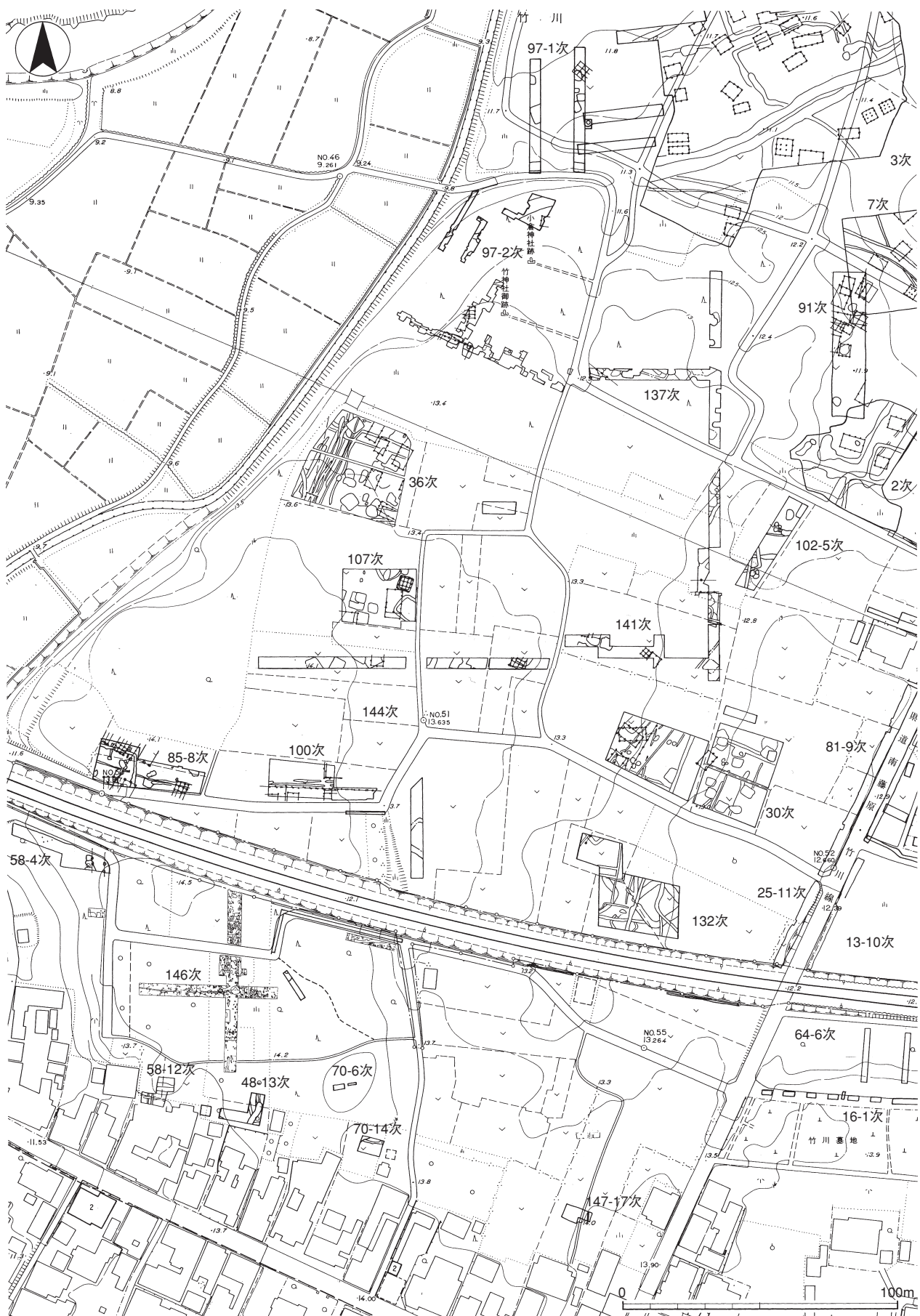
## 2 調査区の層位

基本的な層序は、上から表土（耕作土）・黒褐色土・橙色土（地山）である。

調査に際しては、調査区壁面の土層観察によって、黒



第Ⅱ－１図 第146次調査 大地区・グリッド図（１：800）



第Ⅱ－2図 第146次調査 調査区位置図（1：2,000）

第Ⅱ－３図 第146次調査 平面図（１：２００）









- |                                   |                             |                                |
|-----------------------------------|-----------------------------|--------------------------------|
| 1 表土・耕作土                          | 36 7.5YR4/1 褐灰色粘質土          | 62 7.5YR2/3 極暗褐色粘質土            |
| 2 旧耕作土                            | 37 10YR2/2 黒褐色粘質土           | 7.5YR3/4 暗褐色粘質土                |
| 3 カク乱                             | 10YR5/8 黄褐色粘質土              | 10YR4/4 褐色粘質土                  |
| 4 10YR2/3 黒褐色粘質土 5層よりやや淡色         | 10YR3/2 黒褐色粘質土              | 10YR2/3 黒褐色粘質土                 |
| 5 10YR2/2 黒褐色粘質土 いわゆる黒ボク土         | 38 10YR4/4 褐色粘質土 地山         | 10YR4/4 褐色粘質土を含む               |
| 6 10YR3/3 暗褐色粘質土                  | 39 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土        | 64 10YR3/3 暗褐色粘質土              |
| 7 10YR2/2 黒褐色粘質土 地山Br混(〜φ1cm)     | 40 10YR2/3 黒褐色粘質土           | 65 10YR2/3 黒褐色粘質土              |
| 8 10YR2/3 黒褐色粘質土 しまりなし            | 41 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質土 カク乱   | 66 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土           |
| 9 10YR2/3 黒褐色粘質土 しまりあり、地山Br含む     | 42 10YR3/3 暗褐色粘質土 混在        | 67 10YR2/2 黒褐色粘質土              |
| 10 10YR2/3 黒褐色粘質土 9層よりしまりあり       | 43 10YR2/3 黒褐色粘質土           | 68 10YR6/2 灰黄褐色粘質土             |
| 11 10YR2/2 黒褐色粘質土                 | 44 10YR2/3 黒褐色粘質土           | 69 10YR4/6 褐色粘質土               |
| 12 10YR2/3 黒褐色粘質土                 | 10YR2/1 黒色粘質土               | 70 10YR2/3 黒褐色粘質土              |
| 13 10YR2/3 黒褐色粘質土 しまりあり           | 10YR4/4 褐色粘質土               | 71 10YR2/2 黒褐色粘質土              |
| 14 10YR2/3 黒褐色粘質土 しまりなし           | 10YR5/6 黄褐色粘質土              | 72 10YR2/2 黒褐色粘質土              |
| 15 10YR2/3 黒褐色粘質土 しまりややあり         | 45 10YR2/2 黒褐色粘質土           | 73 10YR2/3 黒褐色粘質土              |
| 16 10YR2/3 黒褐色粘質土 しまりなし           | 10YR4/4 褐色粘質土               | 74 10YR2/3 黒褐色粘質土 73層よりしまり悪い   |
| 17 10YR4/4 褐色粘質土                  | 10YR7/8 黄褐色粘質土              | 75 10YR3/4 暗褐色粘質土 地山粒多い        |
| 18 10YR3/4 暗褐色粘質土                 | 46 10YR2/3 黒褐色粘質土           | 76 10YR3/3 暗褐色粘質土              |
| 19 10YR2/2 黒褐色粘質土 地山Br(10YR5/6)含む | 10YR3/1 黒褐色粘質土              | 77 10YR2/3 黒褐色粘質土              |
| 20 10YR3/4 暗褐色粘質土                 | 10YR5/8 明褐色粘質土              | 78 10YR2/3 黒褐色粘質土              |
| 21 10YR2/3 黒褐色粘質土 石多い             | 47 10YR1/3 黒褐色粘質土 遺物含む      | 79 10YR2/3 黒褐色粘質土 78層よりやや淡い    |
| 22 10YR3/4 暗褐色粘質土 18層と同じか。礫多い     | 48 10YR2/3 黒褐色粘質土           | 80 10YR2/2 黒褐色粘質土              |
| 23 10YR4/4 褐色粘質土 粘質高い             | 10YR4/4 褐色粘質土               | 81 10YR2/3 黒褐色粘質土              |
| 24 10YR2/3 黒褐色粘質土 小礫(〜φ3cm)多い     | 10YR5/6 黄褐色粘質土              | 82 10YR2/3 黒褐色粘質土              |
| 25 10YR3/3 暗褐色粘質土                 | 49 10YR1/3 黒褐色粘質土           | 83 10YR7/6 明黄褐色粘質土 黒褐色土粒含む     |
| 26 10YR3/4 暗褐色粘質土                 | 50 10YR3/3 暗褐色砂質土 小礫、遺物を含む  | 84 10YR2/2 黒褐色粘質土 土器粒、炭粒を含む    |
| 27 10YR4/4 褐色粘質土 粘質高い             | 51 10YR3/3 暗褐色砂質土           | 85 10YR2/2 黒褐色粘質土              |
| 28 10YR3/4 暗褐色粘質土                 | 10YR4/4 褐色粘質土をブロック状に含む      | 86 10YR2/3 黒褐色粘質土              |
| 29 10YR4/4 褐色粘質土 地山Br多い           | 52 10YR3/3 暗褐色砂質土           | 87 10YR2/3 黒褐色粘質土 86層より薄い      |
| 30 10YR2/3 黒褐色粘質土                 | 53 10YR3/2 黒褐色粘質土           | 88 10YR2/3 黒褐色粘質土 しまりやや悪い      |
| 31 10YR2/2 黒褐色粘質土                 | 54 10YR2/3 黒褐色粘質土           | 89 10YR3/4 暗褐色粘質土 礫多い          |
| 32 10YR3/3 黒褐色粘質土                 | 55 10YR4/4 褐色粘質土            | 90 10YR3/4 暗褐色粘質土              |
| 33 10YR2/3 黒褐色粘質土                 | 10YR3/3 暗褐色砂質土 混在           | 91 10YR2/3 黒褐色粘質土              |
| 10YR2/1 黒色粘質土                     | 56 7.5YR2/2 黒褐色砂質土 遺物含む     | 92 10YR2/3 黒褐色粘質土 土器粒、地山粒、炭を含む |
| 10YR5/6 黄褐色粘質土をブロック状に含む           | 57 10YR3/3 暗褐色粘質土 遺物、礫を含む   | 93 10YR4/4 褐色粘質土               |
| 34 10YR2/3 黒褐色粘質土                 | 58 10YR3/3 暗褐色粘質土 57層よりやや濃い | 94 10YR2/3 黒褐色粘質土              |
| 10YR5/8 黄褐色砂質土をブロック状に含む、ビット埋土     | 59 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土 遺物小片含む | 2.5Y6/6 明黄褐色の粒含む               |
| 35 10YR2/2 黒褐色粘質土                 | 60 10YR1/3 黒褐色砂質土 遺物含む      | 95 10YR2/3 黒褐色粘質土              |
| 2.5YR5/8 明褐色粘質土                   | 61 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土        | 96 10YR3/4 暗褐色粘質土              |
| 10YR5/8 黄褐色砂質土                    | 10YR5/6 黄褐色粘質土を含む           |                                |

第Ⅱ－４図 第146次調査 土層断面図(1) (1:100)

褐色土上面から掘削されていることが確認される遺構があったため、まずは黒褐色土上面での遺構検出を試みた。しかし、遺構埋土との色調の類似性から、黒褐色土上面で遺構の正確な平面形態を把握することは極めて困難で、遺構の検出漏れや、遺構ではないものを遺構と誤認していることが危惧された。そこで、やむをえず黒褐色土を段階的に掘り下げながら逐次正確な遺構検出の可能性を探ったが、結果的に橙色土上面まで掘り下げなければ、遺構の正しい形状を把握することは困難であった。また、橙色土上面で初めて存在を視認できた遺構も少なくなかった。

なお、黒褐色土の掘り下げに際しては、整理作業時に出土遺物帰属遺構の検討の一助とするため、一律に掘り下げるのではなく、上面で一旦検出した遺構らしきものの輪郭に沿って、黒褐色土層の厚さだけ掘削を先行させ、残余については橙色土上面で最終的な遺構検出を行った後、掘り下げることにした。

### 3 遺構

調査の結果、弥生時代の溝、古代の掘立柱塀・掘立柱建物・溝、中世の掘立柱建物・井戸・溝のほか、現時点では建物・塀・柵の柱穴として捉えることの出来ないピットが多数検出された。以下、主な遺構について記述する。

#### (1) 弥生時代以前

この時期の確実な遺構としては、S D 9461が挙げられるにとどまる。しかし、弥生時代の遺物は広く調査区全域から出土しているので、後世の削平な

どで消滅してしまった遺構が少なからず存在していたと推察される。

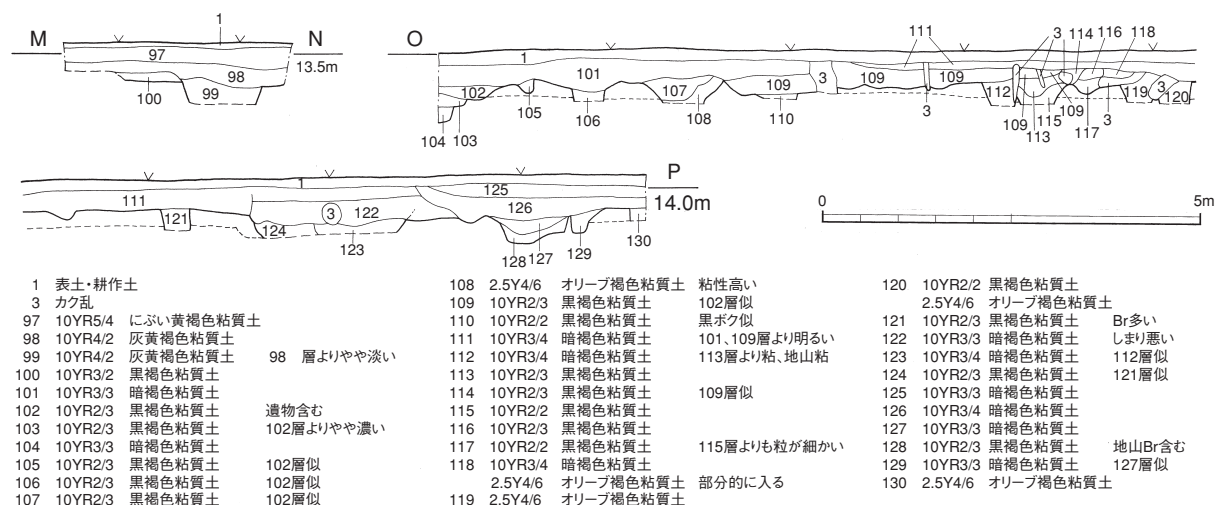
**S D 9461** ③トレンチG10区f23グリッドで確認された幅1.2mの溝。方形周溝墓の一部かと思われるが、調査区内で検出した長さ2.4mの範囲内では屈曲部分（方形周溝墓の隅）を確認できなかったの、断定は避けておきたい。重複関係からS A 9472・S B 9473よりも古いことが判っている。埋土は黒褐色土。

遺物としては、弥生土器の壺・甕などがコンテナケース1箱分ほど出土した。

#### (2) 古代

##### a 掘立柱建物・掘立柱塀・柵

**S A 9472** ③トレンチ東壁寄りから④トレンチ北側にかけてL字状に並んだ状態で検出された13個の柱穴列。側溝が検出されなかったことと、柱穴の規模から、ここでは掘立柱塀と推定しておく。東塀にあたる南北列は、途中で未調査地（③トレンチと④トレンチの間）を含むが12間（28.05m）以上で、主軸方位はN0.25° Eである。南塀にあたる東西列は、2間（4.67m）以上で、主軸方位はN88° Wである。柱掘形は、一辺0.8m～1.2mの平面方形または主軸方向にやや長い長方形を呈しており、検出面からの深さは1.0m。柱痕跡は直径27cm前後の円形を呈する。この塀は、北および西方向へ更に延びていると考えられる。重複関係からS D 9461・S B 9473よりも新しく、S B 9474・9478・S D 9463よりも古いことが判っている。



第Ⅱ－5図 第146次調査 土層断面図(2) (1:100)

遺物としては、古代の土師器（杯・杯・甕）のほか、弥生土器の小片が出土した。

**S B 9473** ③トレンチ南半のG10区 f 23～25グリッドで検出された総柱の掘立柱建物。南北3間×東西2間以上で、この建物は東側の調査区域外へ及んでいた可能性がある。柱掘形は、南北方向の複数の柱穴が溝状に連なる布掘状で、それぞれの柱掘形は長辺1.2～1.4m×短辺0.7～0.9mの長方形を呈する。主軸方位はN24° Eである。重複関係からSD9461よりも新しく、SH9462・SD9463・SA9472・SK9489よりも古いことが判っている。

遺物としては、古代の土師器（杯・甕）・須恵器（杯・甕）のほか、弥生土器の小片が出土した。

**S B 9474** ③トレンチ北半東壁際のG10区 f 21・22グリッドで検出された掘立柱列。確認された3個の柱穴が建物西側の壁を構成する梁間2間の掘立柱建物と考えられる。梁の方位はN3° E。柱掘形は直径約0.5mの略円形を呈し、柱痕跡は直径約18cm、柱間は約1.8mである。重複関係からSA9472よりも新しいことが判っている。

遺物としては、弥生土器・土師器の小破片が出土した。土師器は小片数点のみで、いずれも時代的には古代の範疇に収まるものであるが、時期比定は難しい。

**S B 9476** ③トレンチ中央G10区 f 23～25グリッドの西壁際から、トレンチの壁に沿うように検出された柱穴4個から推定される掘立柱建物で、建物の主要部分は調査区域の西側に想定される。柱掘形は、南北1.0～1.3m程度の略方形を呈しており、柱間は2.4m。主軸方位はN1° Eである。重複関係からSB9473よりも新しいことが判っている。

遺物としては、弥生土器・土師器の小破片が出土した。口縁部が丸く内側へ折り返された形状の土師器甕の小片が1点出土しており、斎宮土器編年の第Ⅱ期第4段階以降に比定されるものである。

**S B 9478** ④トレンチ北端付近のG11区 e 2・e 3グリッドで検出された柱穴2個と南北溝1条から想定される掘立柱建物。柱掘形は、長辺1.4～1.5m×短辺1.2～1.4mの隅丸方形を呈し、柱掘形の中心の間隔は3.0m。溝は、南北に並ぶ2個の柱穴のうち、南の柱穴の中央から北の柱穴の中央を貫き、

更に北側へ延びている。検出面での幅約0.5m、底面幅0.35m、検出面からの深さ0.7mで、断面逆台形を呈する。北の柱穴の北側で浅くなり、検出面からの深さは0.2mになる。検出された柱穴列を2間分北側へ延長した③トレンチの該当部分では、柱穴が検出されなかったため、南北方向2間の建物と想定される。主軸方位はN1° Eである。SB9479と重複する位置関係にあるが、攪乱が入っていたため前後関係は不明である。

遺物としては、弥生土器・土師器が出土した。

**S B 9479** ④トレンチ北端付近のG11区 e 2・e 3・f 2・f 3グリッドで検出された柱穴群。3個の柱穴が建物東側の壁を構成すると思われるが、トレンチ西壁の柱穴群は切り合い関係が複雑なため個々の柱穴に分離できていない。柱穴群の輪郭から考えると、東側の柱穴列から西へ約3.0mの位置に南側2穴に対応する柱穴を想定できるため、南側に底の付く側柱建物の可能性がある。柱掘形は、一辺0.9～1.1mの平面略方形を呈し、検出面からの深さは0.4m以上。柱痕跡は直径27cmの円形を呈する。主軸はN1° Wである。

遺物としては、弥生土器・土師器が出土した。

**S B 9480** ②トレンチと④トレンチが交差する付近のG11区 d 5・e 3・e 5・f 4グリッドで検出された掘立柱建物。攪乱を受けているため、東側の壁中央の柱穴を確認できないが、梁間2間×桁行3間以上の規模を有する。主軸方位はN69° Wで、柱掘形はこの方位に沿った長辺0.9m×短辺0.6mの略長方形を呈する。柱痕跡は直径約20cmで、柱間は2.2～2.4m。重複関係からSB9481よりも古いことが判っている。

遺物としては、弥生土器・土師器が出土した。

**S B 9481** ②トレンチ中央付近のG11区 d 5・e 5グリッドで検出された側柱の掘立柱建物。東西2間×南北1間以上で、主軸方位はN1° W。柱掘形は長辺0.8～1.0m×短辺0.7mの略長方形を呈し、柱痕跡は直径22cm前後、柱間は2.0～2.4mである。重複関係からSB9480よりも新しいことが判っている。

遺物としては、弥生土器・土師器が出土した。

**S A 9487** ④トレンチ南寄りのG11区 f 9グリッドで検出された東西方向の柱穴列。柵もしくは板塀



と推定している。方位はN89° E。柱掘形は一辺0.6mの略方形を呈し、柱痕跡は直径21cm前後である。

遺物としては、土師器が数片出土したが、いずれも小片であるため時期比定は難しい。しかし、おそらくは並行する溝SD9466と同時期のものであろう。

**S B 9488** ⑤トレンチのG11区s 1・t 1グリッドで検出された3個の柱穴列。北側1.6mの位置に平行してSD9470が東西方向に走っており、これを側溝とみなすならば塀もしくは築地塀とも考えられるが、ここではSD9470の掘形が不整形であることから、雨落溝である蓋然性が高いと考え、掘立柱建物とみなしておく。東西2間以上で、主軸方位はN89° E。柱掘形は一辺0.7～0.9mの略方形を呈し、柱痕跡は直径24cm前後である。

遺物としては、弥生土器・古代の土師器（杯・甕・甑）が出土した。土師器杯の底部小片は器壁がやや薄いことから、斎宮土器編年の第Ⅰ期にまでは遡らないものと考えられる。

**S A 4281・4282 ?** ①トレンチ西壁際で検出された柱穴1個。柱掘方は1.0m×0.7m以上の隅丸方形を呈し、柱痕跡は直径約24cmである。昭和60年に今回の調査と同じ近鉄線南側で行なわれた第58-4次調査では、南北に並ぶ柱穴列が3列検出されており、西側2列は柵SA4281・4282（SA4281→SA4282へ建て替え）としている（三重県斎宮跡調査事務所・明和町1986）。SA4281・4282はほぼ同一位置で柱穴が重複しているのに対し、①トレンチでは重複のない単独の柱穴という違いがある。今回確認した柱穴がSA4281・4282どちらかの一部であれば、建て替えに際し南限の位置が変更されたことになる。また、この間も等間隔に柱が並んだ場合、柱間寸法は約2.3mで、間の未調査地に6個の柱穴が存在する。

遺物としては、柱掘形から弥生土器と見られる小破片が2点出土したのみである。

#### **b 竪穴住居**

**S H 9455** ②トレンチ中央西寄りのG11区c 5・d 5グリッドで検出された北辺に竈のある竪穴住居。北西隅以外は調査区域外になるため全容は不明だが、東西4.0m以上×南北1.5m以上の規模を有しており、平面形態は隅丸方形を呈すると考えられる。

北辺の方位はN70° Wである。竈付近には、焼土・炭化物・土器の集中が認められた。

遺物としては、土師器（杯・甕・甑）・須恵器杯蓋がコンテナケース1箱分ほど出土した。

#### **c 土坑・溝**

**S K 9459** ②トレンチ東寄りのG11区h 5・i 5グリッドで検出された土坑。南側を後世の攪乱により破壊されているが、長辺2.3m以上×短辺1.3mの平面楕円形を呈する。検出面からの深さは約0.5mで、埋土は黒褐色土。

遺物としては、縄文土器・弥生土器・土師器（杯・甕）・須恵器（壺蓋・甕）・灰釉陶器（壺蓋）・磨製石斧などがコンテナケース1／3箱分ほど出土した。

**S D 9466** ④トレンチ南寄りのG11区f 9グリッドで検出された東西溝。黒色土上面での幅は幅2.6m、最終検出面での幅は0.9～1.2m、底幅0.6mである。調査区壁面土層では深さ約0.5mで、断面の形状は北側に開きが大きい不整逆台形を呈する。溝中心線から北側2.5mの位置で検出された柵SA9487と、ほぼ平行する位置関係にある。埋土は暗褐色粘質土で、堆積状態は土砂の流入が専ら南側からであったことを示していた。

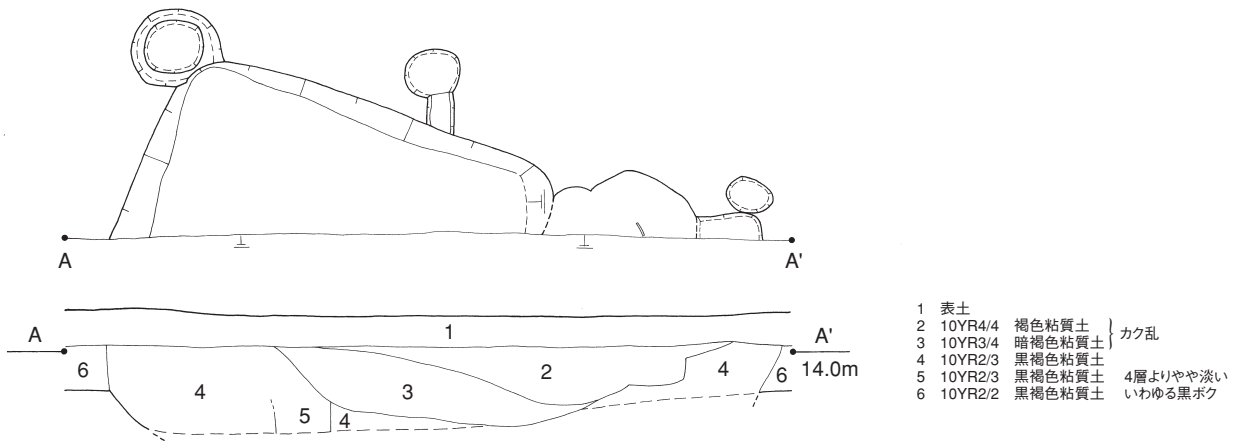
出土遺物としては、埋土の比較的上部から弥生土器・古代の土師器（杯・皿・甕・甑・椀）・須恵器（杯・甕）・灰釉陶器（段皿・椀・瓶類）と中世の遺物がコンテナケース1／2箱分、下部から弥生土器・土師器（杯・皿・甕）・黒色土器・須恵器（甕）がコンテナケース1／6箱分ほど出土した。出土遺物の大半を占める土師器杯・甕が斎宮土器編年の平安時代前Ⅱ期に比定できる、かなりまとまった土器群であることから、溝自体の構築時期は古代にまで遡ると考えられる。埋土上部から出土した中世の遺物は微量であり、おそらくは溝が完全に埋没しきらずに残っていた上部の僅かな窪みに、後世の遺物が紛れ込んだものであろう。

**S D 9463** ③トレンチのG10区f 25グリッドで検出された東西溝。最終検出面（地山直上）では幅約0.9m、深さ約0.3mを計測したが、調査区東壁の土層で観察すると黒褐色土上面で幅1.9m、深さ0.6mの規模を有していることがわかる。溝断面の形状は

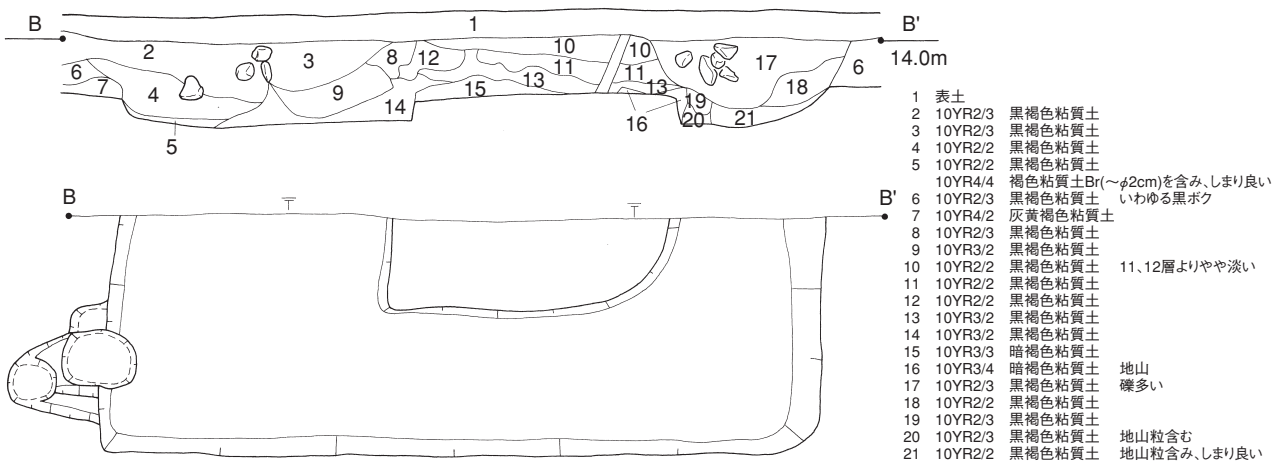




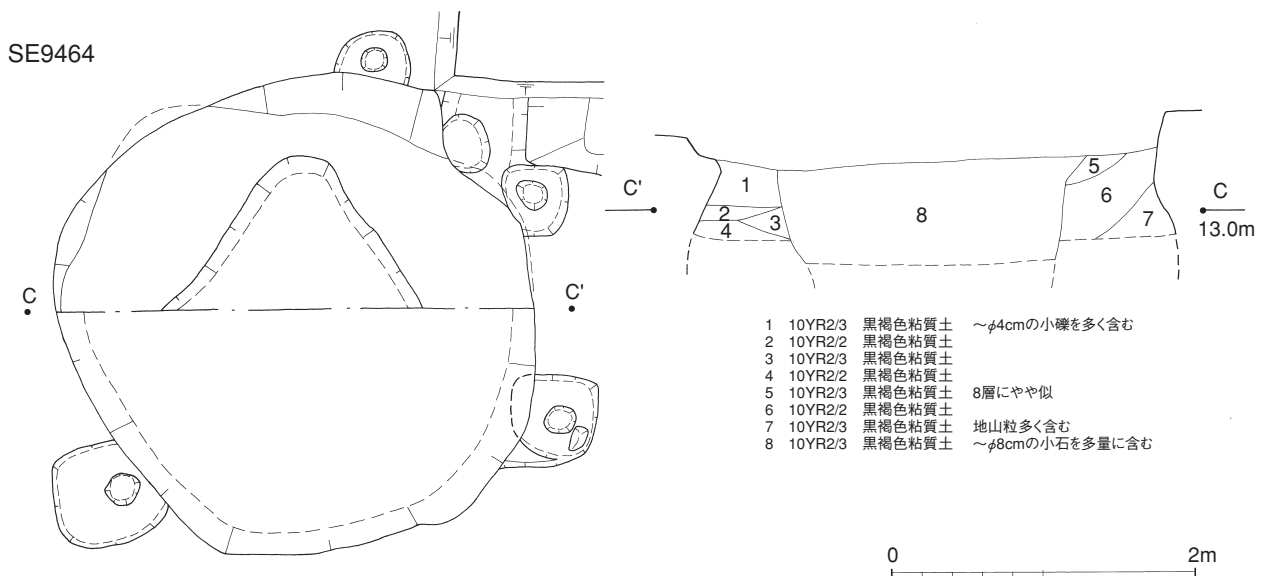
SH9455



SD9465



SE9464



第Ⅱ-7図 第146次調査 SH9455・SD9465・SE9464平面図・土層断面図(1:50)

底が尖らないV字形で、埋土は黒褐色粘質土である。重複関係からS A9472・S B9473より新しく、S K9489よりも古いことがわかっている。

遺物としては、縄文土器（鉢）・弥生土器・須恵器（杯・甕）・土師器（杯・皿・甕・甑）がコンテナケース1／4箱分ほど出土した。

**S D9470** ⑤トレンチのG10区q 25～t 25グリッドで検出された東西溝。幅0.6～1.2mで、やや蛇行気味であるが、前述のように掘立柱建物S B9488の北辺とほぼ平行している。

遺物としては、弥生土器（壺）・土師器（杯・皿・甕）・須恵器（杯・甕）がコンテナケース1／3箱分ほど出土した。

### （3）中世

#### a 掘立柱建物

**S B9482** ②トレンチ中央西寄りのG11区b 5・c 5グリッドで検出された側柱の掘立柱建物。東西2間×南北2間以上で、主軸方位はN22° E。柱掘形は一辺0.4mの略円形を呈する。重複関係からS B9485よりも古いことが判っている。

遺物としては、弥生土器・土師器・いわゆる「山茶碗」が出土した。

**S B9485** ②トレンチ中央西寄りのG11区a 5・b 5グリッドで検出された側柱の掘立柱建物。東西2間×南北2間以上で、主軸方位はN7° E。柱掘形は一辺0.6mの略方形を呈し、柱痕跡は直径20cmである。重複関係からS B9482・9484・S A9483よりも新しいことが判っている。

遺物としては、弥生土器・土師器が出土した。土師器には古代～中世のものがある。

#### b 竪穴建物

**S H9462** ③トレンチのG10区f 24グリッドで検出された竪穴建物。南北2.7m×東西2.2mの隅丸方形を呈し、最終検出面（地山直上）からの深さは0.05mしかないが、表土除去後に黒褐色土の上面で輪郭が確認できたため、最終検出面より上部に含まれていた遺物を上層出土品として取り上げたが、基本的に埋土は炭を含む黒褐色粘質土の単一層である。この竪穴建物は、重複関係からS B9473よりも新しいことがわかっている。

遺物としては、上層から弥生土器・土師器・須恵

器・中世土師器（鍋・皿）・いわゆる「山茶碗」（碗・小碗）・白磁（碗）・轆の羽口などがコンテナケース1箱分ほど、下層から弥生土器・土師器・中世土師器（鍋・皿）・いわゆる「山茶碗」（碗）がコンテナケース1／12箱分ほど出土した。

#### c 土坑・溝

**S D9458** ②トレンチ東寄りのG11区h 5グリッドで検出された南北溝。幅1.0～1.2m、検出面からの深さ0.25m。埋土は、暗褐色粘質土である。

遺物としては、古代の土師器や須恵器・灰釉陶器も含まれるが、中世の土師器（鍋）、いわゆる「山茶碗」が出土した。

**S D9471** ⑤トレンチ東端のG11区u 1グリッドで検出した溝。大半が調査区外になるため全容は不明だが、幅1.8m以上で、検出面からの深さは約0.8m。西肩の示す軸方位は概ねN28° Wである。

遺物としては、土師器（杯・甕）・須恵器（杯蓋・杯）・中世土師器（皿・鍋）などがコンテナケース1／12箱分ほど出土した。

#### d 井戸

**S E9464** ②トレンチと④トレンチの交差するG11区f 5グリッドで検出された井戸。直径3.2mの略円形を呈し、検出面からの深さは1.0m以上。内部に一辺約1.2mの略方形を呈する木製井戸枠痕跡が認められた。

遺物としては、土師器（皿・鍋）、いわゆる「山茶碗」（碗・小碗）、常滑陶器（甕・壺）、青磁（碗・皿）など、中世の土器が大半を占めるが、縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・灰釉陶器など、古代以前の遺物も出土した。合わせてコンテナケース1箱分の量である。

### （4）時期不明

#### a 掘立柱建物・柵

**S B9475** ③トレンチ北半G10区f 21・f 22グリッドの西壁沿いで検出された柱穴3個から想定される掘立柱建物。建物は調査区西側へ展開し、北側へも伸びる可能性がある。柱掘形は南北0.8m程度の略方形。柱間は2.4m。主軸については、柱穴の全容が判らず、柱痕跡も検出されていないため精確な数値は明らかでないが、南北の正方位に近い。

遺物としては、弥生土器・土師器の小破片が出土



した。

**S A 9483** ②トレンチ中央西寄りのG11区b 5グリッドで検出された柱穴列。塀もしくは柵と考えられる。南北方向に2間以上で、主軸方位はN 1° E。柱掘形は一辺0.6mの略方形を呈し、柱痕跡は直径20cmである。重複関係からS B 9485よりも古いことが判っている。遺物は出土しなかった。

**S B 9486** ②トレンチ東寄りのG11区h 5・i 5グリッドで検出された側柱の掘立柱建物。東西2間×南北1間以上で、主軸方位はN 3° E。柱掘形は一辺0.2～0.3mの略円形を呈する。遺物は出土しなかった。

## 4 遺物

出土遺物は旧石器時代～中世の土器・石器などで、コンテナケースに61箱分の量である。

### (1) 弥生時代以前

弥生時代の溝S D 9461からだけでなく、後世の遺構や包含層などから旧石器～弥生時代の石器・土器が出土した。

**S D 9461** 口縁部に扇状文と浮文、口縁部側面に二枚貝の貝殻腹縁による刺突文が施された広口壺(1)、頸部に櫛描簾状文、体部上半に櫛描直線文、体部下半にヘラ磨きが施された細頸壺(2)、口縁部に板状工具の押圧による刻み目がある甕(3・5)などがある。

時期については弥生時代中期後葉に比定される。

**遺構外** ⑤トレンチ包含層(黒褐色土)から出土したチャート製ナイフ形石器(103)は、後期旧石器時代に属するもので、縦長剥片の一侧辺に刃つぶしの剥離を加え背部とし、打瘤側を基部としている。

縄文時代の遺物としては、遺構外や後世の遺構から出土した縄文土器の小片(16・45)がある。

弥生土器には、前期～中期の壺・甕があり、中期のものが多。弥生土器はすべてのトレンチから出土したが、特に②・④トレンチ交差付近から③トレンチにかけてのグリッドからの出土量が多い。④トレンチ包含層(黒褐色土)出土の壺(52)は、口縁部上面に条痕文と波状文、口縁部側面に波状文、頸部に条痕文、頸部下端の貼付突帯に板状工具による刺突文が施されるもので、中期に属する。③トレン

チ表土出土の石核(101)と⑤トレンチ西側で表採された打製石剣(102)は、いずれもサヌカイト製である。後世の遺構S K 9459から出土した磨製の扁平片刃石斧(14)も弥生時代に属するものである。ほかに緑色片岩製の石包丁も出土した。

### (2) 古代

**S A 9472** 実測可能な遺物としては、土師器杯G(6)が挙げられるにとどまるが、ほかに弥生土器・土師器(杯・甕)の小片が出土している。土師器杯Gは、概ね斎宮土器編年の第I期第1段階から第II期第2段階までの間認められる器種で、変化が乏しいため時期を限定しにくい。腰の丸みや径口指数、口縁部の反り具合などは、どちらかといえば古相を示しているように見受けられる。

**S B 9473** 土師器(杯・甕)・須恵器(杯G・甕)のほか、弥生土器の小片がある。須恵器杯Gとみられるヘラ切り痕跡の残る無台杯底部(7)は、斎宮土器編年第I期第1段階にまで遡るものである可能性が高く、口縁部の内側が肥厚し、口縁端部に面を持つ土師器小型丸底甕や、口縁部が薄く外反する須恵器杯身(もしくは無蓋高杯の杯部)の存在も、この編年的位置づけと矛盾しない。

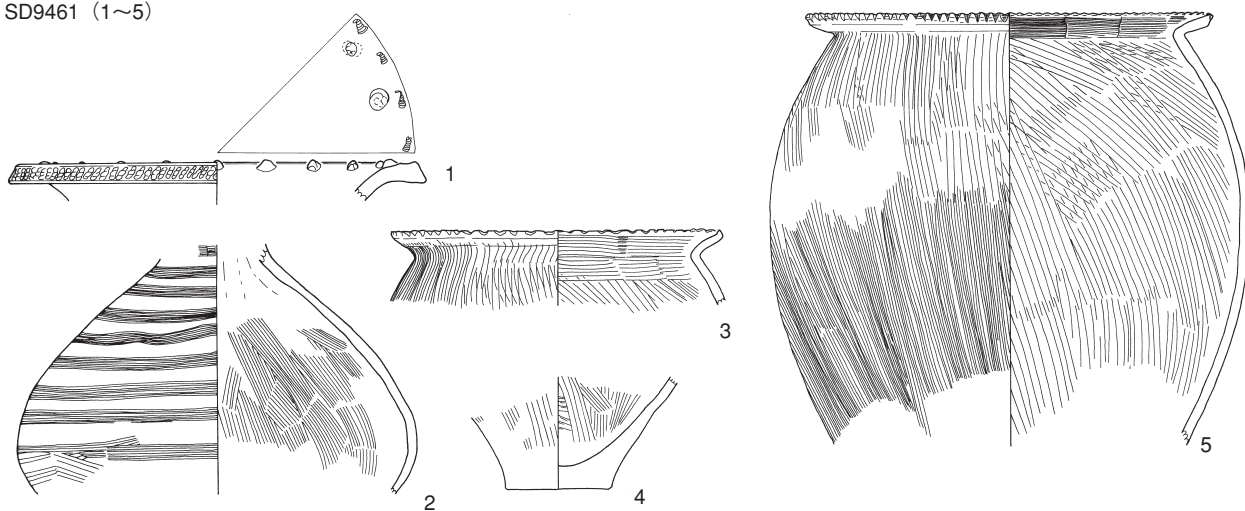
**S B 9479** 弥生土器・土師器(杯・皿)がある。土師器杯(8)は、底部外面にヘラケズリが施されるが、口縁部の形状から第I期に遡るものではなく、第II期第1段階もしくは第2段階に属するものと考えられる。

**S H 9455** 土師器(杯・甕・甑)・須恵器杯蓋がある。9は土師器杯G、11は土師器甕、12は土師器甑、10は須恵器杯B蓋で、全体として斎宮土器編年の第I期第1段階から第2段階の範疇に収まるものと考えられる。

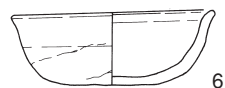
**S K 9459** 縄文土器・弥生土器・土師器(杯・甕)・須恵器(壺蓋・甕)・灰釉陶器(壺蓋)・磨製石斧などがある。土師器杯(13)の底部調整は、奈良文化財研究所の分類(奈良国立文化財研究所1976など)によるe手法が用いられており、斎宮土器編年の第II期第2段階に位置づけられる。

**S D 9466** 弥生土器・土師器(杯・皿・甕・甑・椀)・黒色土器・須恵器(杯・甕)・灰釉陶器(段皿・椀・瓶類)のほかに、紛れ込んだと思われる中

SD9461 (1~5)



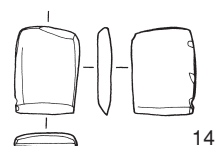
SA9472 (6)



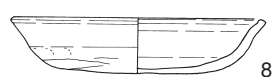
SB9473 (7)



SK9459 (13・14)



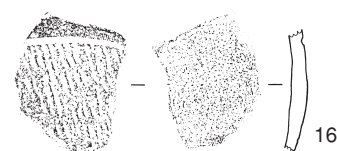
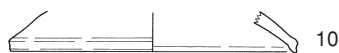
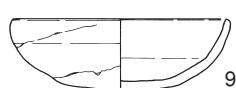
SB9479 (8)



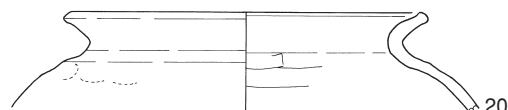
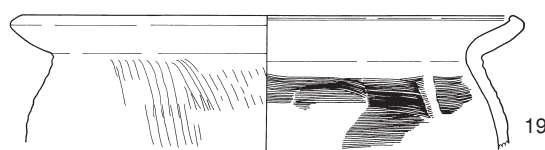
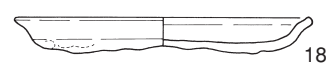
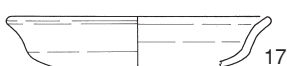
SD9463 (15・16)



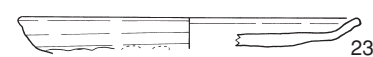
SH9455 (9~12)



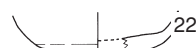
SD9466 (17~21)



SD9470 (23・24)



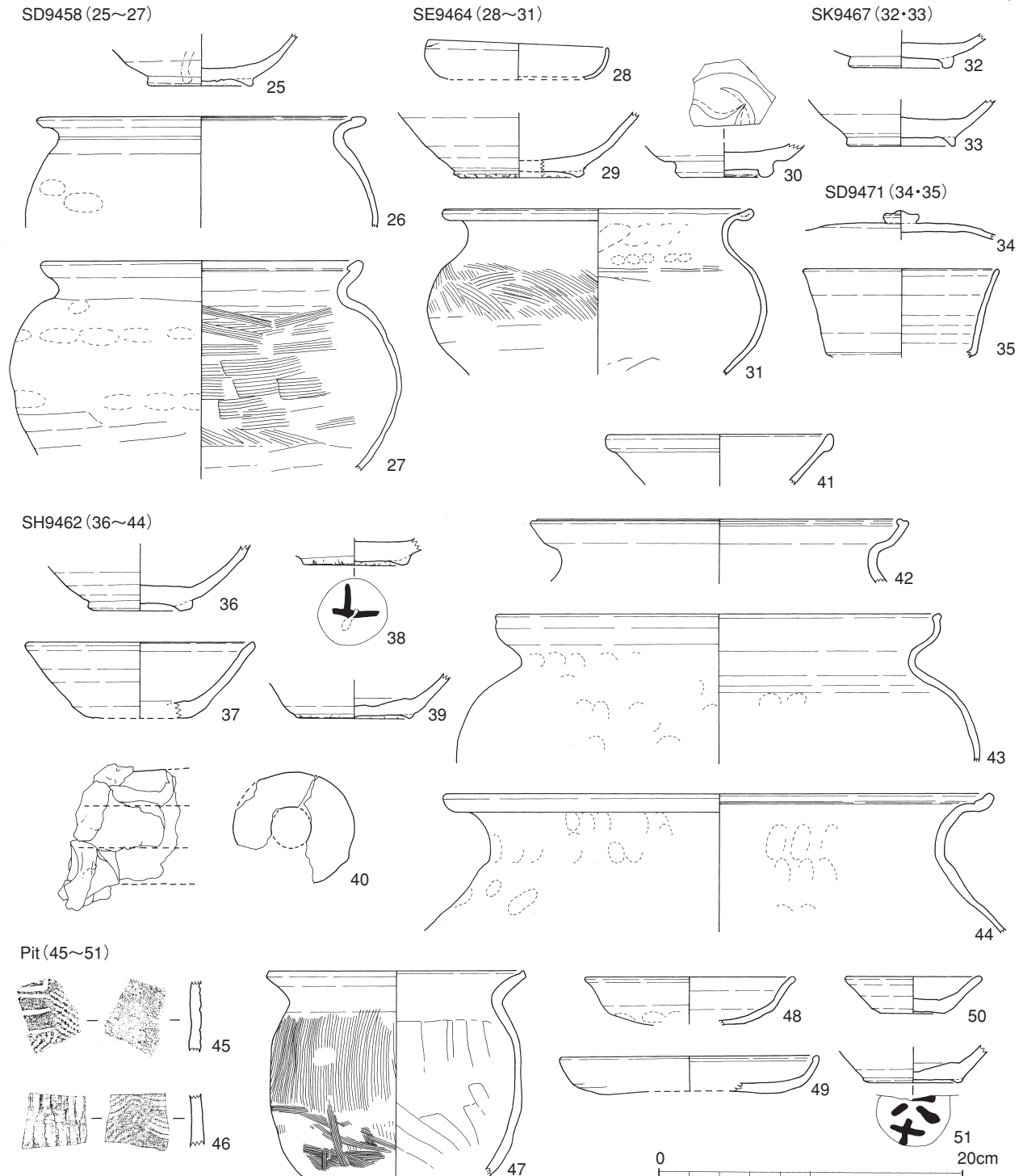
SD9469 (22)



第Ⅱ－8図 第146次調査 出土遺物実測図(1) (1 : 4)

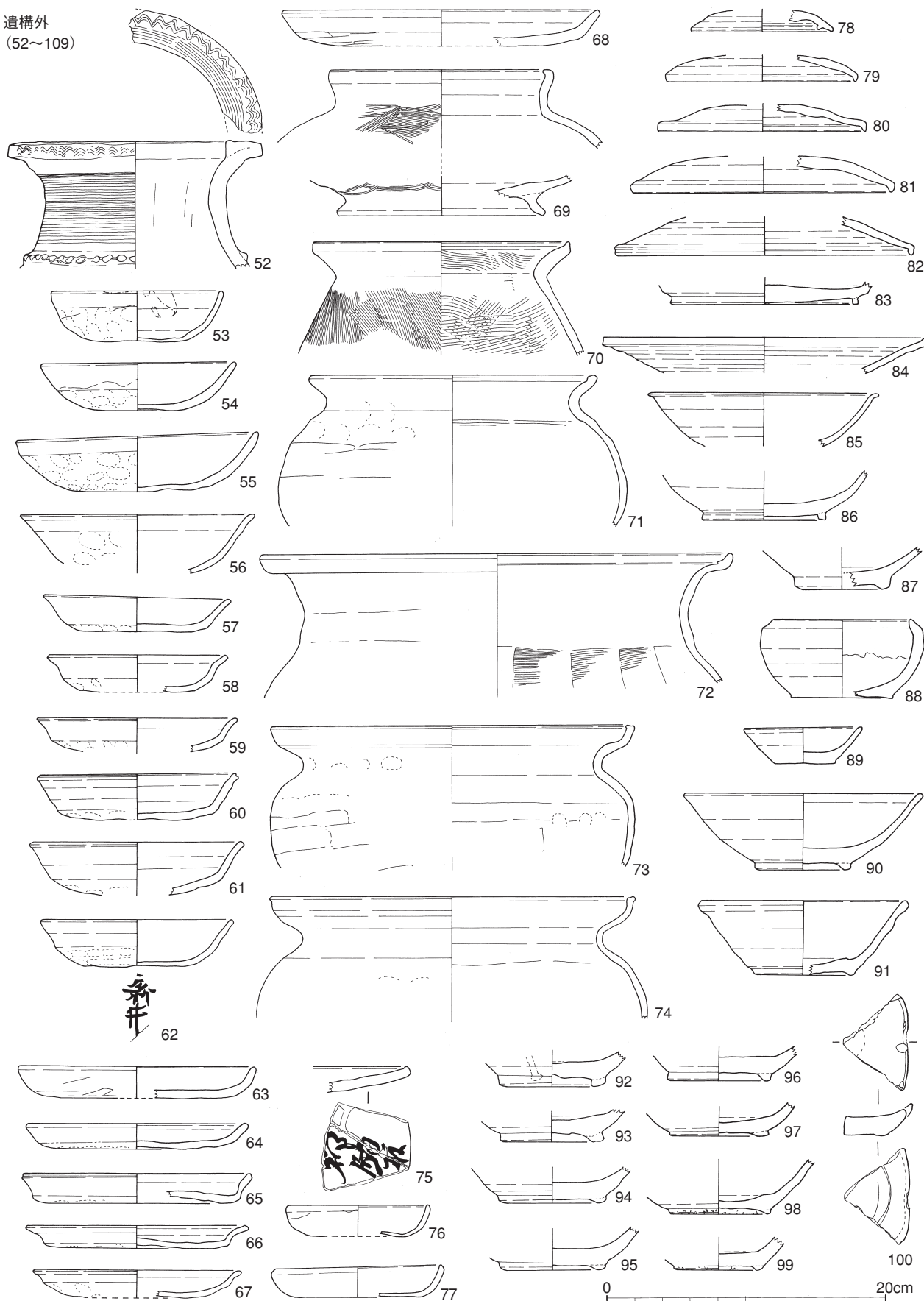
世の遺物が少量がある。底部調整e手法の土師器杯(17)・皿(18)や、内面に細かい刷毛目、外面に粗い刷毛目が施される甕(19)、外面に指押さえ、外面に板ナデの認められる甕(20)など、土師器は概ね斎宮土器編年の第Ⅱ期第2～3段階に比定できるもので占められている。灰釉陶器段皿(21)は、小黑斑を含む胎土から猿投窯もしくは尾北窯産と推

定され、内面に斑に灰釉が認められる一方で、外面に施釉が確認できないという特徴から、猿投窯編年(植崎・斎藤1981)の黒笹14号窯式に比定されよう。黒笹14号窯式とされる灰釉陶器は、平安京での出土実態に即して見てみると、9世紀中葉に出土が集中するようであり(平尾1994)、この所見は斎宮土器編年から推定される9世紀中葉～後半というSD



第Ⅱ－9図 第146次調査 出土遺物実測図(2) (1:4)

遺構外  
(52~109)



第Ⅱ—10図 第146次調査 出土遺物実測図(3) (1:4)



9466の年代観とも大きく矛盾しない。

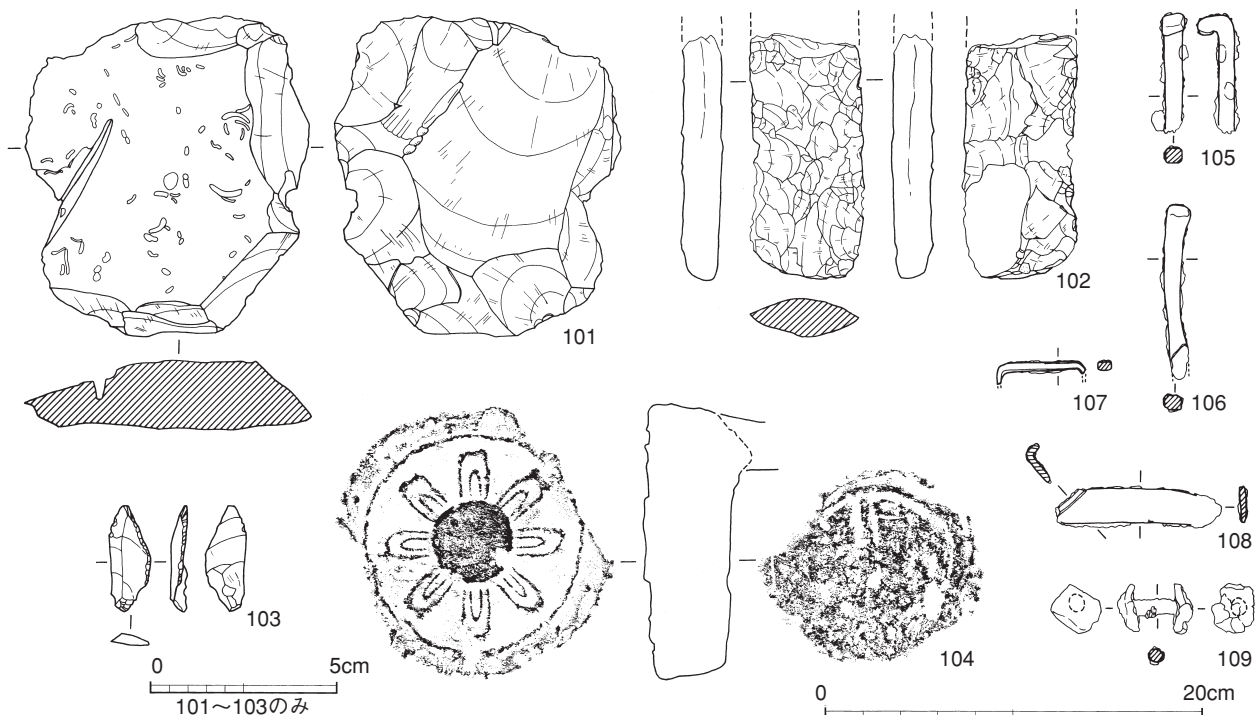
**S D 9463** 縄文土器（鉢）・弥生土器・須恵器（杯・甕）・土師器（杯・皿・甕・甗）がある。底部調整e手法の土師器皿（15）は、概ね斎宮土器編年の第Ⅱ期第2段階に属するものである。

**S D 9470** 弥生土器（壺）・土師器（杯・皿・甕）・須恵器（杯・甕）がある。土師器杯・皿（23）の形態から斎宮土器編年の第Ⅱ期第2～3段階に比定できる。

**その他のピット** 須恵器（46）・土師器（47～49）などが出土した。46は美濃須衛窯産須恵器甕の胴部片で、外面に平行叩き、内面に同心円文当て具痕が残るが、内面は磨耗が著しく赤色の付着物が残る。朱墨用の猿面硯として転用されたものと考えられる。美濃須衛窯編年（渡辺1988・西村1994）Ⅳ期第3小期後半やⅤ期第1小期に位置づけられている船山北4・5号窯跡（藤田2000）で出土した須恵器甕の特徴に類似する。48・49は③トレンチ北端西壁沿いで検出した柱穴群（S B 9479を含む）から出土した土師器で、48は斎宮土器編年の第Ⅱ期第3段階の杯。

**遺構外** 土師器（杯・皿・台杯壺・甕）・須恵器（杯H身・杯G蓋・杯G身・杯B蓋・杯B身・盤・甕）・灰釉陶器などがある。土師器杯・皿は、斎宮

土器編年の第Ⅰ期～第Ⅱ期第3段階のものまで認められ、第Ⅱ期第2段階のものが多い。62は③トレンチから出土した土師器杯（第Ⅱ期第2・3段階）で、底部外面に墨書が認められる。漢字2文字で「新井」と読める。75は④トレンチから出土した土師器高杯で、杯部外面に墨書が認められる。脚接合部に近いほうから口縁部にむけて書かれた漢字3文字である。奈良時代の範疇に納まるものであろう。69は④トレンチから出土した土師器台付直口壺で、外面に細かなヘラ磨きが施され、丁寧な造りである。須恵器には、伊勢在地窯産（80・81）、美濃須衛窯産（82・83・84）のほか、猿投窯産・湖西窯産とみられるものがある。杯Hは、美濃須衛窯産のものが③トレンチや④トレンチ北端で、杯Gは②トレンチのS H 9455付近や③トレンチで出土している。84は盤としたが、蓋かもしれない。いずれにせよ、船山北5号窯や稲田山1・2号窯、寒洞窯址群出土須恵器に類品があり、美濃須衛窯編年のⅤ期第1小期（9世紀代）に比定できる。80・83・84は内面もしくは高台内に墨痕が残るため、転用硯と考えられる。灰釉陶器碗（85・86）は、外面に施釉が確認できず、85は口縁部が外側へ折り返され、内面に刷毛塗りの痕跡が認められるという特徴、86は高台の形が断面四角形で、内面に厚く釉が降っている特長から、



第Ⅱ-11図 第146次調査 出土遺物実測図(4) (1:4, 101~103は1:2)

いずれも猿投窯編年の黒笹14号窯式に比定されよう。前述のように平安京の出土実態から9世紀中葉頃と考えられる。104は、単弁八葉蓮華文の軒丸瓦で、全体に磨耗が著しく、文様が不明瞭であるが、逢鹿瀬廃寺や四神田廃寺と同系で、外区珠文はおそらく16個と推定される。

### (3) 中世以降

**S D 9458** 土師器鍋(26・27)は、南伊勢系土師器鍋編年(伊藤1990)の(仮)A段階に属する。いわゆる「山茶碗」の椀(25)は、渥美窯産と考えられるもので、藤澤良祐氏による編年(藤澤1994)の「渥美・湖西型山茶碗」第1型式に属する。これらの年代観から、12世紀中葉頃に比定できる。

**S H 9462** 弥生土器・土師器・須恵器・中世土師器(鍋・皿)・陶器(椀・小椀)・白磁(椀)・甕の羽口がある。いわゆる「山茶碗」の椀は、尾張産と渥美窯産と見られるものがあり、渥美窯産のものは、概して内面見込みと高台畳付の磨耗が著しい。39は藤澤良祐氏による編年の「尾張型山茶碗」第6型式、36～38は「渥美・湖西型山茶碗」第3型式第1・2小期に属する。土師器鍋(42～44)は、南伊勢系土師器鍋編年の第1段階b型式や第2段階に属する。白磁椀(41)は太玉縁状口縁を有するもので、大宰府出土中国陶磁分類(森田・横田1978)の白磁椀Ⅳ類(12世紀中葉)に相当する。以上のことから、13世紀前・中葉頃に比定できる。

**S E 9464** 古代以前の遺物を除くと、土師器(皿・鍋)、いわゆる「山茶碗」(椀・小椀・甕・壺)、青磁(椀・皿)がある。いわゆる「山茶碗」のうち、甕・壺は図化していないが、胎土から常滑窯産と推定される。29は、藤澤良祐氏による編年の「尾張型山茶碗」第5型式(12世紀後葉)に属する椀。31は、南伊勢系土師器鍋編年の第1段階b型式(13世紀前葉)に属する小型の土師器鍋。30は、見込みに片切彫りの模様が施される青磁椀で、大宰府出土中国陶磁分類(森田・横田1978)の龍泉窯系青磁椀Ⅰ－4類に比定できるが、他に外面に鎗連弁文が施される龍泉窯系青磁椀Ⅰ－5類や、同安窯系青磁皿が出土している。28は、南伊勢系の土師器皿で、岩出遺跡群S K 408(三重県埋蔵文化財センター1996)や多気遺跡群工房跡周辺(三重県埋蔵文化財センタ

ー1993)での共伴遺物の年代観から14世紀末～15世紀初頭頃のものと考えられる。

出土遺物は総じて細片化しており、時期的なまとまりは明確でない。

**S D 9471** 土師器(杯・甕)・須恵器(杯蓋・杯)・中世土師器(皿・鍋)がある。須恵器(34・35)には、猿投窯系の杯蓋(34)と湖西窯産の可能性のある杯身(35)があるが、いずれも古い時期の遺構から混入したものとみられる。

**その他のピット・遺構外** 中世の遺物として、土師器(71～74・76・77)・陶器(50・51、88～100)・白磁(87)・青磁、近世の遺物として土師器焙烙や瀬戸・美濃窯産の施釉陶器などがある。

③トレンチf 23グリッド付近では中世遺物の集中が認められ、土師器(鍋・皿)・いわゆる「山茶碗」(椀)・瓦器・砥石などがコンテナケース1箱分ほど出土した。南伊勢系土師器鍋編年第1段階b型式～第2段階a・b型式に属する土師器鍋(72～74)、藤澤良祐氏による編年の「尾張型山茶碗」第7型式の椀(91)、割れ口・内面および高台部分に著しい磨耗が認められるため、砥石として再利用されたのではないかと考えられる「湖西・渥美型山茶碗」の椀底部片(100)などがあり、S H 9462とほぼ同時期のまとまりのある遺物群である。S H 9462の埋土に炭化物が含まれており、近くで被熱硬化面が検出されていることや、甕の羽口、煤が付着したり磨耗が著しいいわゆる「山茶碗」の椀が出土したことを考え合わせると、鍛冶関係の工房の存在を想定できる。個々の遺物の帰属時期は詳細にはならないが、この周辺から鉄製品の出土頻度が高いことも、鍛冶工房の存在と関連するのではないだろうか。

他に、いわゆる「山茶碗」としては、藤澤良祐氏による編年の「渥美・湖西型山茶碗」第5～7型式の小皿(50)・椀(92～97)、「尾張型山茶碗」第7型式の椀(51・98・99)や第5型式の小皿(89)、(片口)鉢(88)などがある。いわゆる「山茶碗」の煤・炭化物付着率はトレンチ間での相違はあまり認められないが、磨耗率は③トレンチから出土したものの比率が高い。また、「尾張型山茶碗」よりも「渥美・湖西型山茶碗」の方が著しく磨耗している。88は、内部上半に漆とみられる茶褐色の付着物が認

められる。白磁碗（87）も高台畳付の磨耗が著しいため、いわゆる「山茶碗」の碗と同じく砥石として利用したと考えられる。

#### （４）時期不明

金属器（釘・鎌・鏝・両頭金具：105～109）などがある。

## 5 まとめにかえて

今回の調査で、最も注目された遺構は、掘立柱塀 S A 9472 である。この塀は、これまでの斎宮跡の発掘調査で検出されている中では、平安時代の中核施設（内院）を囲んでいた塀に次ぐ規模のものであり、何らかの重要な施設を圍繞していたであろうことは想像に難くない。したがって、掘立柱塀 S A 9472 の位置付けは、斎宮の理解にも関わる重要な問題と考えられるので、最後にこの点に触れて本報告のまとめにかえたい。

掘立柱塀 S A 9472 の柱穴から出土した遺物は、大半が弥生土器や土師器の小破片で占められており、最も大きな土師器杯 G（6）でも、残存率は 1／2 弱に過ぎない。遺物の項でも述べたように、土師器杯 G は斎宮土器編年の第 I 期第 1 段階から第 II 期第 2 段階までの間認められる器種で、経時的な変化が乏しいために帰属時期を限定しにくい、丸みを帯びた腰部の形状や外反気味の口縁部などの特徴からは、比較的古相を示しているように思われる。したがって、この所見からは掘立柱塀 S A 9472 を飛鳥時代～奈良時代前期頃と考えたいところではあるが、出土の土師器杯 G が意図的な埋納品とは考えにくい程度の残存度であることに加えて、より古い時期の遺構 S B 9473 を直接切っている柱穴からの出土であることは注意を要する。なぜなら、重複関係にある新しい側の遺構には、本来古い側の遺構に包含されていた遺物が混入する可能性が少なからずあるからである。

ちなみに、掘立柱建物 S B 9473 の柱穴からは、斎宮土器編年第 I 期第 1 段階まで遡るとみられる須恵器杯 G と思しきヘラ切り痕跡の残る無台杯の底部片（7）が出土しているから、掘立柱塀 S A 9472 出土の土師器杯 G（6）が、本来掘立柱建物 S B 9473 の柱穴に含まれていたものだとしても、年代

的な矛盾は全く生じないのである。

このように、出土遺物からだけでは掘立柱塀 S A 9472 の所属時期を確定しがたいので、次に遺構の重複関係から年代的位置付けを考えてみたい。

調査時の所見では、掘立柱塀 S A 9472 は掘立柱建物 S B 9473 より新しく、掘立柱建物 S B 9474・9478・溝 S D 9463 より古いと考えられた。これらの S A 9472 と重複関係をもつ遺構のうち、S B 9473 と S D 9463 については、出土遺物から所属時期の絞り込みが可能である。

まず、S B 9473 だが、この掘立柱建物は古代の遺構の中では、重複関係から最も古く位置付けられ、既に述べたように出土遺物は斎宮土器編年第 I 期第 1 段階、すなわち飛鳥時代後期にまで遡る。次に、S D 9463 だが、この溝の埋土には斎宮土器編年第 II 期第 2 段階までの遺物が含まれており、平安時代前期の遺構と考えられた。

したがって、S A 9472 の所属時期については、必然的に飛鳥時代後期～平安時代前期の間に絞り込まれることになるが、S B 9473 出土の須恵器杯 G は小破片であり、単に S B 9473 の構築時期が飛鳥時代後期より遡らないことを示すに過ぎず、奈良時代にまで降らないことを保証するものではない。それゆえ、S B 9473 より新しい S A 9472 が、飛鳥時代後期にまで遡るものである確率は、ごく低いといえよう。また、斎宮土器編年の第 II 期第 2 段階という S D 9463 の時期も、構築時期というよりは廃絶時期を示すものと考えられるので、S D 9463 構築に先行する S A 9472 が、平安時代前期にまで降るものである確率もまた、ごく低い。つまり、掘立柱塀 S A 9472 の所属時期については、奈良時代前期～平安時代初期の幅の中と考えておくことが妥当と思われるのである。

残念ながら、今回の調査結果の枠内では、掘立柱塀 S A 9472 の所属時期についてこれ以上絞り込むことは、困難といわざるをえない。もっとも、先行する掘立柱建物 S B 9473 と大きく軸方位を異にしており、こうした軸方位の変化がいつ起きた現象であるのかを明らかにできれば、掘立柱塀 S A 9472 の所属時期についても、いま少し絞り込みが可能かもしれない。しかしながら、この問題について深く



掘り下げて検討するためには、周辺の調査事例を併せて検討することが不可欠であるため、稿を改めることとし、調査の概要報告としての本書では、慎重を期して上記推測の範囲にとどめておくこととしたい。

(水橋公恵)

# 参考・引用文献

泉 雄二2005「成立期の建物」『明和町史 斎宮編』

伊藤裕偉1990「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」『Mie history vol.1』三重歴史文化研究会

柴山圭子2006「第144次調査」『史跡斎宮跡 平成16年度発掘調査概報』斎宮歴史博物館

奈良国立文化財研究所1976「平城宮発掘調査報告Ⅶ」

植崎彰一・斎藤孝正1981「猿投窯編年の再検討について」『平安時代の土器・陶器』愛知県陶磁資料館

西村勝広1994『前洞遺跡A地区発掘調査報告書』各務原市教育委員会

平尾政幸1994「緑釉陶器の変質と波及」『古代の土器研究－律令的土器様式の西東3－』古代の土器研

究会

藤澤良祐1994「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要』第3号 三重県埋蔵文化財センター

藤田英博2000「古窯跡出土の遺物について」『船山北古墳群・船山北古窯跡群・船山北遺跡』岐阜県文化財保護センター

三重県斎宮跡調査事務所・明和町1986「第58-4次調査」『史跡斎宮跡 昭和60年度現状変更緊急発掘調査報告』

三重県埋蔵文化財センター1993『多気遺跡群発掘調査報告－志郡美杉村上多気所在－』

三重県埋蔵文化財センター1996『岩出地区内遺跡群発掘調査報告－度会郡玉城町岩出所在、ケカノ辻・角垣内・蚊山地区の調査－』

森田勉・横田賢次郎1978「大宰府出土の輸入中国陶磁について」『九州歴史資料館研究論集』四

渡辺博人1988「美濃須衛窯の須恵器生産」『古代文化』第40巻第6号 財団法人古代学協会

第Ⅱ－1表 第146次調査 遺構一覧表

遺構名	種別	調査時遺構名	トレンチ	地区	グリッド	時期 (斎宮編年)	遺構・遺物
SD9451	溝	溝12	②	F・G11	y5～e5	不明	幅約0.2m、深さ5cmの浅い東西溝。古代～中世の土師器小片が少量出土。
SK9452	土坑	土坑15	②	F11	y5	近世以降	東西1.8m×南北1.2m～の不整形土坑。中世の土師器鍋や近世の焙烙などが少量出土。
SK9453	土坑	土坑13	②	G11	b5	古代以降	東西1.3m×南北2.2m～の隅丸長方形を呈する土坑。弥生土器や古代の土師器の小片が数点出土。
SK9454	土坑	土坑14	②	G11	b5	古代	東西1.1m×南北1.2mの不整形土坑。SK9453より古い。古代の土師器・黒色土器などが出土。
SH9455	竪穴住居	竪穴19	②	G11	c5・d5	飛鳥・奈良時代前期 (I-1・2)	本文参照
SD9456	不明	溝6	②	G11	g5	不明	SE9464の北東で確認された遺構。
SD9457	溝	溝5	②	G11	g5	平安時代中期以降 (II-4以降)	幅約0.6m、深さ0.2mの南北溝。土師器出土。
SD9458	溝	溝4	②	G11	h5	12世紀中葉	本文参照
SK9459	土坑	土坑3	②	G11	h5・i5	平安時代前期 (II-2)	本文参照
SD9460	溝	溝2	②	G11	i5	不明	長さ1.3m～×幅0.4mの溝。
SD9461	溝	p11	③	G10	f23	弥生時代中期	本文参照
SH9462	竪穴建物	土坑8	③	G10	f24	13世紀前・中葉	本文参照
SD9463	溝	溝9	③	G10	f25	平安時代前期 (II-2)	本文参照
SE9464	井戸	井戸1	②④	G11	f5・g5	14世紀末～15世紀初頭?	本文参照
SD9465	不明	土坑16	④	G11	f7・f8	不明	南北4.8m×東西1.6m～の方形に巡る溝。溝は幅1.0～1.8m、深さ約0.2mの逆台形を呈する。
SD9466	区画溝	溝7	④	G11	f9	平安時代前期 (II-3)	本文参照
SK9467	土坑	土坑17	④	G11	f12	中世	東西0.6m～×南北1.4m～の土坑。土師器鍋やいわゆる「山茶碗」が出土。
SD9468	溝	溝18	④	G11	f11・f12	中世	長さ5.4m×幅0.4～0.6mの南北溝。土師器片が少量出土。
SD9469	溝?	溝21	⑤	G10	q25	古代	長さ2.6m×幅1.2mの溝として検出したが、土層の観察から複数の遺構が重複していることを確認。
SD9470	溝	溝20	⑤	G10	q25～t25	平安時代前期 (II-2・3)	本文参照
SD9471	溝?	溝22	⑤	G11	t1・u1	中世	本文参照
SK9489	土坑	p2	③	G10	f25	不明	直径1.4mの略円形土坑。中央に直径0.3mの丸い窪みがある。土師器・須恵器・いわゆる「山茶碗」などが出土。



第Ⅱ－２表 第146次調査 堀立柱建物一覧表

通番名	整理時遺構名	地区	グリッド	ピット番号	ピット遺物の時期	建物時期	規模 東西間(m)× 南北間(m)	柱間 (東西－南北)	主軸	方位 (N基準)	備 考
SA9472	建物1	G10	f21	p2		I-2～ II-1の どこか	2(4.67)～ ×12(28.05)	2.3・2.4 －2.3・2.4		東辺 N0.25°E 南辺 N88°W	SB9473・SD9461より新、 SB9474・9478 ・SD9463より古
			f22	p3・4							
			f23	p5・6							
			f24	p5							
			f25	p8の大部分 ・p11	p11…I						
		G11	f2	p5							
			f3	p4・5・6							
			e3	p4							
SB9473	建物2	G10	f23	p8・9・13	p9…II-1	I-1	2(4.0)～ ×3(5.7)	2.1・2.2－1.9		N24°E	SD9461より新、 SK9489・SH9462 ・SD9463・SA9472より古
			f24	p1・9・10							
				溝10							
				溝11							
SB9474	建物3	G10	f21	p6		古代～	*×2(3.6)	*－1.8	東西?	N3°E	SA9472より新
			f22	p5							
SB9475	建物4	G10	f22	p2		不明	*×2(4.8)	*－2.4	東西?		
SB9476	建物5	G10	f23	p2・3	p3…II-4	古代～	*×3(7.2)	*－2.4		N1°E	SB9473より新
			f25	p10							
SB9477	欠番										
SB9478	建物7	G11	f2	p1		古代	*×2?	*－3.0		N1°E	SA9472より新
			e3	p3							
				溝23							
SB9479	建物8	G11	f2	p6・7		II-1・2	*×2(4.1)～	*－1.8・2.3	東西?	N1°W	
			f3	p1	p1…II-1・2						
SB9480	建物9	G11	f4	p1		古代	3(6.3)～ ×2(4.5)	2.2・2.4－*	東西	N69°W	SB9481より古
			e5	p1							
SB9481	建物10	G11	d5	p1・3		古代	2(4.2)×2?	2.0・2.2－2.4		N1°W	SB9480より新
SB9482	建物11	G11	b5	p2・5		中世	2(4.5)× 2(5.5)～	2.2?－2.4	南北	N22°E	SB9485より古
			c5	p1・5	中世						
SA9483	建物12	G11			遺物なし	不明	2(4.3)～		南北	N1°E	SB9485より古
SB9484	建物13	G11			遺物なし	不明	2(4.4)× 3(5.8)～	2.2－1.9	南北	N28°E	SB9485より古
SB9485	建物14	G11	a5	p2		中世	2(4.5)× 2(3.6)～	*－1.9?	南北	N7°E	SB9482・9484・SA9483 より新
			b5	p2・3・5	p5…中世						
SB9486	建物15	G11			遺物なし	不明	1(2.0)～ ×2(3.9)	1.9・2.0－2.0	南北?	N3°E	
SA9487	建物16	G11	f9	p1	p1…II-2・3	II-2・3	1(2.2)～	2.2	東西	N89°E	
SB9488	建物17	G11	s1	p1		II～	2(4.8)～	2.4	東西	N89°E	
			t1	p3・5							
	東堀?	G10	S22	p2… 弥生時代	古代						①トレンチで検出された柱穴。 第58-4次SA4281・4282の どちらかの可能性あり。

# 第Ⅱ－3表 第146次調査 出土遺物観察表（1）

番号	器種	器形	地区・遺構	法量 (cm)	調整・技法の特徴		胎土	焼成	色調	残存度	備考	登録番号
1	弥生土器	壺	SD9461	口径	22.0	外:口縁部刻文・内:口縁部最状文・浮文	並	並	明黄緑10YR7/6	口2/12		012-02
2	弥生土器	細頸壺	SD9461	体部最大径	21.0	外:頸部帯描線状文・体部帯描直線文・内:内	並	並	橙7.5YR6/8	体4/12	外面下半に煤付着	012-01
3	弥生土器	甕	SD9461	口径	17.6	外:口縁部刻み且口縁部コナリ・以下外内:口縁部コナリ・以下コナリ	並	並	橙7.5YR7/6	口6/12		011-02
4	弥生土器	甕	SD9461	底径	5.5	外:外内:内	並	並	にみい黄緑10YR6/4	底8/12		011-03
5	弥生土器	甕	SD9461	口径	21.2	外:口縁部刻み且口縁部コナリ・以下外内:口縁部コナリ・以下内	並	並	にみい黄緑10YR7/4	6/12	外面下半に煤付着	011-01
6	土師器	杯G	SA9472	口径器高	10.8 3.9	外:口縁部コナリ・底部北内:コナリ	並	並	浅黄緑10YR8/4	3/12		002-01
7	須恵器	杯	SB9473	口径器高	—	外:体部回転行・底部外内:体部回転行・底部一方向内行	並	並	青灰10B66/1 断面:灰緑5YR5/2	底3/12		002-02
8	土師器	杯	SB9479	口径	13.5	外:口縁部コナリ・底部北内:北と外ナリ内:コナリ	並	並	橙5YR7/6	6/12		002-03
9	土師器	杯G	SH9455	口径器高	11.7 3.8	外:口縁部コナリ・以下北内:口縁部コナリ・以下一方向内行	並	並	浅黄緑7.5YR8/6	ほぼ変形		009-02
10	須恵器	杯蓋	SH9455	口径	15.0	回転行	φ1mm以下の粒含む	並	灰白10Y7/1	口1/12		009-03
11	土師器	甕	SH9455	口径	20.3	外:口縁部コナリ・以下外内:口縁部コナリ・(一部ナリ外),以下コナリ	並	やや軟	黄緑10YR8/6	口3/12		010-01
12	土師器	甕	SH9455	口径	27.6	外:口縁部コナリ・以下外内:口縁部コナリ・体部上半コナリ,下半外ナリ	並	並	浅黄緑7.5YR8/6	口3/12	外面に煤付着	009-01
13	土師器	杯	SK9459	口径器高	15.8 3.8	外:口縁部コナリ・底部北内:口縁部コナリ	並	やや軟	黄緑7.5YR7/8	5/12		003-05
14	石製品	磨製石斧	SK9459	全長厚	4.6 0.7							003-06
15	土師器	皿	SD9463	口径器高	17.6 2.3	外:口縁部コナリ・底部北内:コナリ	並	やや軟	橙5YR6/6	4/12		007-02
16	縄文土器	深鉢	SD9463	口径器高	—	外:縄文・流線	粗	並	にみい黄緑10YR5/4	小片		007-01
17	土師器	杯	SD9466	口径	14.0	外:口縁部コナリ・底部北内:コナリ	並	並	橙5YR7/8	3/12		008-04
18	土師器	皿	SD9466	口径器高	15.7 1.9	外:口縁部コナリ・底部北内:コナリ	並	やや軟	橙5YR7/8	7/12		008-03
19	土師器	甕	SD9466	口径	27.1	外:口縁部コナリ・以下外内:口縁部コナリ・以下コナリ	やや緻密	並	にみい黄緑10YR7/4	口2/12		008-02
20	土師器	甕	SD9466	口径	19.1	外:口縁部コナリ・以下北内:口縁部コナリ・以下内	並	並	橙7.5YR8/8	口4/12		008-01
21	灰釉陶器	段皿	SD9466	口径	17.6	内:口縁部回転行・以下内面回転行	並	並	灰白2.5Y8/1	口2/12		008-05
22	須恵器	杯	SD9469	底径	5.3	外:体部回転行・底部外内:面回転行	やや粗 φ1mmの小粒多く含む	並	灰5Y6/1	底3/12弱	内面朱色	007-07
23	土師器	皿	SD9470	口径	18.0	外:口縁部コナリ・底部北内:コナリ	良	並	橙7.5YR7/6	3/12		007-05
24	土師器	甕	SD9470	口径	15.6	外:口縁部コナリ・以下外内:口縁部コナリ・以下コナリ	並	やや軟	にみい黄緑10YR6/4	口2/12	外面に煤付着	007-06
25	陶器	碗	SD9458	高台径	6.9	外:面回転行・回転糸切り痕・高合内ナリ内:コナリ	良	並	灰白2.5Y8/1	底12/12	いわゆる「山茶碗」 外面に灰釉垂下	004-03
26	土師器	鍋	SD9458	口径	21.4	外:口縁部コナリ・以下北内:口縁部コナリ・以下摩滅	並	軟	淡黄2.5Y8/4	口6/12	外面の口縁部・体部に煤付着	004-02
27	土師器	鍋	SD9458	口径	21.0	外:口縁部コナリ・体部上半北内:口縁部コナリ・体部上半コナリ,下半外ナリ	並	並	にみい黄緑10YR7/4	口9/12		004-01
28	土師器	皿	SE9464	口径	11.7	外:口縁部コナリ・以下調整不明内:コナリ	並	並	灰白2.5Y8/2	5/12		003-02
29	陶器	碗	SE9464	高台径	7.5	外:面回転行・糸切り痕・高合内ナリ内:コナリ	並	並	灰黄2.5Y7/2	4/12	いわゆる「山茶碗」 内面に炭化物付着	003-03
30	青磁	碗	SE9464	高台径	6.4	外:体部施釉・底部面回転行・外ナリ・高合内糸釉	緻密	並	錆青磁856	底6/12		003-04
31	土師器	鍋	SE9464	口径	20.3	外:口縁部コナリ・体部上半コナリ,下半外ナリ内:口縁部コナリ・体部上半北内:外ナリ,下半外ナリ	並	並	淡黄2.5YR8/4	9/12	外面に煤付着	003-01
32	陶器	碗	SK9467	高台径	6.9	外:面回転行・回転糸切り痕・高合内ナリ内:コナリ	砂っぽい	並	浅黄2.5Y7/3	底12/12	いわゆる「山茶碗」 内面磨耗・炭化物付着	007-04
33	陶器	碗	SK9467	高台径	6.8	外:体部回転行・底部行・高合内ナリ内:コナリ	砂っぽい	並	灰黄2.5Y7/2	底12/12	いわゆる「山茶碗」 内面磨耗	007-03
34	須恵器	杯蓋	SD9471	経径	2.4	外:口縁部面回転行・天井部面回転行・外ナリ内:面回転行	緻密	堅	灰5Y6/1	—	内面磨耗	007-09
35	須恵器	杯	SD9471	口径	13.3	回転行	緻密	やや軟	灰白5Y7/2	2/12		007-08
36	陶器	碗	SH9462	高台径	6.8	外:体部面回転行・底部行・高合内ナリ内:コナリ	並	並	灰白2.5Y7/1	底12/12	いわゆる「山茶碗」 煤付着・内面磨耗	006-03
37	陶器	碗	SH9462	口径器高	15.0 5.0	外:面回転行・糸切り痕内:コナリ	やや砂っぽい	並	灰白2.5Y7/1	3/12	いわゆる「山茶碗」 内面磨耗	006-02
38	陶器	碗	SH9462	高台径	6.8	外:高合内ナリ内:コナリ	砂っぽい	並	灰白2.5Y7/1	底12/12	いわゆる「山茶碗」 高合内に墨書あり・内面磨耗	006-04
39	陶器	碗	SH9462	高台径	7.2	外:体部面回転行・底部行・高合内ナリ内:体部コナリ,底部北ナリ	粗	並	灰黄2.5Y7/2	底6/12	いわゆる「山茶碗」	006-05
40	土製品	鑢羽口	SH9462	直径孔径	8.0 2.6		並	並		3/12		006-06
41	白磁	碗	SH9462	口径	14.5	施釉	並	並	釉:灰白7.5Y8/2	口のみ		005-03
42	土師器	鍋	SH9462	口径	26.6	外:口縁部コナリ・内:口縁部コナリ	粗	並	明黄緑10YR7/6	2/12		006-01
43	土師器	鍋	SH9462	口径	29.1	外:口縁部コナリ・以下北内:口縁部コナリ・以下調整不明	粗	並	黄緑7.5YR8/8	口1/12	外面に煤付着	005-02
44	土師器	鍋	SH9462	口径	36.0	外:口縁部コナリ・以下北内:口縁部コナリ・以下北内:口縁部コナリ	粗	並	明黄緑10YR7/6	口4/12		005-01
45	縄文土器		h5 Pit3	口径器高	—	外:磨り消し縄文	粗	並	浅黄緑7.5YR8/4	小片		013-01
46	須恵器	甕	i3 Pit2,3	口径器高	—	外:平行内:同心円文当て具痕	並	並	明青灰5B7/1	小片	内面赤色	013-04
47	土師器	甕	q25 Pit3	口径	16.9	外:口縁部コナリ・体部上半外内:口縁部コナリ・体部上半板行・下半外ナリ	並	並	浅黄緑10YR8/4	9/12		013-05
48	土師器	杯	e3 Pit1	口径	13.7	外:口縁部コナリ・以下北内:コナリ	やや密	やや軟	橙7.5YR7/6	2/12		013-02
49	土師器	皿	e3 Pit1	口径	17.0	外:調整不明内:コナリ	並	軟	橙5YR7/8	2/12		013-03
50	陶器	小皿	f11 Pit3	口径器高	8.6 2.4	外:面回転行・回転糸切り痕内:コナリ	やや砂	並	灰黄2.5Y7/2	一部欠損	いわゆる「山茶碗」	013-07
51	陶器	碗	i25 Pit4	高台径	5.8	外:面回転行・回転糸切り痕・高合内ナリ内:コナリ	粗	並	灰黄2.5Y7/2	底6/12	いわゆる「山茶碗」 高合内に墨書あり	013-06
52	弥生土器	壺	i6 包含層	口径	18.2	外:口縁部帯描直線文・帯描波状文・頸部帯描線状文・体部帯描直線文	粗	並	にみい黄緑10YR6/4	3/12		014-01
53	土師器	杯	i3 オクラン・柱穴	口径器高	12.5 3.7	外:口縁部コナリ・以下北内:コナリ	並	軟	浅黄緑10YR8/3	6/12	口縁付近に煤付着	016-05
54	土師器	杯	s25 包含層	口径器高	14.1 3.5	外:口縁部コナリ・以下北内:コナリ	並	良	橙7.5YR6/6	8/12		016-04
55	土師器	碗	r25 包含層	口径器高	17.5 4.0	外:口縁部コナリ・以下北内:コナリ	並	並	橙5YR7/8	11/12		015-04

第Ⅱ－４表 第146次調査 出土遺物観察表（2）

番号	器種	器形	地区・遺構	法量 (cm)		調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	登録番号
56	土師器	椀	f25 包含層	口徑	17.0	外:口縁部33片,以下北・特1内:33片	並	並	浅黄褐色7.5YR8/6	2/12		015-07
57	土師器	杯	f25 包含層	口徑器高	13.5 2.7	外:口縁部33片,以下北・特1内:33片	並	やや軟	黄褐色7.5YR7/8	一部欠損		016-01
58	土師器	杯	f25 包含層	口徑	13.0	外:口縁部33片,以下北・特1内:33片	並	並	褐色7.5YR7/6	3/12		016-02
59	土師器	杯	f25 包含層	口徑	14.5	外:口縁部33片,以下北・特1内:33片	並	並	褐色5YR6/8	2/12		015-09
60	土師器	杯	f25 包含層	口徑器高	14.6 3.4	外:口縁部33片,以下北・特1内:33片	並	並	褐色5YR6/6	3/12		015-08
61	土師器	杯	h5 カクラン	口徑	15.5	外:口縁部33片,以下北・特1内:33片	並	並	褐色5YR7/8	4/12		015-05
62	土師器	杯	f25 包含層	口徑器高	14.0 3.4	外:口縁部33片,以下北・特1内:33片	緻密	良	褐色5YR7/8	6/12	底部外面に墨書「新井」	015-06
63	土師器	皿	f2 カクラン	口徑器高	17.2 2.3	外:口縁部33片,底部へがしり内:33片	並	軟	褐色5YR6/8	3/12		014-04
64	土師器	皿	s25 包含層	口徑器高	16.1 1.9	外:口縁部33片,底部北・特1内:33片	並	良	褐色7.5YR7/6	6/12		015-02
65	土師器	皿	f2-f3 カクラン	口徑器高	16.6 2.1	外:口縁部33片,底部北・特1内:33片	並	並	褐色5YR7/8	5/12		015-01
66	土師器	皿	f25 包含層	口徑器高	16.1 1.7	外:口縁部33片,底部北・特1内:33片	並	並	褐色5YR6/8	6/12		015-03
67	土師器	皿	f25 包含層	口徑	15.0	外:口縁部摩滅,底部北・特1内:33片	並	やや軟	浅黄褐色7.5YR8/6	2/12		016-03
68	土師器	皿	f2 カクラン	口徑	22.7	外:口縁部33片,底部へがしり内:口縁部33片,底部不定方向の片	並	やや軟	褐色5YR6/8	3/12		014-05
69	土師器	台付甕	f7 包含層	口徑高台	16.1 14.6	外:口縁部33片,体部丁寧なへがしり,底部33片,高台側方内:口縁部33片,体部板折,底部33片	緻密	良	明赤褐色5YR5/8	口6/12底7/12		014-03
70	土師器	甕	d5 包含層	口徑	18.4	外:口縁部33片,以下けり内:口縁部33片(一部のみ),以下33片	並	良	にがい黄褐色10YR7/4	口3/12		014-02
71	土師器	鍋	d5 包含層	口徑	20.6	外:口縁部33片,肩部北・特1,体部へがしり風内:口縁部33片,以下板折	並	並	黄褐色10YR8/6	口6/12		019-01
72	土師器	鍋	f23 包含層	口徑	34.0	外:口縁部33片,以下北・特1内:口縁部33片,以下板折	並	並	浅黄褐色10YR8/4	口11/12		019-02
73	土師器	鍋	f23 包含層	口徑	26.0	外:口縁部33片,肩部北・特1,体部へがしり内:口縁部33片,以下けり	並	並	にがい黄褐色10YR7/4	口2/12		020-02
74	土師器	鍋	f23 包含層	口徑	26.1	外:口縁部33片,以下北・特1内:口縁部33片,以下調整不明	並	並	浅黄褐色7.5YR8/6	口5/12		020-01
75	土師器	高杯	f2 表土	口徑		外:口縁部33片,以下けりあり内:調整不明	並	並	明赤褐色5YR5/8	口1/20	杯部外面に墨書「郡領」殿	022-05
76	土師器	皿	f23 包含層	口徑	10.0	外:口縁部33片,以下北・特1内:33片	並	軟	浅黄褐色10YR8/4	5/12		020-03
77	土師器	皿	f9 包含層	口徑	11.9	外:口縁部33片,以下北・特1内:33片	並	並	明黄褐色10YR7/6	4/12		020-04
78	須恵器	杯蓋	f21 包含層	口徑	10.2	外:口縁部回転片,天井部回転へがしり内:回転片	並	良	灰白5Y7/1	2/12		022-03
79	須恵器	杯蓋	f5 包含層	口徑	13.9	外:口縁部回転片,天井部回転へがしり内:回転片	並	良	暗灰黄2.5Y5/2	1/12強		016-06
80	須恵器	杯蓋	f2 カクラン	口徑	15.1	回転片	φ1mm以下の小粒多く含む	並	青灰10B65/1	4/12	内面に墨痕	016-07
81	須恵器	杯蓋	s1 包含層	口徑	19.0	外:口縁部回転片,天井部回転へがしり内:回転片	φ1mm以下の小粒多く含む	並	灰白10Y7/1	3/12		016-09
82	須恵器	杯蓋	f2 カクラン	口徑	21.3	回転片	緻密	並	灰白10Y7/1	1/12		016-08
83	須恵器	杯B	f3 カクラン	高台径	13.4	外:体部回転片,底部回転へがしり,高台側方内:回転片	φ3mmの小石含む	並	灰黄2.5Y7/2	9/12	高台内磨耗・黒色	017-02
84	須恵器	盤	f3 カクラン	口徑	23.2	外:口縁部回転片,以下回転へがしり内:回転片	緻密	やや軟	灰白2.5Y8/2	1/12	内面黒色	016-10
85	灰釉陶器	椀	f3 カクラン・柱穴	口徑	16.5	外:外・内:33片	並	良	淡黄2.5Y8/3	口1/12	内面に灰釉刷毛塗り	017-05
86	灰釉陶器	椀	s1 表土	高台径	8.7	外:外・底部回転へがしり内:33片	並	良	10YR8/1	底10/12	内面に灰釉・三叉トチ痕	022-04
87	白磁	椀	f25 包含層	高台径	6.7	外:回転へがしり内:白磁粒	緻密	並	淡黄2.5Y8/3	底4/12		017-04
88	陶器	鉢	f11 包含層	口徑器高	9.7 5.6	外:回転片,回転未切り痕内:回転片	並	並	灰黄2.5Y7/2	4/12	いわゆる「山茶碗」内面に漆付着	017-06
89	陶器	小皿	e5 包含層	口徑底径	8.4 4.3	外:回転片,回転未切り痕内:33片	並	並	灰黄2.5Y6/2	口4/12底完形	いわゆる「山茶碗」	017-03
90	陶器	椀	e5 包含層	口徑器高	17.1 5.5	外:回転片,回転未切り痕,高台側方内:33片	並	並	淡黄2.5Y7/3	口1/12底7/12	いわゆる「山茶碗」高台量付磨耗	017-09
91	陶器	椀	f23 包含層	口徑器高	15.0 5.5	外:回転片,回転未切り痕,高台側方内:33片	並	並	灰黄2.5Y7/2	4/12	いわゆる「山茶碗」内面に漆付着,高台量付磨耗	017-07
92	陶器	椀	f5-g5 けり	高台径	7.6	外:回転片,底部板状圧痕,高台側方内:33片	砂っぽい	並	淡黄2.5Y8/3	底完形	いわゆる「山茶碗」外面に灰釉垂下	018-05
93	陶器	椀	f11 包含層	高台径	7.4	外:回転片,回転未切り痕,高台側方内:33片	砂っぽい	並	灰黄2.5Y6/2	底完形	いわゆる「山茶碗」内面に漆付着	018-03
94	陶器	椀	g5 けり	高台径	7.6	外:回転片,回転未切り痕,高台側方内:33片	砂っぽい	並	灰白2.5Y8/2	底4/12	いわゆる「山茶碗」内面と高台量付磨耗	018-07
95	陶器	椀	f11 包含層	高台径	7.6	外:回転片,回転未切り痕,高台側方内:33片	砂っぽい	並	にがい黄2.5Y6/3	底完形	いわゆる「山茶碗」	018-01
96	陶器	椀	f5-g5 けり	高台径	7.4	外:回転片,回転未切り痕,高台側方内:33片	やや良	並	灰白2.5Y8/2	底10/12	いわゆる「山茶碗」内面と高台量付磨耗	018-06
97	陶器	椀	f11 包含層	高台径	7.1	外:回転片,高台側方内:33片	砂っぽい	並	灰黄2.5Y7/2	底完形	いわゆる「山茶碗」	018-04
98	陶器	椀	f9 包含層	高台径	6.9	外:回転片,回転未切り痕,高台側方内:33片	粗	並	灰黄2.5Y6/2	底完形	いわゆる「山茶碗」内面に漆付着,高台に粉痕遺多し	018-02
99	陶器	椀	g5 けり	高台径	5.6	外:回転片,回転未切り痕,高台側方内:33片	並	並	灰黄2.5Y7/2	底完形	いわゆる「山茶碗」内面に漆付着,高台に粉痕遺	017-08
100	陶器	椀加工の碇石	f23 包含層			外:回転片,底部回転片,回転未切り痕内:回転片	砂っぽい	並	灰白2.5Y7/1	底3/12	いわゆる「山茶碗」内外面・破断面磨耗著碇石として利用か	018-08
101	石	石核	表土								サヌカイト製	021-01
102	石製品	打製石剣	表採	残存長さ厚	6.5 1.0						サヌカイト製	021-02
103	石製品	ナイフ型石器	f25 包含層	残存長さ厚	2.8 0.3				利休黄953		チャート製	020-07
104	軒丸瓦	表採	面径瓦当厚	14.4 4.6			白色砂粒含む	良好	にがい黄2.5Y6/4		摩滅著	001-01
105	鉄製品	釘	b5 包含層	残存長さ幅	6.4 1.0							021-06
106	鉄製品	釘	f11 包含層	残存長さ幅	9.3 0.9							021-07
107	鉄製品	鋸	f24 Pt3	残存長さ幅	4.6 0.7							021-03
108	鉄製品	鎌	f22 包含層	残存長さ刃厚	8.8 0.3							021-04
109	鉄製品	両頭金具	f24 包含層	長さ	4.0							021-05





①トレンチ全景（東から）



③トレンチ・④トレンチ北半部分（南から）



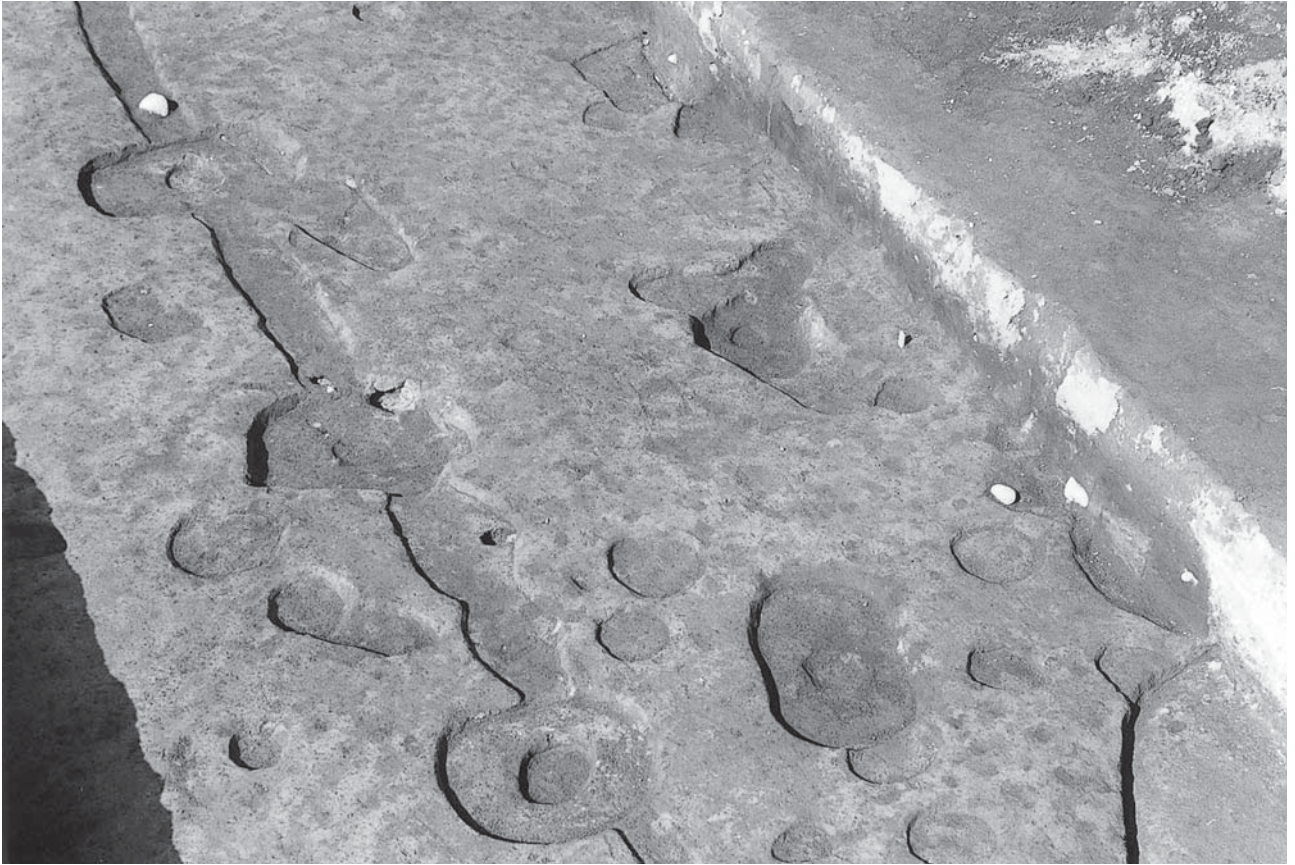


③トレンチ全景 (南から)



SB9480 (南から)





SB9481 (南東から)



SA9483・SB9485 (北東から)





SB9478 (南から)



SA9472の柱穴 (上：東から、下：南から)

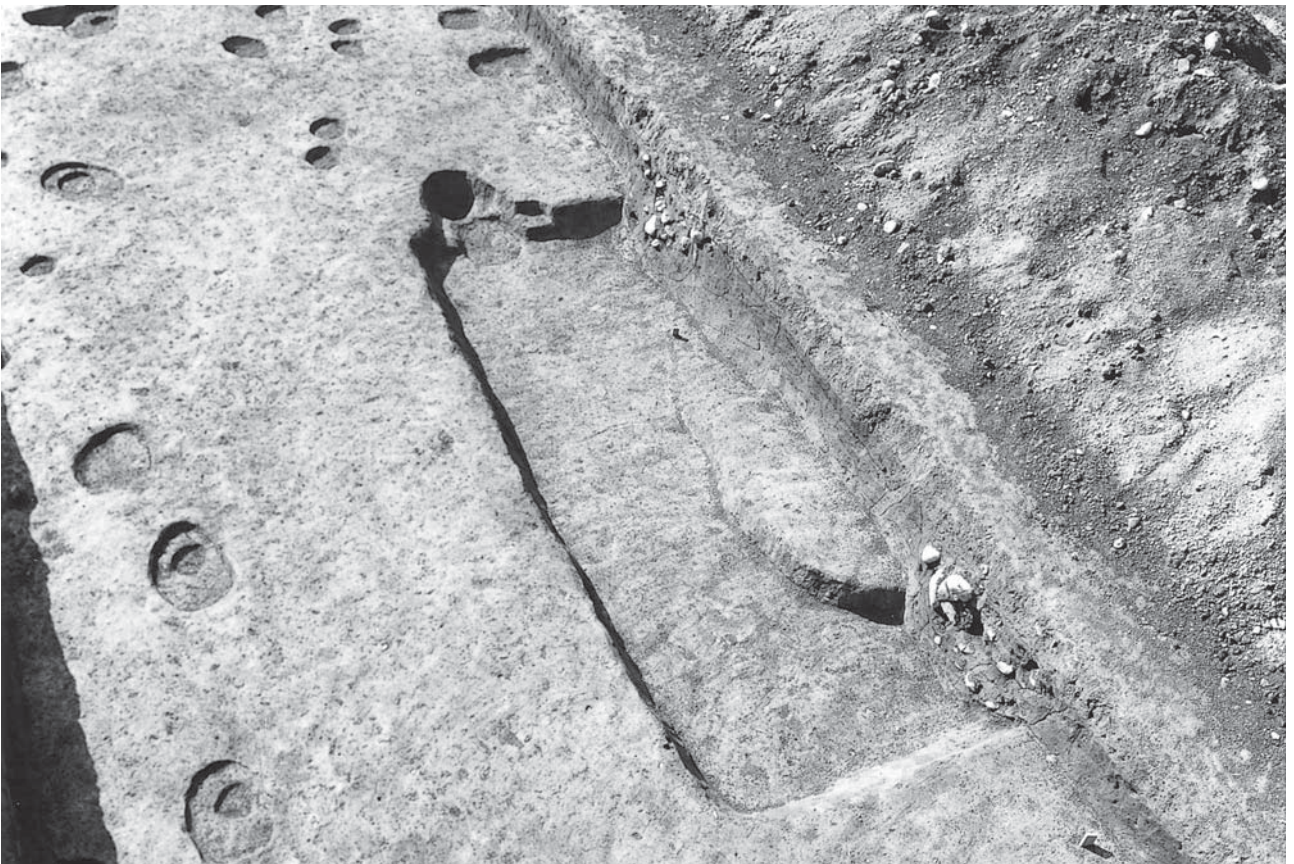


SD9466・SA9487 (北から)





SH9455 (北東から)



SD9465 (北東から)





6



9



8



13



54



55



57



62



18



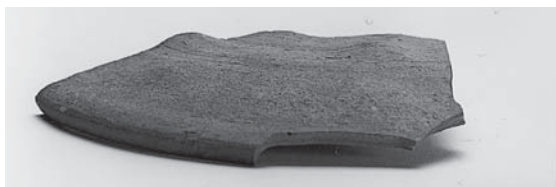
65



64



66



80



81



90



47



27



31



72



104



103



62



75



## Ⅳ 第148次調査 (西加座南 S11)

### 1 はじめに

第148次調査地は、明和町斎宮字西加座に所在し、現況は畑地等であった。以前から調査の進む方格地割西加座南区画の南辺に位置する。調査面積は230㎡である。なお、調査区周辺では第25次（1979年度）、第83・84次（1989年度）、第136次（2002年度）、第140次（2003年度）調査が行われている。

### 2 基本層序

0.2～0.3m程度の表土を除去後、灰黄褐色土(10YR4/2)層を0.2～0.3m程度確認した。調査の都合上、包含層としたものである。灰黄褐色土層の直下で黄灰色粘質土(2.5Y4/1)層あるいは黒褐色土(10YR3/1)層を確認した。これらの上面で遺構検出を行ったが、黒色土層上面でも一部の遺構を検出することができた。

### 3 遺構

奈良時代～中世の遺構を確認することができた。竪穴住居、土坑、道路側溝、溝である。以下に報告する遺構以外のものは第Ⅲ－2表を参照されたい。

#### (1) 奈良時代

##### a 竪穴建物

**S H9501** 調査区のほぼ中央に位置する。平面形は、隅丸長方形で、規模は、南北が5.0m、東西が2.4m以上、深さ0.4mである。北辺に竈跡、南側床面（一点破線部分）に張り床を確認した。また、床面の四周に幅0.4m深さ0.1mの壁周溝も確認することができた。埋土からは土師器類が中心に出土した。これらは、斎宮編年Ⅰ期4段階<sup>①</sup>（以下、○期○段階と表記する。）に相当するものといえよう。平面形態を考えたとき、通常の住居跡とは判断しがたい。四日市市小牧北遺跡で確認されたものと平面形態が近似していて、何らかの作業を行う空間を備えたものではないだろうか<sup>②</sup>。

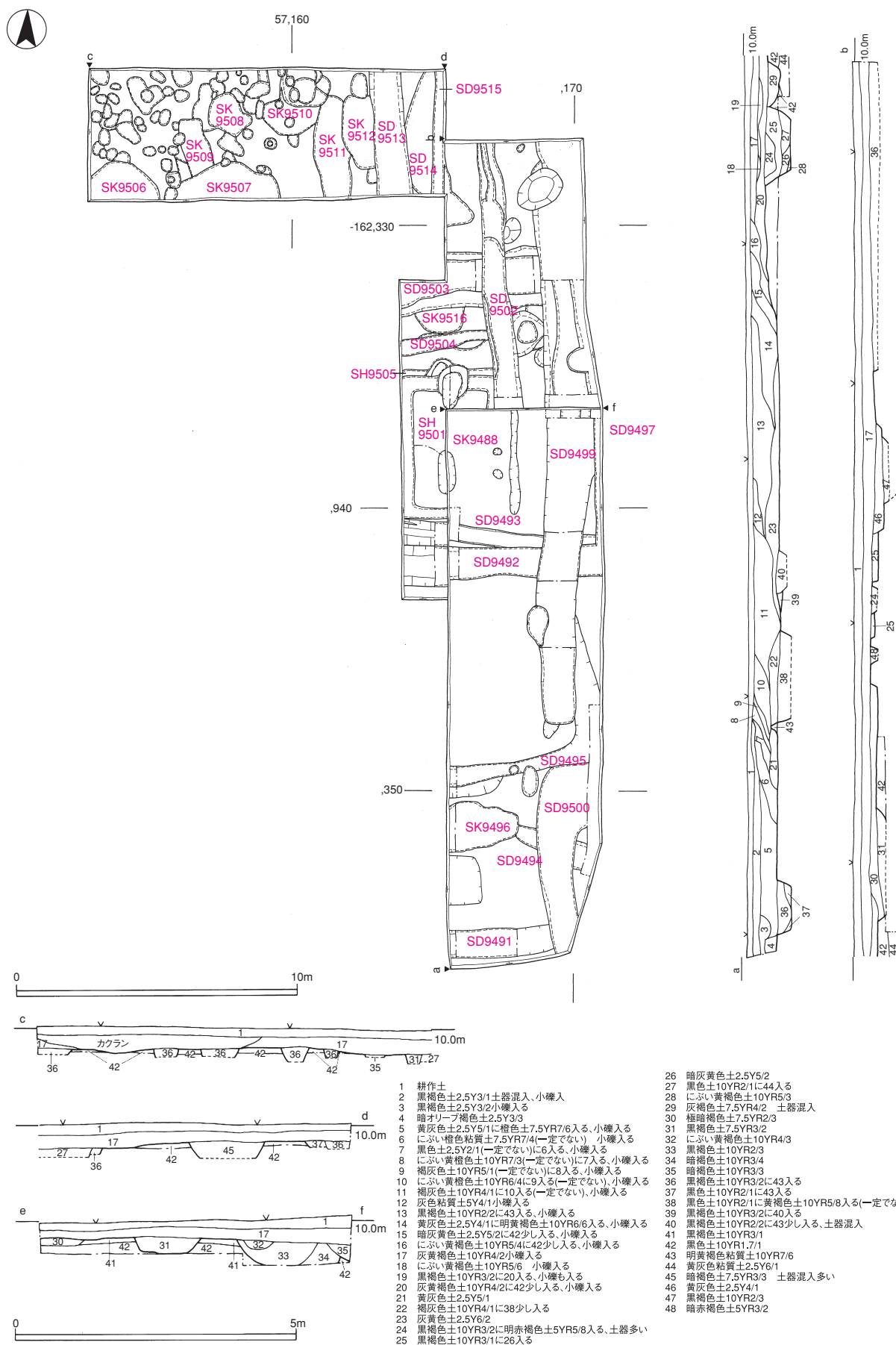
**S H9505** 他の遺構との重複により全体が判然としないが、SH9501と同様の形態を呈するものと考えられる。北辺に竈跡を確認した。埋土からはⅠ期3～4段階に比定できる土師器杯・甕、須恵器杯・甕が出土した。

##### b 道路側溝

**S D9493・9494** 調査区のほぼ中央で平行する状態で確認することができた。SD9493は幅0.5～



第Ⅲ－1図 第148次調査 調査区位置図（1：2,000）



第Ⅲ－２図 第148次調査 遺構平面図（１：２００）・土層断面図（１：１００）



0.6m・深さ0.1m、SD9494は幅0.6～0.7m・深さ0.2mの規模がある。これらは東西方向から北へ約23度振っている。共に後世の土坑や溝に切られていて全容は確認できなかった。遺構埋土からの出土遺物を調査区内では確認することができなかったが、SD9493についてはSD9492に切られている。そのことから、これらの所属時期はⅠ期と考えたい。また、SD9493は調査区から約15～20m西で行われた第83次調査SD5855、SD9494は第83次調査SD5857に続くものと考えられる。この2条の溝は一部分で遺構の深い浅いはあるものの、これまでの調査成果から史跡西部から延びている古代官道の道路側溝であることがいえる。

(2) 平安時代

方格地割

**S D 9491・9492** SD9491は幅0.8～1.0m・深さ0.3m、SD9492は幅0.8～1.0m・深さ0.3mの規模がある。これらは東西方向から北へ約2度振っている。共に後世の溝等の攪乱を受けていた。SD9491については、調査区から約15～20m西で行われた第25-13次調査や第83次調査で確認されたSD1609、SD9492は、第83次調査SD5858に続くものと考えられる。この2条の溝は一部分で遺構の深い浅いはあるものの、これまでの調査成果から方格地割西加座南区画の南辺道路側溝といえる。

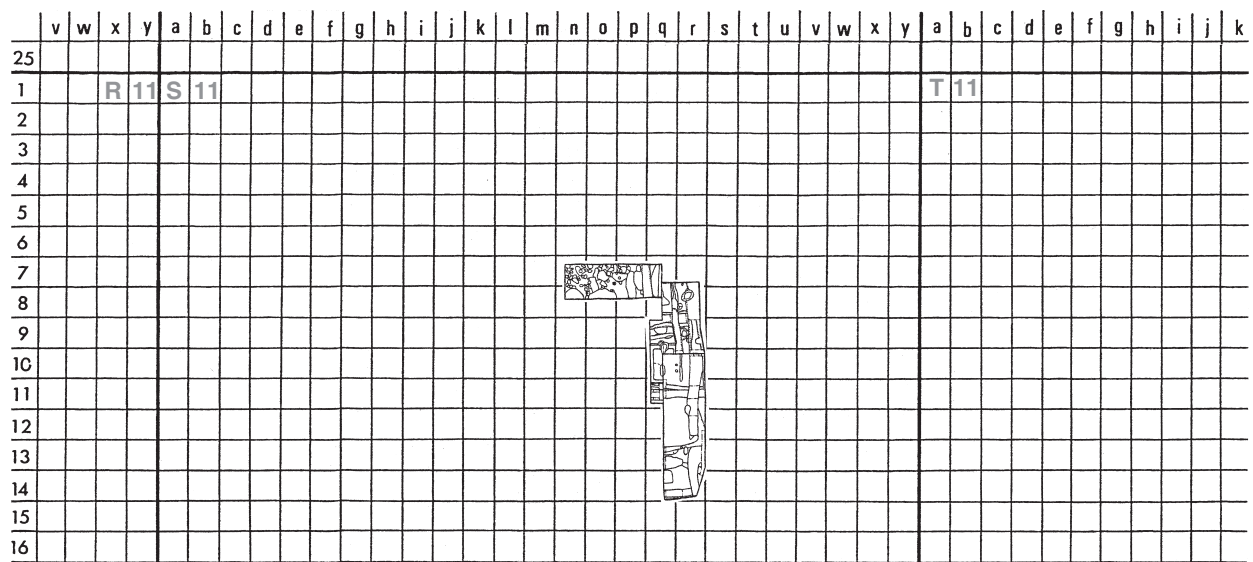
**S D 9497** 調査区内では幅0.4m以上・深さ0.3m以上の規模であることを確認した。調査区の制約や

後世の溝等に攪乱を受けていて、全容を確認することとはできなかった。南北方向から西へ約2度振っている。遺構埋土は褐色土であった。調査区から約20～30m北で行われた第84次調査において検出されたSD5870に続くものと考えられる。これまでの調査成果から方格地割西加座南区画の中央を南北に走る道路の西側側溝であろう。

なお、調査区内に第84-1次調査で確認されたSB5901の柱穴群が延びてくる可能性があったが、明確な柱穴は確認できなかった。

4 遺物

掲載遺物の詳細については、第Ⅲ-3表を参照されたい。1は土師器皿Aの口縁部小片、2は須恵器皿Bの高台部分である。斎宮編年Ⅰ期4段階<sup>③</sup>（以下、○期○段階と表記する。）に比定できよう。これらはSH9501からの出土である。3は口縁部が大きく外反し体部が球形となる、小形の土師器甕Aである。Ⅰ期4段階に相当しよう。SK9498出土遺物である。4は土師器皿Aの口縁部小片である。Ⅰ期4段階に比定できよう。SD9491出土遺物である。5は下半にケズリがみられる土師器皿A。Ⅰ期4段階に比定できよう。6はロクロ土師器皿高台部分である。Ⅲ期1段階に比定できよう。これらは、SD9497出土遺物である。7は土師器小皿、8は口縁部が少し内弯する土師器杯A、9は口縁部が少し外反する土師器皿Aである。これらは、Ⅱ期1～2段階に比定で



第Ⅲ-3図 第148次調査 大地区・グリッド図（1：1,000）

きよう。SK9506からの出土である。10は土師器皿A、11は口縁部が少し外反する土師器杯A、12はロクロ土師器碗の高台部分である。13は灰釉陶器段皿の口縁部片、内面に段が認められる。14は灰釉陶器碗の底部高台部分である。これらは、Ⅱ期3～4段階に比定できよう。SK9507からの出土である。15は薄手の土師器皿である。鎌倉時代のものと考えられる。16は高めの高台が付く土師器皿である。灯明皿としての使用が考えられる。17は口縁部が少し外反する土師器杯Aである。18は灰釉陶器段皿の口縁部片、内面に段が認められる。19は灰釉陶器皿底部片である。高台部分が剥離しているようである。これらは、Ⅱ期3～4段階に比定できよう。SD9514の出土遺物である。20は土師器小皿。Ⅲ期1～2段階に相当しよう。o7pit2からの出土である。21は土師器小皿。Ⅲ期2段階に相当しよう。n7pit16からの出土である。22はロクロ土師器小皿。Ⅲ期2段階のものと思われる。n7pit17出土遺物である。23は灰釉陶器碗底部高台部分である。Ⅱ期3～4段階に相当しよう。o7pit1からの出土である。24は土馬の

脚部であろうか。土馬とするならば、Ⅱ期のものと思われる。25は緑釉陶器の底部片。高台が残存する。Ⅱ期のものであろう。これら以外にも、表土、包含層からは、古代の土師器類、須恵器類、緑釉陶器(第Ⅲ-1表参照)、灰釉陶器、黒色土器、中世陶器が出土した。

## 5 まとめにかえて

調査の結果、古代官道と方格地割が交差する部分を確認することができ、古代官道と方格地割の位置関係等を今後考える上で成果をあげることができたと考える。また、古代官道や方格地割について過去の調査の追認と検証を行うことができたといえよう。

(小瀨 学)

### [註]

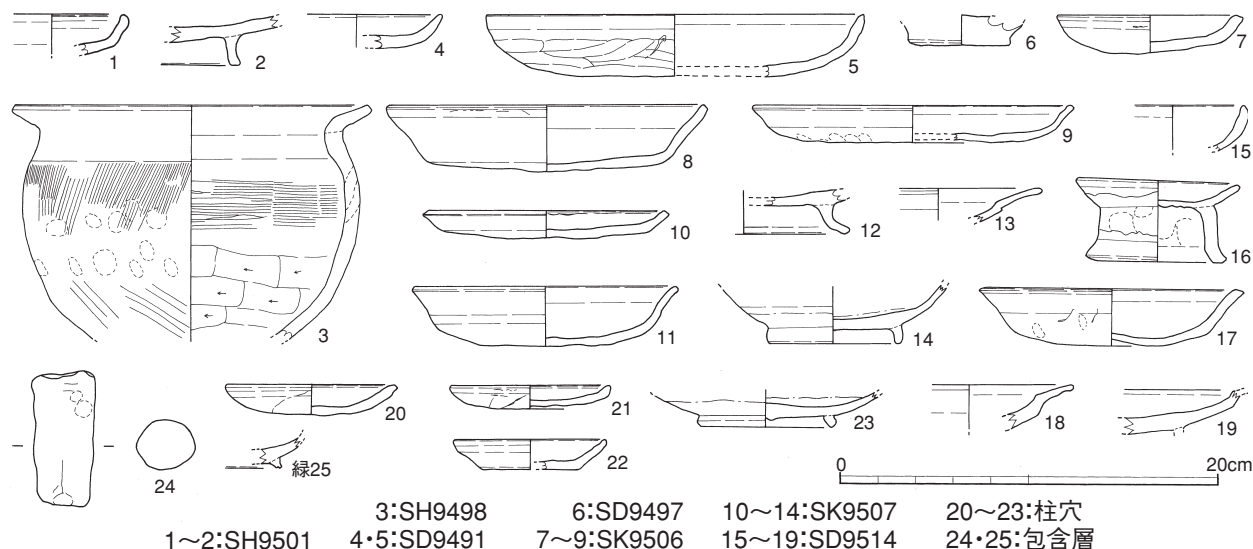
①2000年編年のことで、『斎宮跡発掘調査報告。内院地区の調査』(斎宮歴史博物館、2001年)に詳しい。1984年編年とは若干の違いが認められる。

②拙稿『小牧北遺跡発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター、2007年)に詳細が述べられている。

③①に同じ。

第Ⅲ-1表 第148次調査 緑釉陶器出土地点一覧表

次数	地区	グリット	遺構・層	破片	備考	次数	地区	グリット	遺構・層	破片	備考	次数	地区	グリット	遺構・層	破片	備考
148	S11	n7	包含層	5		148	S11	p7	SK9512	2		148	S11	q13	包含層	1	
148	S11	n7	pit3	1		148	S11	p7	pit1	1	陰刻花文あり	148	S11	r08	包含層	1	
148	S11	n7	pit20	1		148	S11	q07	SD9514	1		148	S11	r09	SD9499	1	
148	S11	n8	包含層	1		148	S11	q08	包含層	2		148	S11	r12	包含層	1	
148	S11	o7	表土	2		148	S11	q08	SD9514	1		148	S11	r14	包含層	1	
148	S11	o7	包含層	5		148	S11	q09	SD9503	1		148	S11	r15	表土	1	
148	S11	o7	pit7	1		148	S11	q09	包含層	2		148	S11		廃土	1	
148	S11	o8	包含層	5		148	S11	q09	SH9501	2							
148	S11	p7	包含層	1		148	S11	q10	表土	1							
計																42	



第Ⅲ-4図 第148次調査 出土遺物実測図(1:4)

第Ⅲ－２表 第148次調査 遺構一覧表

通版遺構番号	種別	調査時	地区	グリッド	時期	斎宮編年	遺構の性格・遺物・その他
SD9491	方格地割	溝 1	S11	q14・r14	平安	I-4	土師器皿・甕、須恵器小片、炭化物が出土。
SD9492	方格地割	溝 2	S11	q11	平安	II-3～4	土師器杯・皿・甕、須恵器甕・小片が出土。
SD9493	道路側溝	溝 3	S11	q11	奈良	I?	遺物なし。
SD9494	道路側溝	溝 4	S11	r13	奈良	I?	遺物なし。
SD9495	溝	溝 5	S11	q13	平安		土師器小片が出土。
SK9496	土坑	土坑 6	S11	q13	近世		土師器小片、陶器小片が出土。攪乱か?
SD9497	方格地割	溝 7	S11	r7・8・9・10・11	平安	I-4、III-1	土師器皿・口口皿・甕、須恵器甕、鉄製品が出土。
SK9498	土坑	土坑 8	S11	q8	奈良	I-4	土師器甕、炭化物が出土。
SD9499	溝	溝 9	S11	r7・8・9	平安	III	土師器高杯・甕・皿、山茶碗(6)、鉄製品、小片が出土。
SD9500	溝	溝 10	S11	r13・14			遺物なし。
SH9501	竪穴住居	土坑 11	S11	q9	奈良	I-4	土師器杯・皿・甕・甕、移動竈、須恵器盤・甕、炭化材が出土。
SD9502	溝	溝 12	S11	q8・9	平安	IIの範疇	土師器杯・甕、須恵器杯・蓋、小片が出土。
SD9503	溝	溝 13	S11	q8	平安	III-1～2	土師器杯・皿・甕・口口土師器碗、灰釉陶器、須恵器甕が出土。
SD9504	溝	溝 14	S11	q9	平安	IIの範疇	土師器皿・甕、小片が出土。
SH9505	竪穴住居	土坑 15	S11	q9	奈良	I-3～4	土師器杯・甕、須恵器杯・甕が出土。
SK9506	土坑	土坑 16	S11	n7・8	平安	III-1～2	土師器皿・小皿・杯・甕が出土。
SK9507	土坑	土坑 17	S11	o7・8	平安	II-4	土師器杯・皿・小皿・甕・高杯、灰釉陶器片、陶器片が出土。
SK9508	土坑	土坑 18	S11	o7	平安	III-2	土師器皿・杯・口口土師皿や碗、陶器小片が出土。
SK9509	土坑	土坑 19	S11	o7・8	平安	III-1～2	土師器皿・甕・口口土師器碗、灰釉陶器片、陶器片が出土。
SK9510	土坑	土坑 20	S11	p7	鎌倉		土師器皿・甕・碗・高杯、口口土師器皿、灰釉段皿、山茶碗(6)、陶器鉢が出土。
SK9511	土坑	土坑 21	S11	p7	平安	III	土師器皿・甕・口口土師器皿、陶器小片、山茶碗(6)、鉄製品出土。
SK9512	土坑	土坑 22	S11	p7	平安	III	土師器皿・甕・口口土師器、灰釉陶器、山茶碗、鉄製品出土。
SD9513	溝	溝 23	S11	p7・q7	平安	II-3～4	土師器皿・杯・甕、須恵器小片が出土。
SD9514	溝	溝 24	S11	q7	平安	III-1～2	土師器小皿・台付小皿・甕、灰釉陶器段皿、緑釉陶器が出土。
SD9515	溝	溝 25	S11	q7	平安	III-1～2	土師器杯・皿・甕・口口土師器片、灰釉陶器片が出土。
SK9516	土坑	土坑 26	S11	q9	平安	II	土師器杯・甕が出土。

第Ⅲ－３表 第148次調査 出土遺物観察表

番号	出土遺構	器形 器種	法量 (cm)		調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	登録 番号
1	SK9501	土師器 皿			外:ヨコテ→ナテ・オI 内:ヨコテ→ナテ	並	良	橙5YR7/8			002 -07
2	SK9501	須恵器 皿			外:口口ナテ→ハリツナテ→回転系切痕 内:口口ナテ	やや密	良	灰白2.5Y8/1			002 -11
3	SH9498	土師器 甕	口径	18.4	外:ヨコテ→オI・ハナナ7本/1cm→オI→ ハナナ3本/1cm 内:ヨコテ→ハナナ7本/1cm→ヘリナテ	粗	良	にぶい黄橙10YR7/4	口4/12		002 -09
4	SD9491	土師器 皿			外:ヨコテ→ナテ 内:ヨコテ→ナテ	並	良	橙5YR6/8			003 -05
5	SD9497	土師器 皿	口径 器高	19.9 3.25	外:ヨコテ→ナテ・オI 内:ヨコテ→ナテ	密	良	橙5YR6/8	口6/12		003 -01
6	SD9497	口口土師器 皿	高台径	5	外:口口ナテ→回転系切痕 内:ナテ	やや粗	良	灰白2.5Y8/1	高台ほぼ 完形		003 -02
7	SK9506	土師器 小皿	口径 器高	9.3 2.0	外:ヨコテ→ナテ・オI 内:ヨコテ→ナテ	やや粗	良	灰白2.5Y7/1	ほぼ完形		001 -06
8	SK9506	土師器 杯	口径 器高	16.5 3.5	外:ヨコテ→ナテ・オI 内:ヨコテ→ナテ	並	良	浅黄橙10YR8/4	口3/12		001 -05
9	SK9506	土師器 皿	口径 器高	16.6 1.8	外:ヨコテ→北・オI 内:ヨコテ→ナテ	やや密	良	橙5YR6/8	口3/12		001 -03
10	SK9507	土師器 皿	口径 器高	12.4 1.45	外:ヨコテ→オI 内:ヨコテ→ナテ	密	良	橙5YR7/8	口3/12		001 -09
11	SK9507	土師器 杯	口径 器高	13.8 3.1	外:ヨコテ→ナテ・オI 内:ヨコテ→ナテ	並	良	浅黄橙7.5YR8/6	口3/12		001 -08
12	SK9507	口口土師器 碗			外:ナテ→ハリツナテ→回転系切痕 内:ナテ	密	良	橙5YR7/8			001 -11
13	SK9507	灰釉陶器 段皿			外:ヨコテ→口口ナテ 内:ヨコテ→口口ナテ	密	良	灰白2.5Y7/1			001 -10
14	SK9507	灰釉陶器 碗	高台径	6.9	外:口口ナテ→ハリツナテ→回転系切痕 内:口口ナテ	密	良	灰白2.5Y7/1	高台4/12		001 -12
15	SD9514	土師器 皿			外:ナテ 内:ナテ	やや粗	良	橙5YR7/8			002 -05
16	SD9514	土師器 台付小皿	口径 器高	8.45 4.25	外:ヨコテ→ハリツナテ・オI→ヨコテ→オI・ ヨコテ→ハリツナテ→ナテ 内:ヨコテ→ナテ	やや粗	良	橙7.5YR7/6	口11/12 高台完形	口縁に煤付着	002 -08
17	SD9514	土師器 杯	口径 器高	13.2 3.0	外:ヨコテ→オI 内:ヨコテ→ナテ	並	良	浅黄橙10YR8/4	口6/12		002 -03
18	SD9514	灰釉陶器 段皿			外:ヨコテ→口口ナテ 内:ヨコテ→口口ナテ	密	良	灰白2.5Y7/1			002 -06
19	SD9514	灰釉陶器 段皿			外:口口ナテ→ハリツナテ→回転系切痕 内:口口ナテ	やや密	良	灰白2.5Y8/1			002 -04
20	o7pit2	土師器 小皿	口径 器高	8.9 1.5	外:ヨコテ→ナテ・オI 内:ヨコテ→ヨコテ→ナテ	やや粗	良	浅黄橙10YR8/3	口11/12		002 -02
21	n7pit16	土師器 小皿	口径 器高	8.3 1.25	外:ヨコテ→ナテ・オI 内:ヨコテ→ナテ	やや粗	良	浅黄橙10YR8/3	ほぼ完形		001 -01
22	n7pit17	土師器 小皿	口径 器高	7.9 1.6	外:ヨコテ→口口ナテ→回転系切痕 内:ヨコテ→口口ナテ	やや粗	良	橙7.5YR7/6	口6/12 底4/12		001 -02
23	o7pit1	灰釉陶器 碗	高台径	6.9	外:口口ナテ→ハリツナテ→回転系切痕 内:口口ナテ	密	良	灰白2.5Y8/1	高台ほぼ 完形	重ね焼き痕あり、内面磨耗	002 -01
24	包含層	土師器			外:ヨコテ・北・オI	並	良	明黄褐10YR7/6			003 -04
25	包含層	緑釉陶器 碗			外:口口ナテ→ハリツナテ→回転系切痕 内:口口ナテ	密	良	釉:ねこやなぎ825 素地:灰白7.5Y7/1			003 -03





南側調査区（北から）



北側調査区（北西から）





SH9501・9505 (南から)



SD9491 (東から)





SD9492・9493 (東から)



SD9492・9493完掘状況 (東から)





p7-q7地区 (南から)



n7-o7地区 (南から)







## Ⅳ 第2次調査（古里遺跡A地区）概要報告

### 1 はじめに

昭和46（1971）年度に「古里遺跡」A・B地区（現在は第2次・第3次調査と呼称している）で実施された住宅団地開発に先立つ発掘調査は、掘立柱建物群や大規模な溝遺構、蹄脚硯や緑釉陶器などの数々の出土遺物の確認により、史跡斎宮跡の発見と解明の端緒となったものである。しかしながら、この斎宮跡の発掘調査に大きな足跡を残したいわば原点ともいえるべき初期の調査の成果については調査後30年以上経過したにもかかわらず、十分に公表され、情報の共有化が行われ、活用に至る状況にあるとはいえないがたかった。

そこで斎宮歴史博物館では平成14年度の発掘調査概報で第7次調査（古里遺跡E地区）を平成16年度には第3次調査（同C地区）の遺構の整理や出土遺物の紹介を行ってきた。特に平成16年度の調査概報では、最終的にはこの古里地区の現時点での総括である正報告書の刊行を視野に入れ、3ヶ年度で第2・3次（古里遺跡A・B地区、以下省略）の整理と成果の公開を進める構想がたてられている。

本年度も、この流れを受け、第2次調査の調査記録及び出土遺物の整理を進めてきたが、その区切りとしてその概要について本章において紹介し、将来の総括的な作業に資したいと思う。

### 2 再整理作業

第2次調査の遺構データは、まず遺構については、発掘調査時に作成された1／20の遺構実測図とそれを集成した1／100の全体平面図、調査区全体を4m×4mの小地区で分割したグリッド割図、またこれまでに概要的に報告されてきた3棟の掘立柱建物の位置図が残されているのみで、遺構の埋土情報や重複関係、また現地での仮番号などを記入した各小地区ごとの遺構カードや、それを集成した全体図も残されていないため、出土遺物の取り上げの際に添付する遺物カードに記載された仮の遺構名称（第

Ⅳ－1表参照）から図面上の遺構と出土遺物を整合させていった。これにより遺構出土遺物の約60％は遺構の特定ができたが、土坑、溝の類にとどまり、掘立柱建物の柱穴やピットについては今回の整理作業では特定できていない。

また、当時の調査では現在斎宮跡の発掘調査の際に実施している調査区への国土座標の付与がなされていない。そこで、昭和62（1987）年度に古里地区で実施した第71次調査の際に、旧古里遺跡の各調査区の中に2箇所ずつ8m×4mの範囲で再発掘を行い、その中に設置したポイントに第Ⅵ系の国土座標を与えている。さらに第2次調査では平成3（1991）年度の第91次調査も調査区を重複させて実施しており、これらの3点から第Ⅳ－2図の座標の表示を行っている。そのため、旧古里遺跡の各調査区については、国土座標の精度が他の調査区と異なるものとして了解されたい。

出土遺物は、昨年度までの整理作業で、すでに木製の整理箱からプラスチック製のものに置換している。その総量にして37箱になる。それぞれの遺物の取り上げの過程や出土状況は図面・写真もないため、現状ではほとんど分らない。そのため、遺構の時期決定は困難なものも多い。そうした状況から、今回概要を報告するにあたり同じ遺構からでも、できるだけ時期的な幅が分るように抽出を行った。各遺構の最終的な時期決定などは、古里地区の再整理を総括する際に実施されるのが望ましいと考える。

### 3 遺構の概要

第2次調査の調査面積は第3～7次調査と比較して調査区がやや狭く、約1,200㎡である。調査区は東辺と南辺はかつての地割りに沿っているが、北～西辺は斜めに切り取った形状となっている。標高は調査区の南で約12.9m、北で約12.3mで北に向かって傾斜した地形であることが分る。

遺構については、出土遺物が特定できたり、明瞭な掘削を伴っているもの、遺構のディテール写真が







第Ⅳ－１表 第２次調査 遺構一覧表

遺構名	種別	調査時遺構名	地区・グリッド	時期	遺構の性格・遺物・その他
SK9520	土坑	-	03K13・14・18・19	不明	出土遺物不明
SK9521	土坑	-	03K18	不明	出土遺物不明
SK9522	土坑	-	03K18・19・23・24	不明	出土遺物不明
SK9523	土坑	土坑中	03K20	室町	《奈良》土師器:甕 《室町》土師器:皿・鍋 無釉陶器:甕
SD9524	溝	溝埋土、溝柱埋土、溝中、溝状埋土、溝	03J11・12・16/03K20・24・25/02K04・05・07～09・11～13	室町	《奈良》土師器:杯・皿・高杯・甕・把手付鍋・甕 須恵器:杯蓋・甕 《平安》灰釉陶器:皿・壺 《鎌倉》無釉陶器:椀(山茶椀) 《室町》土師器:皿・蓋・鍋・茶釜・羽釜 無釉陶器:捏鉢・擂鉢・甕 施釉陶器:皿
SD9525	溝	溝中、土坑中?	03J12・17	室町?	出土遺物SD07と混乱
SD9526	溝	溝中、土坑中?	03J12・13・17・22	室町	《室町》土師器:皿・鍋 無釉陶器:甕
SD9527	溝	土坑中?	03J13・17・18・21・22/02J01	室町?	出土遺物SD07と混乱
SD9528	溝	-	03J19・20・22・23/02J01・02・06/02K10・22/01K01	奈良	出土遺物不明・奈良古道東側溝
SD9530	溝	-	03J18・23・24	不明	出土遺物不明
SK9531	土坑	-	03J23・24	不明	出土遺物不明
SK9532	土坑	-	03L24・25/02L04・05	不明	出土遺物不明
SK9533	土坑	土坑	03L25	室町	《弥生》弥生土器片 《鎌倉》無釉陶器:椀(山茶椀) 《室町》土師器:鍋・茶釜 無釉陶器:甕・捏鉢 青磁片
SK9534	土坑	方形土坑内	03K21	室町	《奈良》土師器:高杯・甕・把手付鍋 須恵器:甕 《鎌倉》無釉陶器:椀(山茶椀) 《室町》土師器:鍋・羽釜・茶釜 無釉陶器:捏鉢 施釉陶器:椀 土錘
SK9535	土坑	-	02L03・04	不明	出土遺物不明
SD9536	溝	-	02L02・03・08・09	不明	出土遺物不明
SK9537	土坑	大土坑	03L25/03K21/02K05・10/02K01・06	室町	《弥生》弥生土器片 《奈良》土師器:甕・鍋 無釉陶器:壺・甕
SK9538	土坑	土坑状砂質土	02K01・06	奈良	《奈良》土師器:高杯・盤・甕・長胴甕 須恵器:甕
SK9540	土坑	土坑	02K02	飛鳥～奈良	《飛鳥～奈良》土師器:杯・皿・高杯・甕・甕・甕 《平安》ロクロ土師器:皿・台付椀 《室町》土師器:鍋
SK9541	土坑	-	02K02・03	不明	出土遺物不明
SK9542	土坑	方形土坑	02K02・03・07・08	奈良	《弥生》弥生土器片 《奈良》土師器:杯・高杯・甕・把手付鍋・甕 須恵器:杯・甕 《室町》土師器:鍋
SE9543	井戸	井戸埋土	02K03・04	室町	素掘り井戸 《室町》土師器:皿・鍋・茶釜 無釉陶器:捏鉢 施釉陶器:椀(天目茶椀)
SK9544	土坑	-	02K09・13・14	不明	《平安》緑釉陶器:椀
SD9545	溝	溝1埋土、溝中、溝・溝埋土、溝1埋土	02L14・15/02K05・10～12・14・15～19/02J01・06～08	室町	《飛鳥》土師器:杯 須恵器:杯蓋 《奈良》土師器:杯・高杯・蓋・甕・把手付鍋 須恵器:壺・甕・鉢 《平安》土師器:甕 ロクロ土師器:椀 灰釉陶器:椀・皿 緑釉陶器:皿 《鎌倉》無釉陶器:椀(山茶椀) 《室町》土師器:皿・鍋・茶釜・羽釜 無釉陶器:壺・甕・擂鉢・捏鉢・片口鉢 施釉陶器:椀・椀(天目茶椀)・皿 《近世?》磁器:皿(染付) 《不明》石製品:硯
SK9546	土坑	-	02J01・02	不明	出土遺物不明
SK9547	土坑	黒色土中	02J03・08	室町	《室町》土師器:鍋
SD9549	溝	溝中、溝埋土	02K20・25/02J06・11・16・21	不明	《室町》土師器:鍋
SK9550	土坑	-	02L08・09・13・14	不明	出土遺物不明
SK9551	土坑	方形土坑中	02L19	室町	《奈良》土師器:甕・把手付鍋・甕 須恵器:杯 《室町》土師器:鍋・茶釜 施釉陶器:椀(天目茶椀)・皿
SK9552	土坑	土坑状埋土中、方形土坑中、方形土坑	02K11	奈良	《弥生》弥生土器:壺 《奈良》土師器:杯・高杯・盤・甕・長胴甕・把手付鍋・甕・甕・ミニチュア甕 須恵器:杯蓋・杯・壺・短頸壺・俵瓶・甕 《平安》土師器:杯 《室町》土師器:皿・鍋・羽釜・茶釜 無釉陶器:壺・甕
SK9553	土坑	土坑状黒色土、土坑状埋土	02L15・20/02K11・16	室町?	《奈良》土師器:杯・高杯・甕・把手付鍋・甕 須恵器:杯・壺・甕 《平安》土師器:杯・甕 須恵器片 《鎌倉》無釉陶器:椀 《室町》土師器:鍋・羽釜
SZ9554	ピット群	土坑、土坑内	02L20/02K16	平安～室町	《平安》土師器:椀 黒色土器:椀
SD9555	溝	-	02K17・22/01K02	不明	出土遺物不明
SK9556	土坑	土坑内	02K18・23・24	不明	出土遺物不明
SD9557	溝	-	02K18・19・23/01K2	不明	出土遺物不明
SK9558	土坑	-	02K23	不明	出土遺物不明
SK9559	土坑	土坑、土坑内	02K19・23	室町	《平安》ロクロ土師器:椀 須恵器片 《鎌倉》無釉陶器:椀(山茶椀) 《室町》土師器:皿・鍋・茶釜・蓋・十能・羽釜 無釉陶器:壺・甕・擂鉢 施釉陶器:椀(天目茶椀)・椀(灰釉)壺(鉄釉) 青磁:椀 石製品:石臼

第Ⅳ－２表 第２次調査 掘立柱遺物一覧表

遺構名	地区・グリッド	建物時期	規模 東西間(m)×南北間(m)	柱間寸法 東西(m)・南北(m)	主軸	方位 (N基準)	備考
SB9529	03J16・17・21～23/02J02・03	室町?	4 (8.4) × 2 (5.0)	2.1—2.5	東西	N67°W	
SB9539	03K22・23/02K02～04・07～09	室町?	3 (7.0) × 3 (6.3)	2.3—2.1	東西	N64°W	総柱建物か?
SB9548	02K10・15/02J11・16	室町?	2 (4.6) × 2 (4.2)	2.3—2.1	東西	N64°W	総柱建物か?

撮影されており、調査担当者が調査時点で注意していたと考えられるものを尊重し、その結果掘立柱建物3棟、土坑24基、井戸1基、溝11条、その他の遺構1基を抽出した。

#### (1) 斎宮Ⅰ期（飛鳥・奈良時代）の遺構

出土遺物は調査区のほぼ全域から出土するが、この時期の遺構としては溝1条と、調査区中央部付近に集中する土坑3基のみである。

S K 9538は、後述する室町時代の土坑S K 9537との重複関係が明確ではないものの、遺構写真で判読できるように、遺構の底面高に差があるとみられ、出土遺物も本土坑が含まれる02K-06グリッドの出土遺物は周囲に比べて奈良時代のものが多く、磨耗もあまりみられないため単独の遺構として整理した。東西3.0m×南北3.4m、深さ0.3～0.4mの規模になる。この東のS K 9540は直径1.7m、深さ0.4mの略円形の土坑で、斎宮跡土器編年でⅠ-1期から2期頃のものともみられる土師器・須恵器が出土している。最も南に位置するS K 9552は弥生時代から室町時代の土器まで出土しているが、Ⅰ-1～2期頃のものも多く、室町期の遺物は重複する溝S D 9545からの混入と判断した。一辺2.3m以上、深さ0.3mの方形の土坑とみられる。

調査区の東半を北東から南西に向けて断続的に貫通するS D 9528は、第30次調査や第144次調査でも確認されている奈良時代の道路S F 8945の西側の側溝にあたるもので、出土遺物は明確に選別できなかったが、この時期の遺構とした。本調査区内では北から約20mのびて、いったん13mほど途切れたあとふたたび7.5mの延長が確認できる。幅0.5～0.6m、深さは0.1～0.2m程度の浅く小規模なものである。断続的ながら第30次調査のS D 1622や第144次調査のS D 8879に続くものと想定されており、おおむねN40°Eの方向をとる。しかしながら、第2次調査では東側溝に相当する遺構は確認されていない。第30次・第144次調査やさらに南の第132次調査ではこの東側溝に相当する溝が確認され、両溝で区画される道路は側溝の心々間で約8.1～8.5mの幅が想定でき、またこれらの調査結果からは東側溝の方が深さ0.6m程度と西側溝より深く掘削されていることが知られ、第2次調査区内でも遺構の重

複により不明瞭となっているものの、本来この付近でも東側溝があったものと考えられる。

#### (2) 斎宮Ⅳ期以降（中世）の遺構

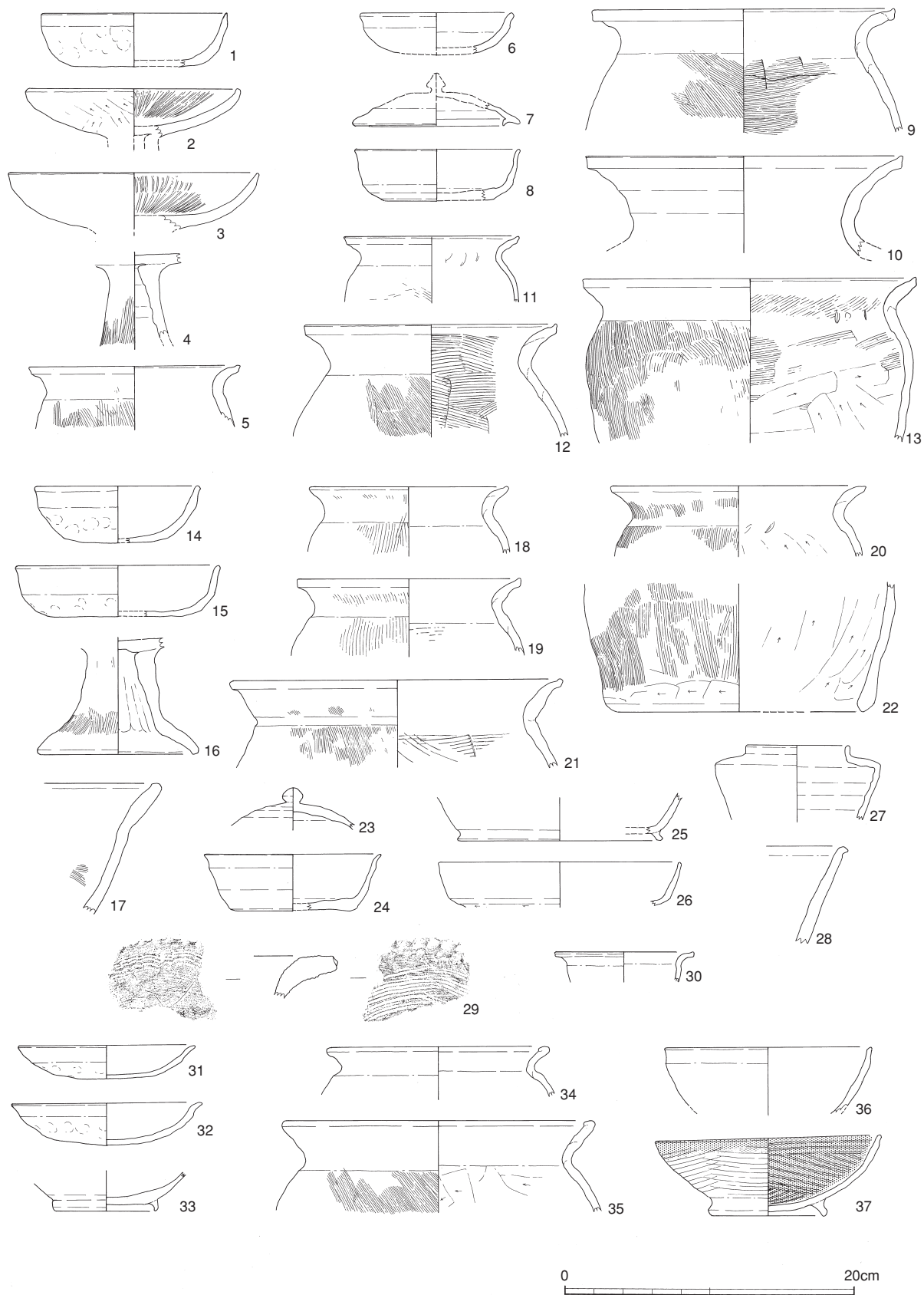
第2次調査で検出された遺構の大部分を占めるが、鎌倉時代のものは明確でなく、室町時代後期のものが大勢を占める。土坑9基、井戸1基、溝5条、不明遺構1基がある。

土坑では調査区の西部にある大型の土坑S K 9537が目立つ。長さ9.0m、幅4.3m、深さ0.5～0.7mあるが、出土遺物は僅少で整理箱で1箱にも満たない。その北西にあるS K 9533からは、一辺1.5m、深さ0.5mの略方形の小型の土坑ながら土師器茶釜の完形品(38)や鍋(39・40)が出土している。出土状況は不明だが、あるいは墓坑であった可能性もある。S K 9559は東西4.0m×南北3.6m、深さ0.6mの土坑で、斎宮Ⅱ期から室町時代後半の遺物が整理箱で3箱分出土している。

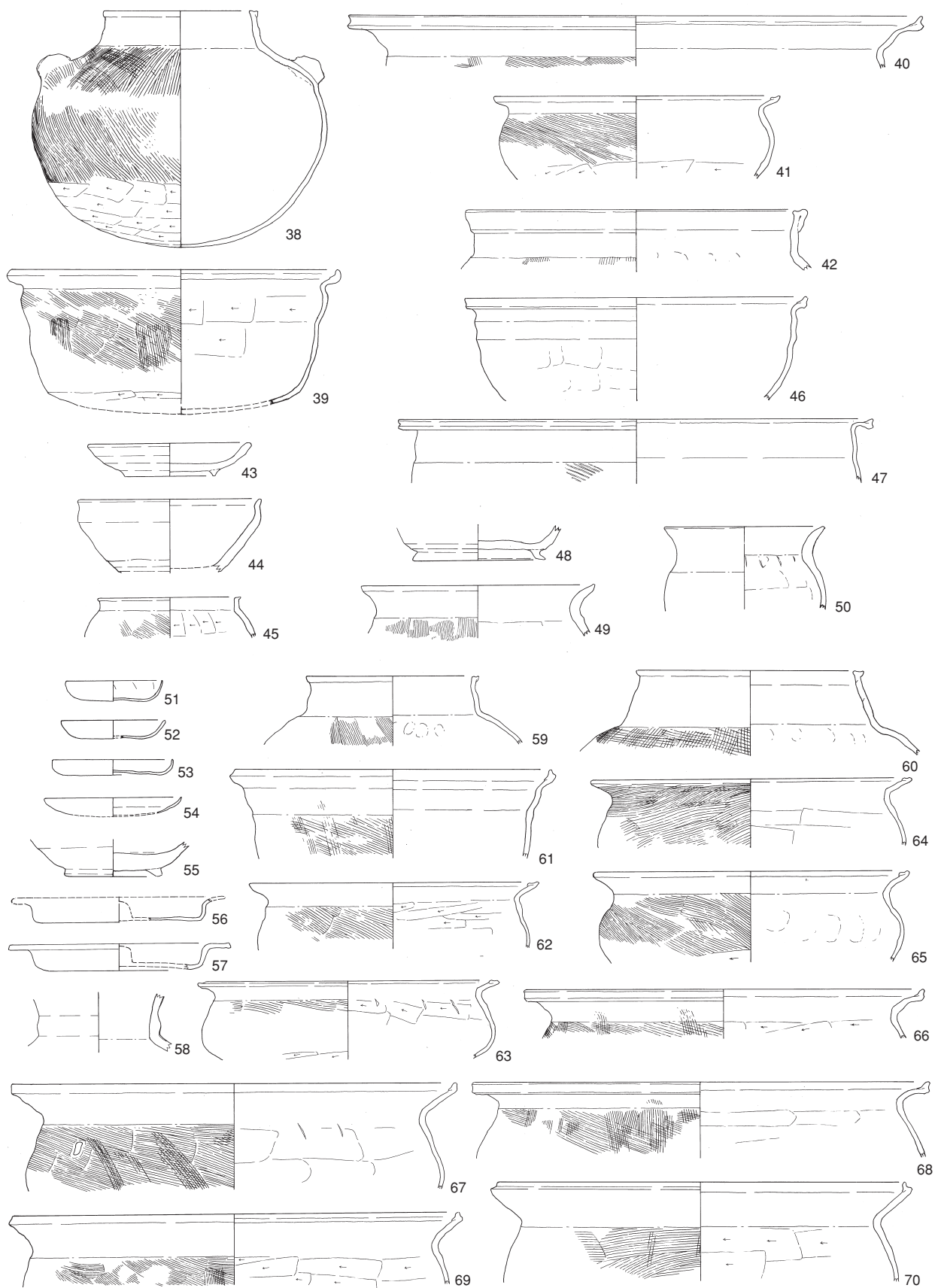
井戸は調査区のほぼ中央にS E 9543がある。検出規模で東西2.0m、南北2.2mあるが、最下部では0.9m×1.1mの略方形になる。遺構検出面からおおよそ1.0mの深さまで調査されているが、完掘していない可能性がある。

溝では調査区内を大きく分割する2条の溝S D 9524とS D 9545が注目される。S D 9524は調査区内を北東から北西に向けてほぼ直角に逆L字状に折れ、S D 9545はそれに対応するように溝心々間でおおよそ3.5～5.0mの間隔で鍵の手状に折れるように掘削されている。幅1.0～1.5m、深さ0.4～0.6m程の規模で、断面の形状が緩やかな逆台形を呈し、室町時代のものを中心に多量の遺物が出土している。この2条は、その間に同時期とみられる遺構を伴わないことから、道路および道路で区画された屋敷地を構成するものと考えられる。また出土遺物の区別ができないが、調査区北東部のS D 9525・9526や北東部のS D 9527、南東部のS D 9549・9555なども重複関係は不明だが同様の性格のものと考えられる。それぞれの溝には掘り返しのような痕跡は明瞭でないが、こうした区画や道路が改修され、中世後期のある程度の時間幅の中で存続していた可能性も指摘できる。周辺に目をやると、史跡西部の一帯でもこの第2次調査区のほか、第3次・7次・76-



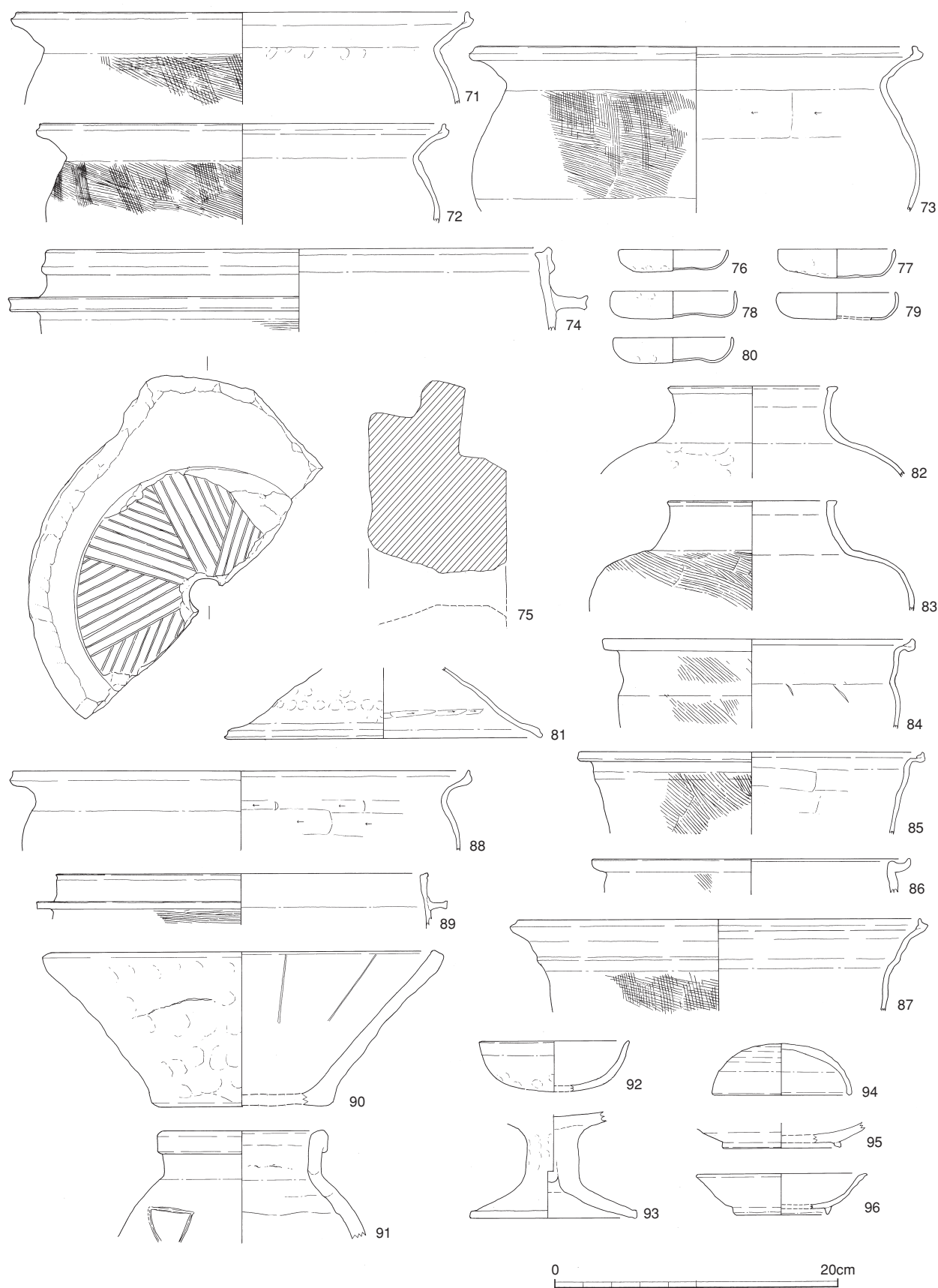


第Ⅳ-3図 第2次調査 出土遺物実測図(1) (1:4)

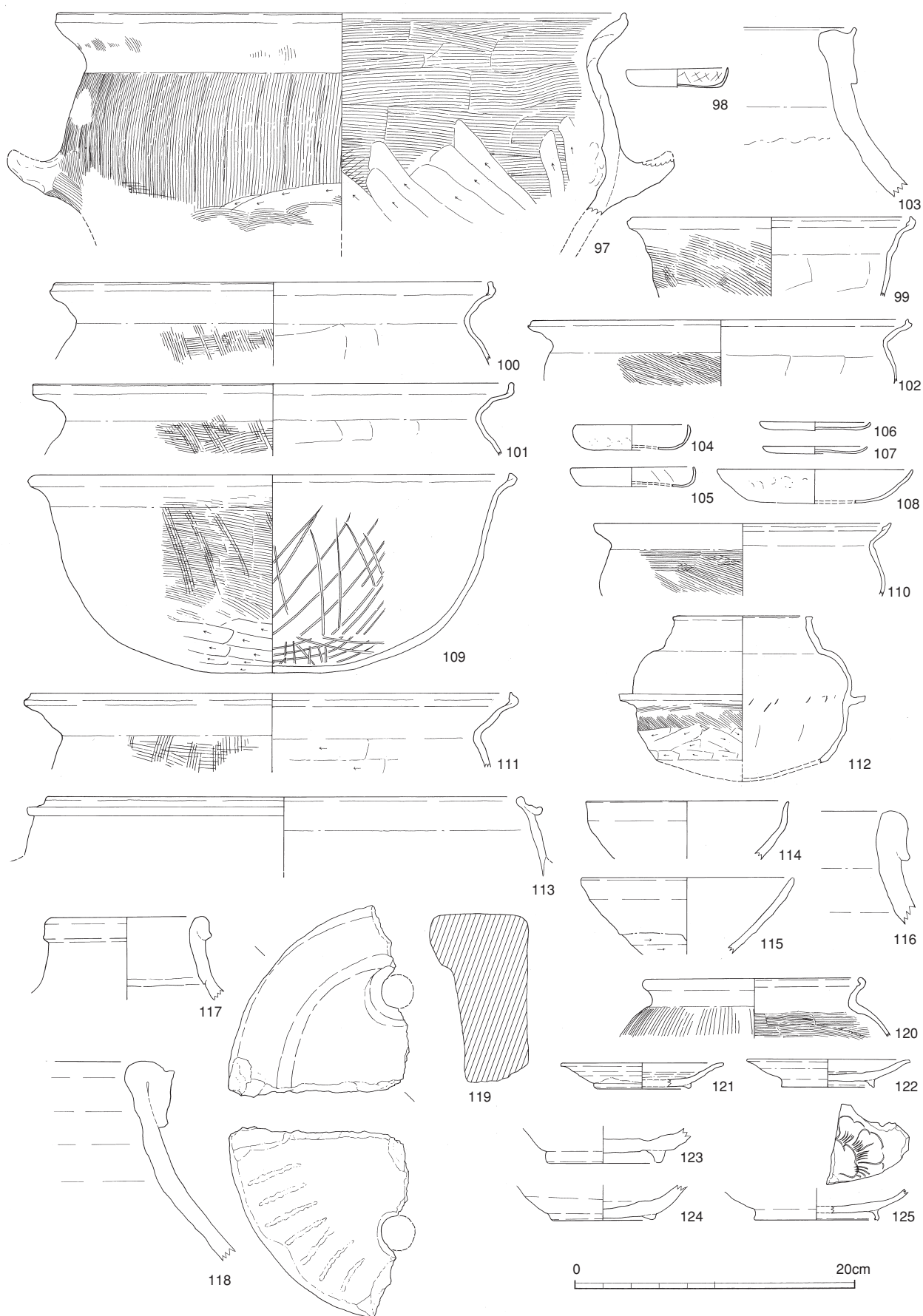


第Ⅳ-4図 第2次調査 出土遺物実測図(2) (1:4)





第Ⅳ-5図 第2次調査 出土遺物実測図(3) (1:4)



第Ⅳ-6図 第2次調査 出土遺物実測図(4) (1:4)



第Ⅳ－３表 第２次調査 出土遺物観察表（１）

番号	器種	器形	地区・遺構	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎 土	焼成	色 調	残存度	備 考	登録番号	
1	土師器	杯	SK9540	口径 器高	12.6 3.7	口縁部ヨコナデ、体部内外面ナデ・オサエ	微細な砂粒を多量に含む	やや軟調	にぶい黄橙10YR6/4	口径の1/4	003-04	
2	土師器	高杯	SK9540	杯口径	14.4	口縁端部ヨコナデ、外面ヘラズリ、内面ヘラミガキ	微細な砂粒含む	並	にぶい褐7.5YR5/4	杯口径の1/4	003-01	
3	土師器	高杯	SK9540	杯口径	16.8	口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ、内面二段のヘラミガキ	並	並	橙5YR6/6	杯口径の1/4	003-02	
4	土師器	高杯	SK9540	残高	6.3	外面ナデのちハケメ、内面無調整	並	並	橙7.5YR7/6	全体の約30%	003-05	
5	土師器	甕	SK9540	口径	14.4	口縁部ヨコナデ、体部外面タテハケ、内面ナデ	微細な白色粒含む	並	外:灰黄褐10YR6/2 内:黒褐2.5Y3/1	口径の1/4	003-06	
6	土師器	杯	SK9542	口径	10.4	口縁部ヨコナデ、体部内外面ナデ	1mm以下の砂粒多量に含む	並	にぶい褐7.5YR7/4	口径の1/7	004-07	
7	須恵器	杯蓋	SK9542	最大径	11.6	口縁部ヨコナデ、外面クロヘラズリ、内面クロナデ	微細な白色粒含む	並	外:灰7.5Y5/1 内:灰7.5Y6/1	口径の1/8	004-08	
8	須恵器	杯	SK9542	口径 器高	11.2 3.6	口縁部ヨコナデ、体部クロナデ	並	やや軟調	外:灰7.5Y5/1 内:灰5Y6/1	口径の1/4	004-01	
9	土師器	甕	SK9542	口径	20.8	口縁部ヨコナデ、体部外面タテハケ、内面ヨコハケ	並	並	にぶい黄橙10YR7/3	口径の1/4	004-02	
10	須恵器	甕	SK9542	口径	22.0	口縁部ヨコナデ、体部内外面クロナデ	1mm弱の白色粒を多量に含む	並	外:灰白10Y7/1 内:灰5Y4/1	口径の1/8以下	003-07	
11	土師器	甕	SK9538	口径	12.0	口縁部ヨコナデ、体部外面よわいハケ、内面ナデ、ヘラ当り痕	並	並	外:にぶい黄橙10YR7/3 内:浅黄褐10YR2/1	口径の1/3	004-04	
12	土師器	甕	SK9538	口径	17.2	口縁部ヨコナデ、体部外面タテハケ、内面ヨコハケ	並	並	にぶい黄橙10YR6/4	口径の1/4	004-03	
13	土師器	甕	SK9538	口径	22.8	口縁部ヨコナデ、体部外面タテハケ、内面ヨコハケとヘラズリ	微細なクサリ礫を多量に含む	並	にぶい黄橙10YR7/4	口径の1/4	004-06	
14	土師器	杯	SK9552	口径 器高	11.0 3.9	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	微細な砂粒を多量に含む	並	外:にぶい黄橙10YR6/4 内:にぶい橙7.5YR6/4	口径の1/3	001-01	
15	土師器	杯	SK9552	口径 器高	13.7 3.5	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	並	並	外:にぶい橙5YR6/4 内:にぶい黄褐10YR6/3	口径の1/3	001-03	
16	土師器	高杯	SK9552	脚口径	10.4	脚部端部ヨコナデ、外面タテハケ、内面ナデ	精良	並	橙5YR6/6	台径の1/2	002-07	
17	土師器	鉢	SK9552	残高	9.0	外面ヘラミガキ、内面ヨコハケのちヘラミガキ	精良	並	明褐7.5YR5/6	—	002-05	
18	土師器	甕	SK9552	口径	13.6	口縁部ヨコナデ、体部外面タテハケ、内面ナデ	微細な白色粒含む	並	にぶい黄橙10YR7/3	口径の1/4	001-05	
19	土師器	甕	SK9552	口径	15.2	口縁部ヨコナデ、体部外面タテハケ、内面ヨコハケ	1mm程度のクサリ礫含む	並	灰白2.5Y8/2	口径の1/4	001-04	
20	土師器	甕	SK9552	口径	17.4	口縁部ヨコナデ、体部外面タテハケ、内面ヘラズリ	並	並	外:黒10YR2/1 内:浅黄橙10YR8/4	口径の1/4	002-01	
21	土師器	甕	SK9552	口径	22.4	口縁部ヨコナデ、体部外面タテハケ、内面ヨコハケ	並	並	外:橙2.5YR6/6 内:灰白10YR8/2	口径の1/8	001-06	
22	土師器	甕	SK9552	底径	17.2	外面タテハケ、端部ヘラズリ、内面ヘラズリ	2mm以下の白色粒多量に含む	並	外:にぶい黄橙10YR6/3 内:橙7.5YR6/6	底径の1/4	002-02	
23	須恵器	杯蓋	SK9552	残高	2.6	外面クロナズリ、内面クロナデ、内面頂部ナデ	並	並	灰7.5Y5/1	全体の約40%	001-02	
24	須恵器	杯	SK9552	口径 器高	12.0 3.9	口縁部ヨコナデ、体部クロナデ、底部ナデ	微細な砂粒含む	並	外:灰7.5Y4/1 内:灰N6/1	底径の1/4	002-06	
25	須恵器	杯	SK9552	高台径	13.8	体部クロナデ、貼付高台	並	並	外:灰5Y4/1 内:灰5Y5/1	高台径の1/10	外面に火がかり痕	001-08
26	須恵器	皿	SK9552	口径	16.6	体部クロナデ、底部外面クロナズリ	並	並	外:オリーブ黒色7.5Y3/1 内:灰黄2.5Y6/2	口径の1/8	外面に火がかり痕とうすい自然釉	001-07
27	須恵器	壺	SK9552	口径	6.8	口縁部ヨコナデ、体部クロナデ	微細な白色粒含む	並	外:灰白7.5Y7/1 内:灰5Y5/1	口径の1/4	肩部に灰被り痕	002-03
28	須恵器	盤	SK9552	残高	6.7	口縁部ヨコナデ、外面ナデ、内面クロナデ	並	並	外:灰5Y6/1 内:灰黄2.5Y6/2	—	002-04	
29	弥生土器	広口壺	SK9552	—	—	外面粗い条線、口縁内側に条線で波状文、口唇部に凹凸の装飾	1mm以下の砂粒を多量に含む	にぶい黄橙10YR6/4	口径の1/8以下	—	024-02	
30	土師器	鍋	SK9552	口径	9.5	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	並	並	にぶい黄橙10YR7/3	口径の1/4	ミニチュア	025-06
31	土師器	杯	SK9553	口径 器高	12.1 2.3	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	微細な砂粒を含む	並	橙7.5YR6/6	完存	—	005-04
32	土師器	杯	SK9553	口径 器高	13.0 2.9	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	1mm以下の砂粒を多量に含む	並	外:浅黄2.5Y7/3 内:浅黄橙10YR8/3	口径の1/2	—	005-01
33	灰釉陶器 (転用硯)	椀	SK9553	高台径	6.8	体部クロナデ、底部に回転糸切痕、貼付高台	並	並	灰白2.5Y7/1	高台部のみ残存	—	025-02
34	土師器	甕	SK9553	口径	15.2	口縁部ヨコナデ、体部内外面ナデ	微細な砂粒を多量に含む	並	灰白2.5Y8/2	口径の1/6	—	005-02
35	土師器	甕	SK9553	口径	21.0	口縁部ヨコナデ、体部外面タテハケ、内面板ナデ	微細な砂粒を多量に含む	並	外:黒7.5YR2/1 内:にぶい橙7.5YR7/4	口径の1/4	—	005-06
36	土師器	椀	SZ9554	口径	14.2	口縁部ヨコナデ、体部内外面ナデ	並	並	外:にぶい黄橙10YR6/3 内:にぶい褐7.5YR6/3	口径の1/2	—	005-05
37	黒色土器A	椀	SZ9554	口径 器高	15.5 5.7	口縁部ヨコナデ、体部内外面ヘラミガキ、底部ナデ	並	並	外:橙5Y6/8 内:黒5Y2/1	全体の約60%	—	025-01
38	土師器	茶釜	SK9533	口径 器高	10.7 16.6	口縁部ヨコナデ、体部外面タテハケ・ヘラズリ、内面ナデ	緻密	並	外:浅黄2.5Y7/3 内:にぶい黄橙10YR7/3	全体の約70%	体部外面にスス付着	009-01
39	土師器	鍋	SK9533	口径	22.8	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ、内面板ナデ、底部ヘラズリ	緻密	並	外:浅黄2.5Y8/3 内:にぶい黄橙10YR7/4	口径の1/4	体部外面にスス多量に付着	009-03
40	土師器	鍋	SK9533	口径	40.2	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ、内面ナデ	緻密	並	外:黒褐2.5Y3/1 内:にぶい黄橙10YR7/3	口径の1/5	体部外面にスス付着	009-02
41	土師器	鍋	SK9547	口径	20.0	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ・ヘラズリ、内面ナデ・ヘラズリ	4～5mmの小石含むが良好	並	灰白10YR8/2	口径の1/4	—	007-04
42	土師器	鍋	SK9537	口径	23.6	口縁部ヨコナデ、体部外面タテハケ、内面板ナデ	並	並	にぶい黄橙10YR6/3	口径の1/8	—	007-03
43	施釉陶器	皿	SK9551	口径 器高	11.3 2.3	体部クロナデ、底部内外面ナデ、貼付高台、全体に灰釉	微細な砂粒を多量に含む	並	釉:灰オリーブ5Y5/3 素地:浅黄2.5Y7/3	高台径の1/3	体部外面にスス付着	006-02
44	施釉陶器	椀(天目茶椀)	SK9551	口径	12.6	体部クロナデ、外面下半クロナズリ、椀部に鉄釉	微細な砂粒を多量に含む	並	釉:黒2.5Y2/1 素地:にぶい褐7.5YR6/3	口径の1/4	—	006-01
45	土師器	壺	SK9551	口径	10.0	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ、内面板ナデ	並	並	にぶい黄橙10YR7/3	口径の1/7	内面ににぶい赤褐色(2.5YR4/3)の付着物がある	006-05
46	土師器	鍋	SK9551	口径	24.0	口縁部ヨコナデ、体部内外面ナデ	微細なクサリ礫を多量に含む	並	にぶい橙7.5YR7/4	口径の1/7	—	006-04
47	土師器	鍋	SK9551	口径	33.4	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ、内面ナデ	並	並	外:黒褐10YR3/1 内:にぶい黄橙10YR6/3	口径の1/10	体部外面にスス付着、口縁部のゆがみ大きい	006-03
48	須恵器	杯	SK9551	高台径	9.2	体部クロナデ、底部内面ナデ、貼付高台	1mm以下の白色粒を含む	並	灰10YR5/1	高台径の1/2	—	006-06
49	土師器	甕	SK9551	口径	16.2	口縁部ヨコナデ、体部外面タテハケ、内面板ナデか?	並	並	灰黄褐10YR6/2	口径の1/6	—	007-02
50	土師器	甕	SK9551	口径	11.0	口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ、内面板ナデ	並	並	外:にぶい黄橙10YR5/3 内:灰黄2.5Y7/2	口径の1/3	外面に黒色物付着	007-01

第Ⅳ－４表 第２次調査 出土遺物観察表（２）

番号	器種	器形	地区・遺構	法量(cm)		調整・技法の特徴	胎 土	焼成	色 調	残存度	備 考	登録番号
51	土師器	皿	SK9559	口径 器高	6.7 1.5	体部内外面ナデ	緻密	並	灰白10YR8/2	口径の 3/4	内面に工具痕	008-05
52	土師器	皿	SK9559	口径 器高	7.2 1.3	体部内外面ナデ	並	並	浅黄橙10YR8/3	口径の 1/2		008-06
53	土師器	皿	SK9559	口径 器高	8.3 1.1	体部内外面ナデ	微細な砂粒を含む	並	浅黄橙10YR8/3	口径の 1/4		010-06
54	土師器	皿	SK9559	口径	9.6	体部内外面ナデ	微細な砂粒を多量に含む	並	にぶい黄橙10YR7/2	口径の 1/4	口縁端部に油煙	010-04
55	無釉陶器	椀(山茶椀)	SK9559	高台径	6.4	体部口コナデ、底部外面に回転糸切痕、貼付高台	砂粒・小石を多量に含む	並	灰5Y6/1	高台径の 1/2	内面に自然釉付着	008-01
56	土師器	蓋	SK9559	残高	1.4	口縁部ココナデ、体部ナデ	微細な砂粒を多量に含む	並	外：にぶい黄橙10YR7/3 内：にぶい黄橙10YR7/4	底径の 1/4		008-07
57	土師器	蓋	SK9559	口径 器高	15.2 1.8	口縁部ココナデ	緻密	並	にぶい橙7.5YR6/4	口径の 1/4	口縁部外面に黒色物付着	008-04
58	白磁	長頸壺	SK9559	残高	4.2	頸部内外面口コナデ、肩部内面口コナデ	緻密	堅緻	釉：灰オリーブ7.5Y6/2 素地：灰白5Y7/1	頸部の 一部		025-05
59	土師器	茶釜	SK9559	口径	12.0	口縁部ココナデ、体部外面ハケ、内面ナデ・オサエ	微細な砂粒を多量に含む	並	浅黄橙10YR8/3	口径の 1/4		008-08
60	土師器	茶釜	SK9559	口径	16.0	口縁部ココナデ、体部外面ハケ、内面ナデ	微細な砂粒を多量に含む	並	浅黄2.5Y7/3	口径の 1/10		013-1
61	土師器	鍋	SK9559	口径	22.0	口縁部ココナデ、体部外面ハケ、内面ナデ	並	並	外：黒2.5Y2/1 内：浅黄橙10YR8/3	口径の 1/8	外面にスス付着	008-03
62	土師器	鍋	SK9559	口径	20.1	口縁部ココナデ、体部外面ハケ、内面板ナデ	並	並	外：にぶい黄橙10YR7/3 内：浅黄2.5Y7/3	口径の 1/4	外面にスス付着	010-03
63	土師器	鍋	SK9559	口径	21.0	口縁部ココナデ、体部外面ハケ・ナデ・ヘラケズリ、内面板ナデ	微細な砂粒を多量に含む	並	浅黄橙10YR8/4	口径の 1/4		011-03
64	土師器	鍋	SK9559	口径	22.5	口縁部ココナデ、体部外面ハケ、内面板ナデ	並	並	にぶい黄橙10YR7/3	口径の 1/4		008-02
65	土師器	鍋	SK9559	口径	22.0	口縁部ココナデ、体部外面ハケ・ヘラケズリ、内面ナデ	並	並	外：にぶい黄橙10YR7/3 内：にぶい黄橙10YR7/4	口径の 1/4	外面にスス付着	010-05
66	土師器	鍋	SK9559	口径	27.8	口縁部ココナデ、体部外面ハケ、内面板ナデ	緻密	並	にぶい黄橙10YR7/3	口径の 1/4		010-02
67	土師器	鍋	SK9559	口径	31.2	口縁部ココナデ、体部外面ハケ、内面板ナデ	微細な砂粒を多量に含む	並	浅黄2.5Y7/3	口径の 1/4	体部に穿孔?	013-02
68	土師器	鍋	SK9559	口径	31.6	口縁部ココナデ、体部外面ハケ、内面ナデ	並	並	外：にぶい黄橙10YR7/3 内：にぶい黄橙10YR7/4	口径の 1/4		013-03
69	土師器	鍋	SK9559	口径	31.4	口縁部ココナデ、体部外面ハケ、内面板ナデ	微細な砂粒を多量に含む	並	外：にぶい黄橙10YR7/3 内：浅黄橙10YR8/3	口径の 1/6	外面にスス付着	010-01
70	土師器	鍋	SK9559	口径	28.4	口縁部ココナデ、体部外面ハケ、内面板ナデ	並	並	にぶい黄橙10YR6/3	口径の 1/5		014-01
71	土師器	鍋	SK9559	口径	31.4	口縁部ココナデ、体部外面ハケ、内面ナデ・オサエ	微細な砂粒を多量に含む	並	外：黒褐10YR3/1 内：にぶい黄橙10YR7/4	口径の 1/6	外面にスス付着	014-03
72	土師器	鍋	SK9559	口径	28.2	口縁部ココナデ、体部外面ハケ、内面ナデ	微細な砂粒を多量に含む	並	外：橙2.5YR7/6 内：にぶい黄橙10YR6/3	口径の 1/6	外面にスス付着	011-02
73	土師器	鍋	SK9559	口径	30.8	口縁部ココナデ、体部外面ハケ・ヘラケズリ、内面板ナデ	微細な砂粒を多量に含む	並	灰白2.5Y8/2	口径の 1/6		014-02
74	土師器	羽釜	SK9559	口径	35.0	口縁部ココナデ、体部外面ヨコハケ、内面ナデ	微細な砂粒を多量に含む	並	外：にぶい黄橙10YR6/4 内：にぶい橙7.5YR6/4	口径の 1/8		011-01
75	石製品	摺臼	SK9559	残高	9.7	砂岩製	—	—	灰7.5Y6/1	下半部の 1/2		012-01
76	土師器	皿	SD9524	口径 器高	7.5 1.6	体部内外面ナデ・オサエ	微細な砂粒を多量に含む	並	にぶい橙7.5YR7/4	全体の約 70%		017-05
77	土師器	皿	SD9524	口径 器高	8.1 2.0	体部内外面ナデ・オサエ	微細な砂粒を多量に含む	並	灰白2.5Y8/2	全体の約 90%		017-03
78	土師器	皿	SD9524	口径 器高	8.6 2.0	体部内外面ナデ・オサエ	微細な砂粒を多量に含む	並	にぶい黄橙10YR7/3	全体の約 90%		017-04
79	土師器	皿	SD9524	口径 器高	8.2 2.0	体部内外面ナデ・オサエ	微細な砂粒を多量に含む	並	灰白10YR8/2	口径の 5/8		017-07
80	土師器	皿	SD9524	口径 器高	8.3 1.8	体部内外面ナデ・オサエ	微細な砂粒を多量に含む	並	浅黄橙10YR8/3	全体の約 40%		017-06
81	土師器	蓋	SD9524	口径	22.0	口縁部ココナデ、体部外面ナデ・オサエ、内面ナデ・ヘラケズリ	微細な砂粒を多量に含む	並	にぶい黄橙10YR7/4	口径の 1/4		016-04
82	土師器	茶釜	SD9524	口径	11.8	口縁部ココナデ、体部外面ナデ・オサエ、内面ナデ	微細な砂粒を多量に含む	並	にぶい黄橙10YR7/3	口径の 1/4		018-02
83	土師器	茶釜	SD9524	口径	19.8	口縁部ココナデ、体部外面ハケ、内面ナデ	微細な砂粒を多量に含む	並	外：にぶい黄橙10YR7/3 内：にぶい黄橙10YR7/4	口径の 1/4	外面にスス付着	017-02
84	土師器	鍋	SD9524	口径	21.9	口縁部ココナデ、体部外面ハケ、内面ナデ・板ナデ	微細な砂粒を多量に含む	並	にぶい黄橙10YR7/3	口径の 1/8	外面にスス付着	018-04
85	土師器	鍋	SD9524	口径	24.2	口縁部ココナデ、体部外面ハケ、内面ナデ	微細な砂粒含む	並	にぶい黄橙10YR7/2	口径の 1/4	外面にスス付着	019-04
86	土師器	鍋	SD9524	口径	22.2	口縁部ココナデ、体部外面ハケ、内面ナデ	並	並	にぶい橙7.5YR6/3	口径の 1/4		016-03
87	土師器	鍋	SD9524	口径	28.2	口縁部ココナデ、体部外面ハケ、内面ナデ	並	並	外：にぶい黄橙10YR7/3 内：にぶい黄橙10YR7/4	口径の 1/2	外面にスス付着	015-01
88	土師器	鍋	SD9524	口径	32.0	口縁部ココナデ、体部外面ナデ、内面板ナデ	並	並	外：にぶい橙7.5YR7/3 内：にぶい橙7.5YR7/4	口径の 1/8	外面にスス付着	018-03
89	土師器	羽釜	SD9524	口径	26.0	口縁部ココナデ、体部外面ヨコハケ、内面ナデ	並	並	にぶい黄橙10YR6/3	口径の 1/6	外面にスス付着	015-02
90	無釉陶器	捏鉢	SD9524	口径 器高	27.2 10.8	口縁部ココナデ、体部ナデ・オサエ、底部無調整	1mm前後の白色粒を多量に含む	並	明赤褐2.5YR5/6	口径1/5	内面に幅1mm弱の沈線が等間隔にみられる	017-01
91	無釉陶器	壺	SD9524	口径	11.4	口縁部ココナデ、体部内外面口コナデ	1mm以下の砂粒を多量に含む	並	外：灰黄褐10YR5/2 内：にぶい赤褐2.5YR5/4	口径の 1/4	肩部に「▽」の線刻	018-01
92	土師器	杯	SD9524	口径 器高	10.4 3.5	口縁部ココナデ、体部内外面ナデ・オサエ	微細な砂粒を多量に含む	並	にぶい黄橙10YR6/4	全体の約 50%		019-01
93	土師器	高杯	SD9524	脚部径	11.4	内外面ナデ、脚柱部内面無調整	微細な砂粒を多量に含む	並	にぶい黄橙10YR7/4	全体の約 60%		019-03
94	須恵器	杯蓋	SD9524	口径 器高	9.5 3.6	口縁部ココナデ、体部口コナデ、外面頂部ヘラ切後ナデ	微細な白色粒含む	並	灰5Y4/1	口径の 1/4		019-02
95	灰釉陶器	皿	SD9524	高台径	8.2	内面口コナデ、外面口コナデ、貼付高台	微細な砂粒を多量に含む	並	釉：オリーブ黄7.5Y6/3 素地：灰白2.5Y7/1	高台径の 1/4	内面に自然降下釉	016-02
96	施釉陶器	椀	SD9524	口径 器高	11.9 2.9	体部口コナデ、底部ナデ、貼付高台	並	並	釉：灰白2.5Y8/2 素地：灰白2.5Y7/1	口径の 1/5		016-01
97	土師器	鍋	SD9524	口径	40.2	口縁部ココナデ、体部外面ハケ・一部ヘラケズリ、内面ヨコハケ・ヘラケズリ	1mm弱の小石を含む	並	外：にぶい黄橙10YR7/4 内：灰黄褐10YR5/2	口径の 1/4		021-01
98	土師器	皿	SD9526	口径 器高	7.2 1.5	体部内外面ナデ・オサエ	並	並	浅黄橙10YR8/4	ほぼ完存	内面に工具痕	026-01
99	土師器	鍋	SD9526	口径	20.0	口縁部ココナデ、体部外面ハケ、内面板ナデ	並	並	外：黒2.5Y2/1 内：にぶい黄橙10YR7/2	口径の 1/4	外面にスス付着	026-03

第Ⅳ－５表 第２次調査 出土遺物観察表（３）

番号	器種	器形	地区・遺構	法量 (cm)		調整・技法の特徴	胎 土	焼成	色 調	残存度	備 考	登録番号
100	土師器	鍋	SD9526	口径	31.0	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ、内面板ナデ	並	並	にぶい橙7.5YR7/4	口径の1/6	外面にスス付着	027-02
101	土師器	鍋	SD9526	口径	34.0	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ、内面板ナデ	並	並	にぶい橙7.5YR6/4	口径の1/6		026-06
102	土師器	鍋	SD9526	口径	27.0	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ、内面板ナデ	並	並	外:にぶい黄橙10YR6/4 内:にぶい橙7.5YR6/4	口径の1/8	外面にスス付着	026-04
103	無釉陶器	甕	SD9526	残高	12.2	体部内外面ロクロナデ	微細な砂粒を多量に含む	並	外:にぶい黄橙7.5YR5/3 内:にぶい赤褐5YR4/3	口径の1/10程度		026-05
104	土師器	皿	SD9545	口径器高	8.0 1.8	体部内外面ナデ・オサエ	並	並	にぶい黄橙10YR6/4	口径の1/4		020-03
105	土師器	皿	SD9545	口径器高	8.7 1.5	体部内外面ナデ・オサエ	並	並	浅黄橙10YR8/3	口径の3/4	内面に工具痕	026-02
106	土師器	皿	SD9545	口径器高	7.8 0.6	体部内外面ナデ・オサエ	並	並	にぶい橙7.5YR6/4	口径の1/4		027-01
107	土師器	皿	SD9545	口径器高	7.4 0.55	体部内外面ナデ・オサエ	微細な砂粒を多量に含む	やや軟調	にぶい黄橙10YR7/4	全体の約60%		020-02
108	土師器	皿	SD9545	口径器高	14.0 2.4	体部内外面ナデ・オサエ	微細な砂粒を多量に含む	並	外:灰黄褐10YR5/2 内:灰黄2.5Y7/2	口径の1/6		023-04
109	土師器	鉢	SD9545	口径器高	33.8 14.1	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ・ヘラケズリ、内面ナデのち棒状工具による沈線で斜格子文	微細な砂粒を多量に含む	並	明褐7.5YR5/6	全体の約60%		024-01
110	土師器	鍋	SD9545	口径	21.2	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ、内面ナデ	微細な砂粒含むが密	並	外:浅黄褐10YR8/3 内:にぶい橙7.5YR7/4	口径の1/4		023-03
111	土師器	鍋	SD9545	口径	34.0	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ、内面ナデ	微細な砂粒含むが密	並	外:浅黄褐10YR8/3 内:にぶい黄橙10YR6/3 内:にぶい黄橙10YR7/4	口径の1/10	外面にスス付着	023-02
112	土師器	茶釜	SD9545	口径	10.0	口縁部ヨコナデ、体部上半内外面ナデ、体部下外面ハケ・ヘラケズリ、内面ヘラケズリ・ナデ	並	やや軟調	浅黄橙10YR8/3	全体の約60%		027-03
113	土師器	羽釜	SD9545	口径	33.8	口縁部ヨコナデ、体部内外面ナデ	並	並	にぶい黄橙10YR6/4	口径の1/5	外面にスス付着	019-05
114	施釉陶器	椀(天目茶椀)	SD9545	口径	14.2	体部内外面ロクロナデ、全面に鉄釉	並	並	釉:黒10YR1.7/1 素地:灰黄2.5Y7/2	口径の1/6		027-04
115	施釉陶器	椀	SD9545	口径	15.0	体部内外面ロクロナデ、外面下半ロクロケズリ、椀部に鉄釉	微細な砂粒を多量に含む	並	釉:浅黄2.5Y7/3 素地:灰黄2.5Y7/2	口径の1/8		020-06
116	無釉陶器	甕	SD9545	残高	8.1	体部内外面ロクロナデ	1mm前後の白色粒を多量に含む	並	外:にぶい赤褐5YR5/3 内:灰褐5YR4/2	口径の1/8以下	外面に自然釉がゴマメ状にかかる	020-01
117	無釉陶器	壺	SD9545	口径	11.0	体部内外面ロクロナデ	微細な白色粒多量に含む	並	表面:暗赤褐2.5YR3/3 断面:褐灰7.5YR4/1	口径の1/5		027-05
118	無釉陶器	甕	SD9545	残高	14.3	体部内外面ロクロナデ	1mm弱の白色粒を多量に含む	並	にぶい赤褐5YR5/3	口径の1/10以下		023-01
119	石製品	摺臼	SD9545	残高	7.1	凝灰岩製か?	－	－	灰7.5Y6/1	上半部の1/4	臼面の磨耗が著しい	022-01
120	土師器	甕	SD9545	口径	15.4	口縁部ヨコナデ、体部外面タテハケ、内面ヨコハケ	微細な砂粒を多量に含む	やや軟調	灰白2.5Y8/2	口径の1/4		020-07
121	灰釉陶器	皿	SD9545	口径器高	11.5 1.9	口縁部ヨコナデ、体部ロクロナデ、貼付高台、灰釉漬け掛け	並	並	釉:灰白10Y8/1 素地:灰黄2.5Y7/2	口径の1/4		020-04
122	緑釉陶器	皿	SD9545	口径器高	11.4 2.0	口縁部ヨコナデ、体部ロクロナデ、底部に回転糸切痕、貼付高台	並	堅緻(須恵質)	釉:灰緑色 素地:灰N5/	全体の約50%	見込み部に圈線	025-03
123	無釉陶器	椀(山茶椀)	SD9545	高台径	8.0	体部内外面ロクロナデ、底部に回転糸切痕、貼付高台	4mmの小石含む	並	灰白5Y7/1	高台径の2/3	高台底に粉殻圧痕	020-05
124	無釉陶器	椀(山茶椀)	SD9545	高台径	6.9	体部内外面ロクロナデ、底部糸切後ナデ、貼付高台	微細な黒色粒を多量に含む	並	灰白2.5Y7/1	高台径の3/4		020-08
125	緑釉陶器	椀	SK9544	高台径	8.8	体部内外面ヘラミガキ、貼付高台	緻密	堅緻(須恵質)	釉:淡灰緑色 素地:灰白5Y7/1	高台径の1/4	見込み部に陰刻花文	025-04

15次・91次といった字古里から中垣内にまたがった東西・南北それぞれ150～180m程度の範囲におおむね当てることができるようである。一方第4次・5次から現在の博物館の下の第67次・71次・第81－2次といった字古里の北中部には鎌倉時代の区画溝とみられる遺構や墓が複数見つかっており、中世の中でも土地利用の移動がみてとれるようである。詳細については全体の総括的な報告を待ちたい。

この他に当該期のS K 9553の南にある直径0.4～1.0mのピットや小土坑が東西約7 m南北約5 mの範囲に密集するS Z 9554からは室町時代の遺物に混じって斎宮Ⅱ－3～4期の遺物が出土しており、黒色土器の椀などが出土している点が注目される。

### （３）時期不明の遺構

掘立柱建物は調査段階から3棟が確認されているが、今回柱穴の出土遺物を判別できなかったため明確に時期の判断ができなかった。しかしいずれも北

を基準に西へ64°～67°の方向でおおむね揃っており、S B 9539は室町時代とした区画溝群と重複した関係にあるものの、S B 9529・9548はそれぞれS D 9525・9545とやや接近気味ではあるが方向を揃えた位置関係にあるように見える。複数の区画溝がそれぞれ一定の時間幅の中で改修等を受けて掘削されたり埋め戻されたりしていたと考えると、これら3棟の建物も室町時代の区画溝と近い時期のものだと判断できるのではないだろうか。

## 4 出土遺物の概要

### （１）斎宮Ⅰ期（飛鳥・奈良時代）の遺物

先にも述べたとおり調査区全体から出土しており、室町時代の遺構からもコンスタントに混入してみられるが、当該期の遺構と断定できたものは少ない。土師器供膳具では精製品は少なく、杯Gとされる椀状のもの（1・14・15・92）が多い。全体に煮沸具



が目立ち、また周辺の調査区ではみられたような硯類や施釉陶器も第2次調査では見つかっていない。

一方、本調査区や南の第102-5次調査では少量ではあるが斎宮Ⅰ-1期（飛鳥時代）頃の遺物も出土している（7・8・94など）。平成18年度までの発掘調査では、飛鳥時代から奈良時代にかけての初期の斎宮の中心は、史跡西部でも字中垣内の南西部あたりとの認識がかたまりつつあるが、こうした斎宮のごく初期の遺構・遺物の広がりについても注意を払っていく必要があるだろう。

このほか特殊な遺物では土師器鍋のミニチュア（30）がある。

### （2）斎宮Ⅱ期（平安時代）の遺物

第2次調査区内では当該期の明確な遺構は見つからないが、斎宮の中心が史跡の東部に移ったこの時期においても一定量の遺物が出土している点は注目できる。しかし 時期的にみると斎宮Ⅱ期の中でもⅡ-3～4期に限られ、9世紀前半や11世紀～12世紀のものは見つからない。

緑釉陶器も少量ながらみられ、（125）のように陰刻花文を持つ椀も出土している点は注目できる。

### （3）斎宮Ⅳ期以降（中世）の遺物

斎宮Ⅳ期にあたる鎌倉時代の遺物は渥美窯のⅡ期新段階以降の山茶碗や土師器皿、鍋がみられるが量的には多くはなく、遺構内でも比較的摩滅した状態で出土するものが多い。

全体に最も目立つのは室町時代の土師器の煮沸具で、ほとんどが外面に多量のススを付着させており、使用の痕跡が著しい。こうした煮沸具を溝や土坑に多量に投棄する様相は東接する第76-15次でも確認されており、周辺では砥石に転用された五輪塔も複数出土している。また、茶釜形の煮沸具がやや目立つようで、常滑産の貯蔵具や瀬戸産とみられる天目茶碗が複数見つかり、一般的な農村よりやや富裕な生活様式がうかがわれる。時期的にさかのぼるが白磁の壺（58）も史跡西部で散見され、威信財ともいえる器物は、あるいは墓などに伴ったものかもしれない。

## 5 まとめ

今回は、古里遺跡として発掘調査された斎宮跡の初期の調査成果を、再整理し、公開・活用していくための作業の中間報告のような形で概要を示した。当然のことながら第2次調査は広大な斎宮跡古里地区の一部にすぎず、まだ、その一次的な整理作業が終了したにすぎない。しかしその作業を介しても、斎宮跡で最も古い調査区周辺ですら、依然として史跡解明のための課題が多数残されていることが分る。こうした斎宮研究の深化を進めるうえでも、かつての調査の再検討に耐えうる情報の整理と公開を今後も進める必要性が再認識される。

（大川勝宏）



調査区全景（西から）



調査区全景（北から）





SK9520・9521・9522（東から）

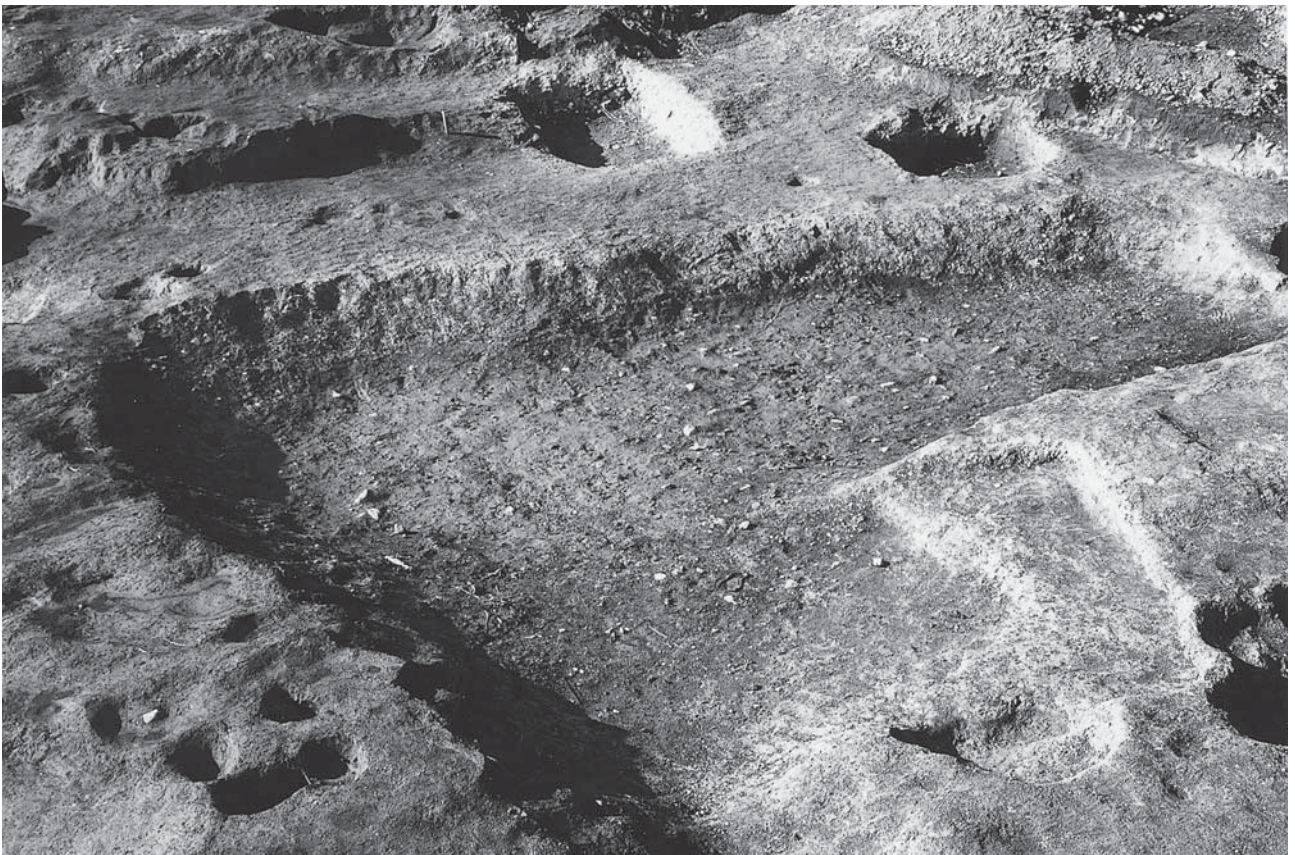


調査区北東部（南西から）



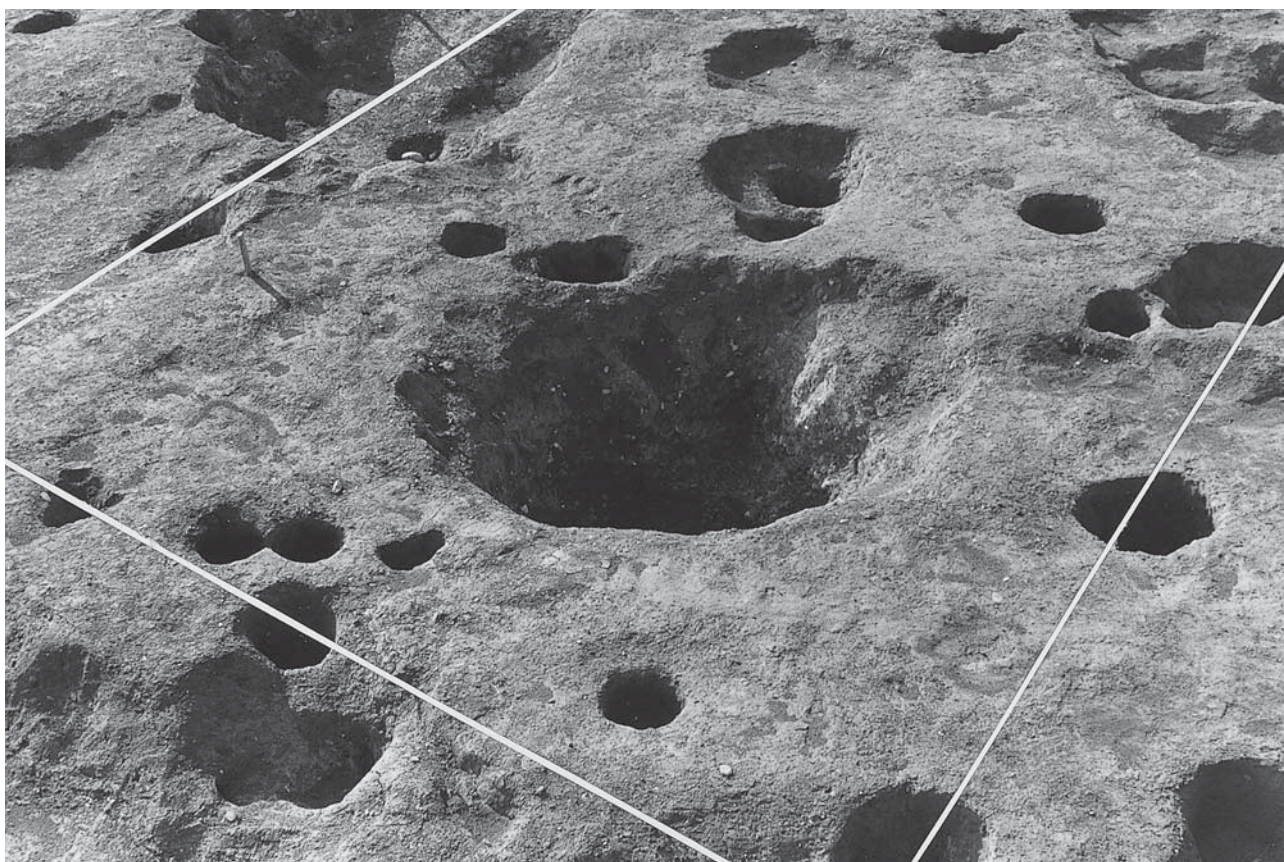


調査区西部（東から）



SK9537・9538（南東から）





SE9543・SB9529 (東から)



調査区南西部 (東から)



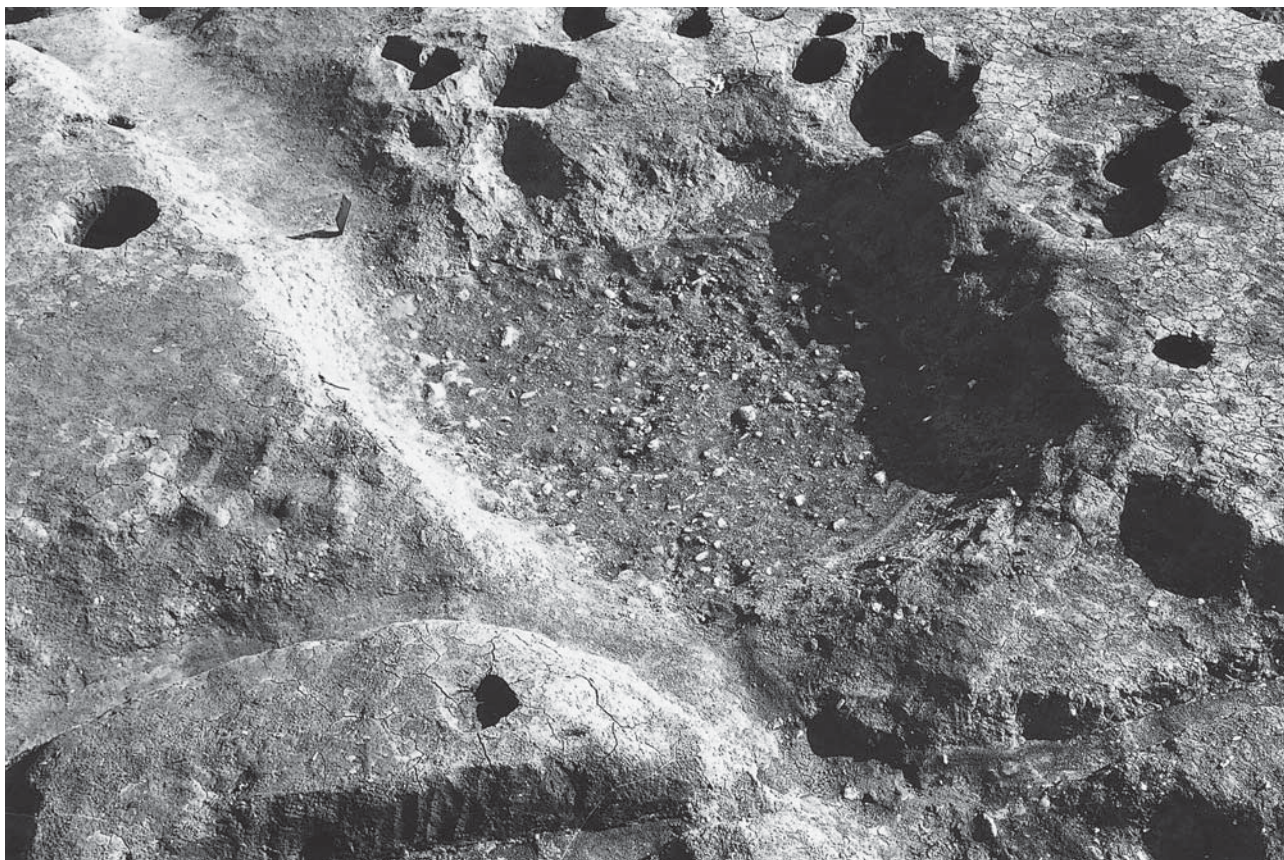


SK9553 (東から)

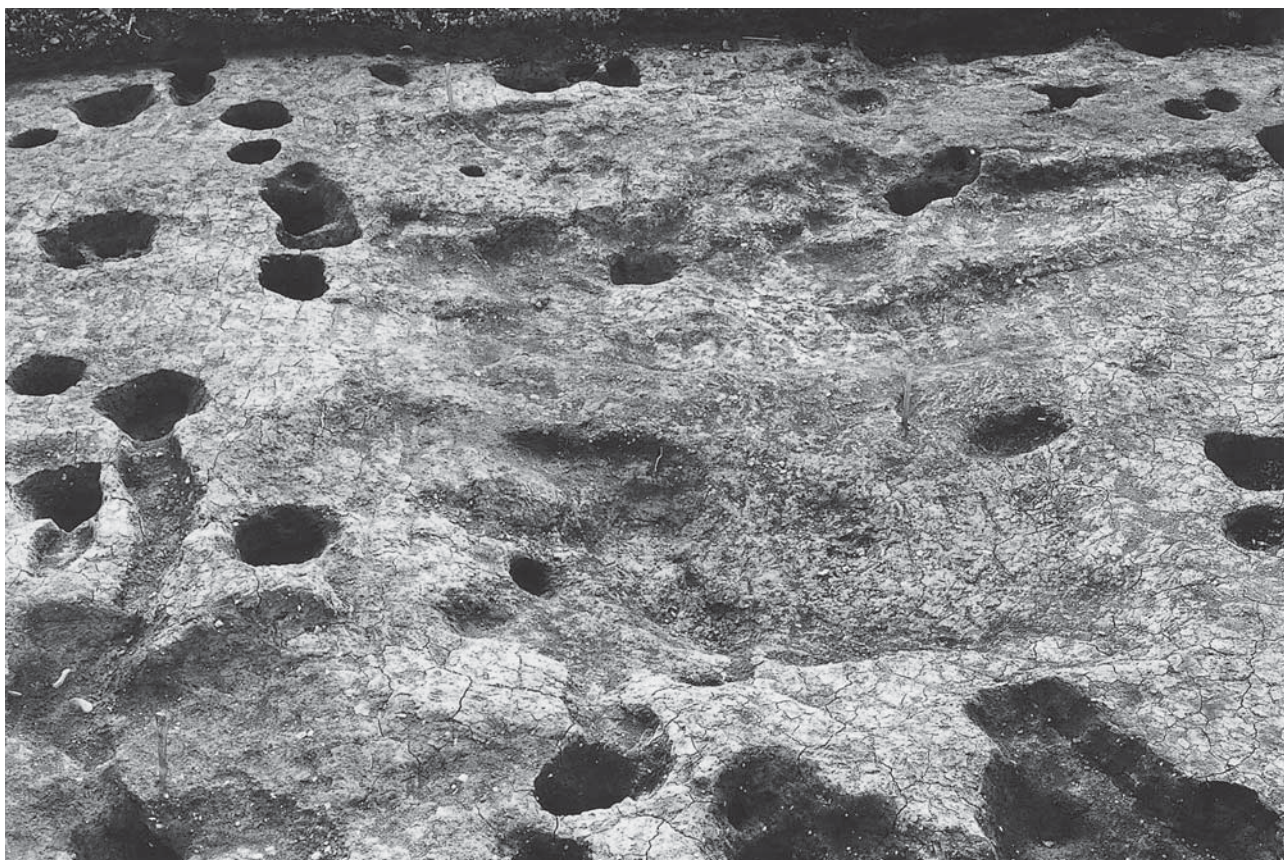


SD9545・9555・9528・9557・SK9556・9557 (東から)





SK9559 (北西から)



調査区南東部 (北から)



# 報 告 書 抄 録

ふりがな	しせきさいくうあと　へいせいじゅうななねんとはつかつちょうさがいほう							
書名	史跡斎宮跡　平成17年度発掘調査概報							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	泉　雄二・大川勝宏・小湊　学・水橋公恵							
編集機関	斎宮歴史博物館							
所在地	〒515-0325　三重県多気郡明和町竹川503　TEL0596-52-7027							
発行年月日	西暦　2007年　3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ　　ド 市町村　　　遺跡番号		北　緯 〃　〃　〃	東　経 〃　〃　〃	調査期間	調査面積	調査原因
さいくうあと 斎宮跡	た　き　く　ん　め　い　わ　ち　ょう 多気郡明和町 さいくう　たけがわ 斎宮・竹川	24442	210	34° 31′ 55″ ～ 34° 32′ 30″	136° 36′ 16″ ～ 136° 37′ 37″	20050401 ～ 20060331	630㎡ (第146次) 230㎡ (第148次)	学術調査
所収遺跡名	種　別	主　な　時　代		主　な　遺　構		主　な　遺　物		特記事項
斎宮跡第146次	官　衙	弥生　奈良　平安 鎌倉以降		掘立柱建物 掘立柱塀 土坑　井戸 溝		弥生土器　土師器 須恵器　灰釉陶器 陶磁器　墨書土器		史跡西部の 範囲確認調査
斎宮跡第148次	官　衙	平安　鎌倉以降		土坑　溝		土師器　須恵器 陶磁器		方格地割内の 区画道路の交 差点
斎宮跡第2次	官衙・集落	弥生　古墳　奈良 平安　鎌倉以降		方形周溝墓 掘立柱建物 土坑　道路跡 溝　墓		縄文土器　弥生土器 土師器　須恵器 陶器　瓦器　土馬 蹄脚硯		史跡指定の端 緒となる遺跡
要　約	<p>第146次は、史跡西部の中垣内地区で飛鳥・奈良時代の初期斎宮の置かれた可能性が高い地域を調査。方位にのる掘立柱建物・塀と、斜行する掘立柱建物を確認。斜行する建物群が古いが、掘立柱建物・塀の時期は確定できなかった。</p> <p>第148次は、史跡斎宮跡の東部の方格地割内の西加座南区画の調査で、方格地割内東西道路と西加座南区画を東西に分断する中央小道路の交差点部分を調査。東西道路北側溝と南北小道路側溝を確認。</p> <p>第2次は、史跡西部古里地区の調査の再整理で、多数の建物跡や溝と道路跡を再確認することができた。</p>							

---

史跡 齋宮跡

平成17年度

発掘調査概報

2007年3月

編集・発行 齋宮歴史博物館

印刷 株式会社アイブレーション

---















